

宅田遺跡

発掘調査報告書

1983

山形県

山形県教育委員会

宅田遺跡

発掘調査報告書

1983

山形県

山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和57年度に実施した県営「月光川中小河川改修による高瀬川河川改修事業」にかかる「宅田遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

発掘調査では、平安時代前半から中葉にかけての建物跡をはじめ、多数の土器が出土し、先人の生活と古代出羽国にかかわる貴重な手がかりを得る事ができました。

これらの文化遺産は、私達の祖先が自然環境と長い歴史の中で創造し、育んできたものであります。これを理解し、愛護することは、祖先の歴史を知ると同時に後世の人々に伝え残すことが現代に生きる私達の重要な責務であると考えます。

近年、県内各地での開発事業が増加するに伴い、埋蔵文化財とのかかわりが増加の傾向にあります。従って県民生活の文化的向上、地域環境の整備など、同じ立場からこれらの調整と調和を求め、今後とも埋蔵文化財の保護のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本調査にご協力をいただいた遊佐町教育委員会ならびに関係各位に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する皆様の理解を深め、その保護普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和58年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　　言

1 本報告書は、山形県土木部の委託を受け、山形県教育委員会が昭和57年度に実施した県営「月光川中小河川改修事業による高瀬川改修事業」にかかる「宅田遺跡」の発掘調査報告書である。

2 遺跡所在地・調査体制は下記の通りである。

遺跡名　宅田遺跡（AYZTD）　遺跡番号（2109）

所在地　山形県飽海郡遊佐町大字野沢字野沢道32他

調査期間　自　昭和57年8月2日～至　昭和57年10月1日（延40日）

調査主体　山形県教育委員会

調査協力　遊佐町教育委員会・庄内支庁河川改良課・庄内教育事務所埋蔵文化財分室・下野沢部落

調査担当者　主任調査員：佐々木洋治、現場主任：阿部明彦、調査員：佐藤正俊、名和達朗（山形県教育庁文化課）

調査補助員　高橋信夫（遊佐町中央公民館）・三浦　勝（日本大学学生）

3 挿図縮尺は、遺構縮尺で、1/20, 1/40, 1/80, 1/100を用い、遺物では1/2, 1/3, 1/4を用いている。

また、各々にスケールを入れ明示した。写真図版の遺物では、実測し得たもの1/2, 拓影図で示したもの1/3, 小破片で重要と思われた物等については1/1, 1/2縮尺を原則としている。

4 挿図・表、本文中で使用した記号については、各挿図ないし本文中にその用法を示した。また、図表における記号、文章の省略等についても、表註の形で各説明を加えている。

5 本文中の遺物の提示は、調査結果からI～III層、ないしI～II層、IV層出土等の他、各遺構単位を原則としている。遺構検出面での遺物については、一部III層出土としてその取り上げを行ったが、基本的にII層中に含めてよいと判断している。また、主体的にIII層を掘り下げ、IV層中の遺物を検出したのは6グリッドに限られ、その面的な追求までには遺憾ながら至らなかった。

6 本報告書の作成は、阿部明彦・渋谷孝雄が担当し、両名の協議を得てVI章1・2、VII章の製作技術の検討、I～II層・SK7・IV層の土器組成を渋谷、その他を阿部が各分担した。編集は、阿部明彦・渋谷孝雄があたり、全体については、佐々木洋治が総括している。

目 次

I 調査の経緯		S D 4 溝跡	18
調査に至る経過	1	3 土 壤	18
II 遺跡の位置と環境		VI 遺 物	
1 遺跡の立地と環境	3	1 出土土器の分類	24
2 周辺の遺跡	3	1) 土師器 (I)	24
III 調査の方法と経過		2) あかやき土器 (II)	24
1 調査の方法	5	3) 須恵器 (III)	30
2 調査の経過	5	2 製塩土器、土製品、石製品	30
IV 遺跡の概観		鉄製品	30
1 遺跡の層序	7	VII まとめと考察	
2 遺構と遺物の分布	9	1 出土土器の検討	46
a 遺構の分布	9	種別の土器組成	46
b 遺物の分布	12	器種別の土器組成	47
V 遺 構		製作技術の検討	47
1 堀立柱建物跡・柱列跡	15	a 土師器	47
S B 2 建物跡	15	b あかやき土器	48
S B 3 建物跡	15	C 須恵器	48
S A 6 柱列跡	15	I ~ II, S K 7, IV層の土器組成	50
2 溝 跡	18	平安時代土器の研究と地域性	51
S D 1 溝跡	18	出土土器の年代とその前提	53

插 図 目 次

第1図 遺跡概要図	2	第19図 土器分類図 (2)	27
第2図 遺跡位置図	2	第20図 土器分類図 (3)	29
第3図 周辺の平安時代遺跡	4	第21図 あかやき壙底部・土師器壙底部	33
第4図 グリッド配置図	6	第22図 あかやき壙・壙口縁	34
第5図 土層図 (1)	7	第23図 あかやき壙・壙口縁・体部	35
第6図 土層図 (2)	8	第24図 あかやき壙・壙体部	36

第7図 遺構配置図	10	第25図 あかやき壠・塙体部・底部	37
第8図 遺物分布図	11	第26図 須恵器壠・壠体部	38
第9図 土器出土状況（1）	12	第27図 須恵器壠・壠体部他	39
第10図 土器出土状況（2）	13	第28図 I～III層出土土器（1）	40
第11図 S B 2 建物跡	16	第29図 I～III層出土土器（2）	41
第12図 S B 3 建物跡・S A 6 柱列跡	17	第30図 I～III層出土土器（3）	42
第13図 S D 1 溝跡	19	第31図 IV層出土土器（1）	43
第14図 S D 4 溝跡	20	第32図 IV層出土土器（2）他	44
第15図 S K 7 土壙	21	第33図 S K 7 土壙出土土器他	45
第16図 S K 7 遺物出土状況（1）	22	第34図 土器組成グラフ	46
第17図 S K 7 遺物出土状況（2）	23	第35図 <small>主層面・あかやき土壙環口・既往歴度グラフ 須恵器壠内部内面ミガキ模様図</small>	49
第18図 土器分類図（1）	25	第36図 日本海沿岸の主要遺跡	51

図版目次

図版1 調査風景	図版15 I～III層・S K 7 出土須恵器他
図版2 遺物出土状況	図版16 IV層出土あかやき壠・塙
図版3 S B 2・3 近景	図版17 IV層出土あかやき壠・須恵器
図版4 S B 2 柱穴	図版18 遺構内出土須恵器他
図版5 S B 2・3 柱穴, S A 6 柱穴	図版19 I～III・IV層出土土器
図版6 S D 1 全景・土層断面	図版20 I～III・E P 32出土あかやき坏
図版7 S D 1 土層断面	図版21 I～III層出土あかやき壠・羽釜
図版8 S D 1・4 土層断面, 完掘状況	図版22 I～III層出土須恵器・製塩土器
図版9 S K 7 遺物出土状況	図版23 IV層出土あかやき坏
図版10 S K 7 プラン検出, 土層断面	図版24 I～III・IV層出土あかやき壠他
図版11 IV層面掘り下げ部分	図版25 IV層出土あかやき壠・須恵器坏
図版12 S X 8 検出状況	図版26 S K 7 出土土師器坏他
図版13 I～III層出土あかやき壠・塙	図版27 土製品・石製品・土師器底部
図版14 I～III層出土あかやき壠他	図版28 あかやき坏底部ヘラ描文他

〈付表〉

表-1 遺構一覧…9	表-2 R P 遺物一覧…9	表-3 出土遺物数量一覧（1）…14
…14 表-4 S K 7 下層面出土遺物一覧…23	表-5・6 出土遺物観察表…31・32	
表-7 出土遺物数量一覧（2）…46	表-8 図示土器組成表…50	

I 調査の経緯

調査に至る経過

宅田遺跡の位置する山形県飽海郡遊佐町は、東に出羽丘陵、西に庄内北部砂丘、さらに北辺を出羽富士鳥海の山脈で囲まれ、古代出羽国の中核を成す「飽海平野」の北半を占める。平野部には、鳥海山麓や出羽丘陵に源を発す清流が幾筋か西に向い、南から新井田川、荒瀬川・日向川、月光川・高瀬川の各河川が微地形を形成しながら日本海へと注いでいる。

これまで、この地域の古代遺跡に対する調査は、遊佐町南縁の下小松～上小松地区にかけて位置する前田・地正面・佐渡・塙田の各遺跡例を除けば必ずしも充分ではなく、その実態は明確ではない。町内では、これまでに行われた分布調査から167ヶ所の遺跡が知られ、その内49ヶ所は古代出羽国にかかる奈良末～平安時代に帰属する時期のものと考えられる。中でも町の中央部～東側一帯にひろがる大楯遺跡群（集落・官衙？・櫛）、出羽丘陵東麓の須恵器窯跡群といった内容を持ち、史跡「城輪柵遺跡」を中心とする古代出羽国を考える上で飽海平野南半分の該期遺跡群同様重要な位置を占める。

こうした平安時代の遺跡の一つである「宅田」遺跡は、山形県土木部の計画する「月光川中小河川改修による高瀬川改修事業」に直接かかる事となり、事前の調整後緊急発掘調査を実施し、記録保存の措置を構ずる事となったのである。

調査に至るまでには、以下に述べるような分布調査や打合せ等会議が重ねられた。昭和56年10月5・6日、遺跡範囲・面積・遺物包含層・保存状況の確認調査、および河川改修事業区域と遺跡範囲の関連の調査、調査者：佐藤庄一・安部実（庄内教育事務所埋蔵文化財分室）。昭和57年7月、施工区域内（調査対象地）現況の確認、立木・畠作物の作付状況等の確認。調査者：阿部明彦・長橋至（山形県教育庁文化課）。

第1回打合せ、昭和57年7月、用地買収の状況、施工区域の測量状況、施工開始時期と調査期間、その他施工者側の要望、調査者側の要望、地元住民の要望等について種々提出され、遊佐町教育委員会、県庄内支庁土木部河川改良課、県教育庁文化課の三者で各協議を行った。第2回打合せ、前記協議打合せを踏え、遊佐町下野沢区長、遊佐町教育委員会、庄内支庁土木部河川改良課、庄内教育事務所、県教育庁文化課の5者が集まり、調査着手前最後の打合せ会議を昭和57年7月15日、遊佐町役場で行う。そこでは、以下に述べる調査体制他の要項が検討され、承認と了解および協力体制が協議された。

調査主体：山形県教育委員会、調査期間：昭和57年8月2日～同年10月1日（現場）、調査対象地：宅田遺跡（18,000m²）の内、施工予定部分3,000m²、調査協力：庄内支庁河川改良課、庄内教育事務所、遊佐町教育委員会、地元下野沢部落他である。



第1図 遺跡概要図



第2図 遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地と環境

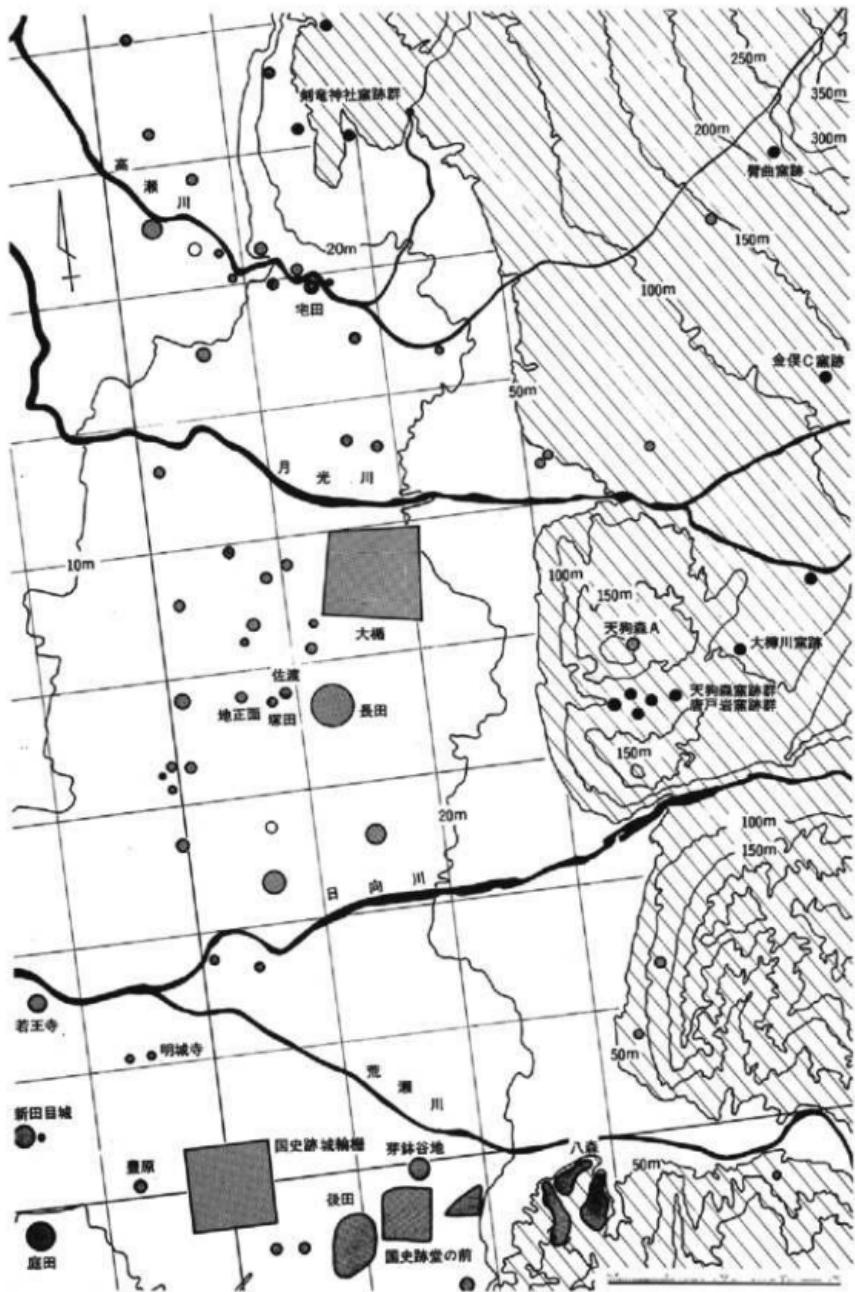
宅田遺跡は、高瀬川の中流部左岸に位置し、標高10.00m～10.50mを測る。野沢地区の西北部で野沢川と地抜川が合流し、高瀬地区の南を限りながら西流する「庄内高瀬川」は、下野沢～富岡地区で何度も蛇行を繰り返し、その周囲に自然堤防や後背湿地等を形成する。

宅田遺跡の位置する地点も、蛇行により北東へ延びる張出し部の標高10.00mラインで囲まれる微高地にあたり、周囲より一段高い。遺跡の現況は、大半が畠地で、若干の荒地や一部南側に水田がある。南縁を限るものと予想された。こうした高瀬川の流域には、宅田遺跡を含めて10数ヶ所の平安時代の遺跡が点在し、「城輪柵遺跡」東西軸線上の計画的な配置と考えられる関連施設や、南北軸線上各40～50町前後に顯著な計画的村落の配置とは好対照をなす遺跡群と思われる。飽海平野における条里制・方格地割の実体については未だ充分な資料がこれまでの調査からは得られていない。暗中模索の状態と言わねばならない。しかし、平安時代の出羽国衙に擬定される「城輪柵遺跡」の近年の調査成果からは、遺跡全体に121m(400尺)の地割が想定できる事、外郭線が磁北を基準とする事等から見れば、仮説として「南北軸が磁北を指し、1町単位を400尺(120m前後)とする」方格地割を想定できる可能性がある。これに対しても、遺存する条里関連地名や古道、小尺等から1町単位を109mとして方格地割を想定する考え方も提起されている。^(註-4)

宅田遺跡は、上記いずれにしろ「城輪柵遺跡」から60数町ないし70町の距離があり、その周縁部に位置する事となる。またこれら平安期遺跡群の細別された形での開始時期も吟味すべき要件として加えねばならないだろう。

2 周辺の遺跡

宅田遺跡の周辺には、高瀬川に沿う10数ヶ所の平安期遺跡がある。いずれの遺跡も未調査で、その性格は不明であるが、西隣りにある上高田遺跡からは井戸枠に用いられた縦板、柱痕等の出土があり、集落跡と考えられる。距離的にやや離れるが、日向川と月光川のほぼ中間地点、下小松地内に位置する前田・地正面・佐渡・塙田の4遺跡は、県教委により昭和52年～同54年の間、計5次にわたって調査され、特に地正面遺跡では握立柱建物跡・井戸跡・土壤他遺構、およびそれらに伴う一括遺物が検出された。時期的には9世紀前半^(註-6)まで遡り得る一群とそれに後続する一群と考えられる。同時期の、藤島町平形遺跡の調査知見、成果などを合せて、庄内における平安時代遺跡の性格と、背景にある文化・地域圈を考える上で、画期となつた遺跡として特筆される。窯跡では、奈良末～平安初の刺籠神社西窯跡群^(註-7)、および蕨岡の鞍部に群集する9世紀中葉代の天狗森・唐戸岩窯跡群^(註-8)が注目される。^(註-9)



第3図 周辺の平安時代遺跡

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

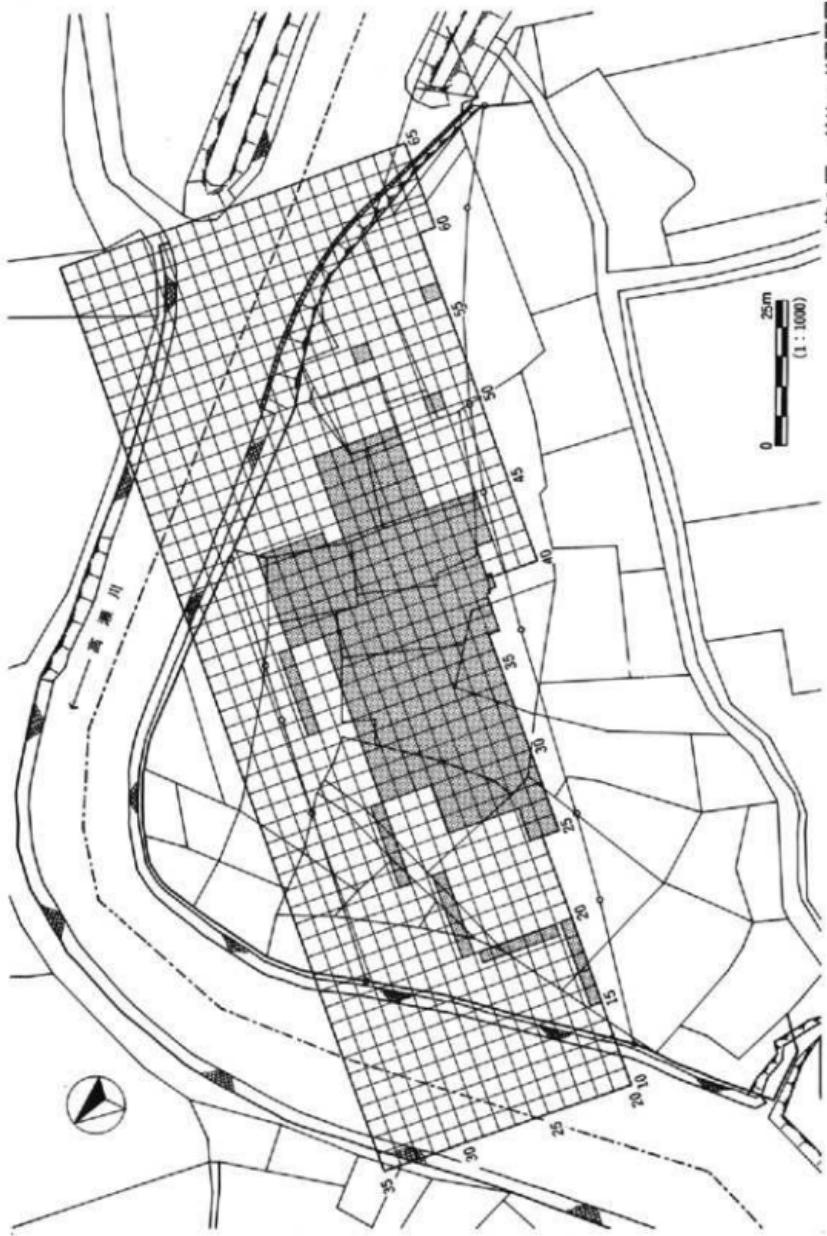
調査区の設定は、調査対象範囲が河川改修施工区域に限定されることから、新河道の計画線形にできるだけ沿うものとした。グリッドの基準杭は工事測量用に設置されたNo44杭を基点とし、西→東に向うX軸、南→北に向うY軸をとり、それぞれ3mで区分した。Y軸は、磁北を基準にするとN-18°20'-Eを測る。グリッド名は、XYの交点左上(北西隅)の座標を代表させ「40-20G」等と呼ぶ。遺物の取り上は、耕作土I・I'層、遺物包含層をII層、遺構確認面をIII層直上面として区別し、順次掘り下げた段階毎に土層セクション、遺物出土レベルを考慮しながら行った。IV層出土とした遺物は、調査終了間際に遺構検出面下にさらに一枚の包含層を認めたことから急速掘り下げて検出したものである。遺構内出土の遺物では、遺構プラン確認段階、および遺構底面の検出段階で平面図・レベルを作成・記録したものがある。包含層においても一括遺物等についてはRP№を付けてその出土状況を記録している。

遺構の名称は、遺構を「S」、構成因子を「E」とし、大まかな性格を標示する以下のアルファベットを併用した。「A」柱列、「B」建物跡、「D」溝跡、「K」土壙、「P」柱穴等である。遺構番号は、基本的に検出順とした。本報告でも現地調査時の番号をそのまま踏襲している。したがって必ずしも遺構単位毎の一連番号となっていない所がある。

2 調査の経過

グリッド設定後、発掘区内における遺構と遺物の分布を探るため2×15mのトレンチを「L」字状に組合せて全体に配した。そこでは、遺物の検出を行いながらIII層直上まで掘り下げ、土層の状態と遺構の有無を観察する事に主眼を置いた。次に遺物量の多い40~45-19~25Gを手掘りで拡張し、II層上面でSK7のプラン北半を、III層直上面でSB2の柱穴を確認した。そのため遺構群が西北～東南方向にのびると予想され、25~39-19~28Gまでの範囲を拡張した所、掘立柱建物跡2棟、柱列1条、溝・池状遺構各1、焼土を多量に含む土壙1基地、宅田遺跡の主要な遺構を確認した。同時に、SD4～SB2の範囲に多量の鉄分を含む層が認められた。これは、遺跡周辺が砂地で、地盤が軟弱である事、III層として把握した鉄分を多く含み固くしまる層中に細片となった土器が多く含まれている事、掘立柱建物のある周辺に顕著に認めた事等を考え合せて、何らかの特殊な工法による整地層ではないかと考えられた。以下、精査・実測他の記録作業を行う。発掘総面積は2,052m²で、そのうち遺構遺物の集中する調査区中央部分約1,600m²について精査・実測等の記録を行った。なお、調査期間中の9月28日に現地説明会を行い町民多数の参加を得た。

第4図 グリッド配置図



IV 遺跡の概観

1 遺跡の層序

本遺跡を覆う表層の土質は、微砂・粗砂・一部シルトよりなる沖積土壌である。層序は、遺物包含層、遺構の確認面等から、大きく4大別が可能であった。すなわち、15~20cmの現耕土下に、深耕による擾乱か旧耕土と思われるI層があり、さらに遺物を多く含みあまり擾乱を受けていないII層が続く。III層は、鉄分をかなり含み薄くて固い層で、SB2・3の検出面である。層の分布を見ると、SD4~SB2のやや東、X軸42列前後までであり、遺構の分布範囲とほぼ一致することに気が付く。IV層は、III層下30cm前後の厚さをもち、部分的に多量の遺物を含んでいる。SD4以西、X軸45ライン以東では、IV層中に遺物を認める事ができない。遺物を含むIV層の広がりについては、調査が不充分であった。本遺跡の東西・南北の基本層序は、以下のようになる（第6図参照）。

I層：暗褐色微砂質土（耕土でパサツク） I'層：暗灰褐色微砂質土（しまりがある。）

II層：暗灰色微砂質土（IIIaの小ブロックをまばらに含む。） IIIa層：橙黃灰色微砂質土：

（微粒子でやわらかい。III層上に薄く不均質にのる。） III層：暗紫褐色微砂質土（鉄分を多量に含み固くしまる。土器細片を多く含む。） IV層：暗灰白色微砂質土（やわらかでし

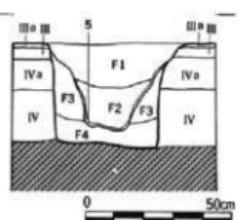
まりない均質な土層。）

また、SB2の柱穴（E P 7）を断ち割って得た所見は、左の第5図であり、基本層序、覆土は以下のようになる。

IIIa層： 橙黃灰色微砂質土（基本層序に同じ。）

III層： 暗紫褐色微砂質土（ リ リ ）

IVa層： 暗灰褐色微砂質土（黒紫色の鉄分が多く含まれ、ゴソゴソしたブロック状を呈す。遺物を含む。）



第5図 土層図（1） IV層： 暗灰褐色微砂質土（粒子が細くしまっている。）

F1： 暗灰褐色粘質微砂土（III層がなく、やわらかなため草木根の擾乱が著しい。）

F2： 暗青灰色シルト （粒子が細かくやわらかで、均質な土層である。）

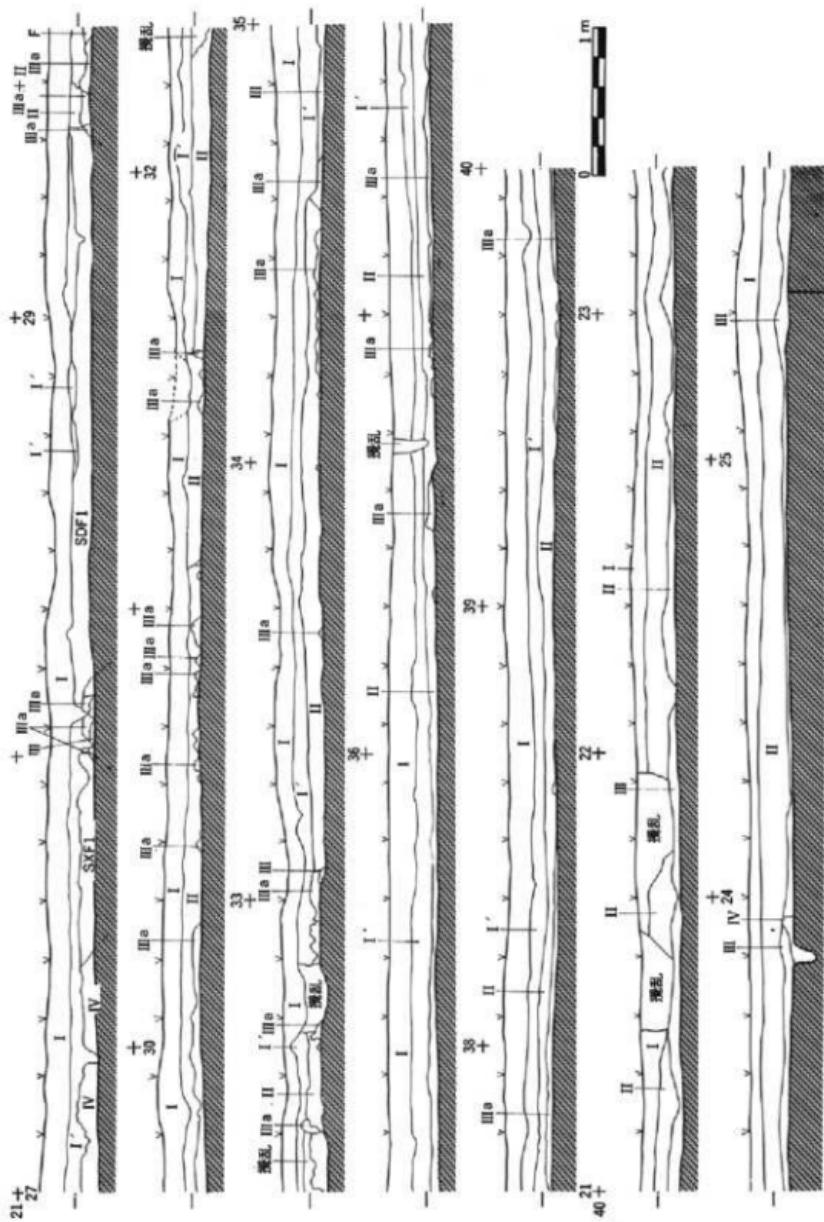
F3： 暗灰褐色微砂土 （ リ リ ）

F4： 暗灰褐色砂質土 （F2・F3に較べてやや粒子が粗となりしまりがない。）

（5： 暗橙色鉄盤層） （ほとんど鉄分の薄い層と見られ、微砂を含んでいる。）

以上、遺跡の層序を概観したが、III層の形成と、IV層のあり方は多くの問題を含んでいる。当初の現地調査では、III層を人為的な一種の叩き等による整地層と考えたが、これに対する自然の営力（冠水）によるものではないかとの意見も提起されている。

第6図 土層図(2)



2 遺構と遺物の分布

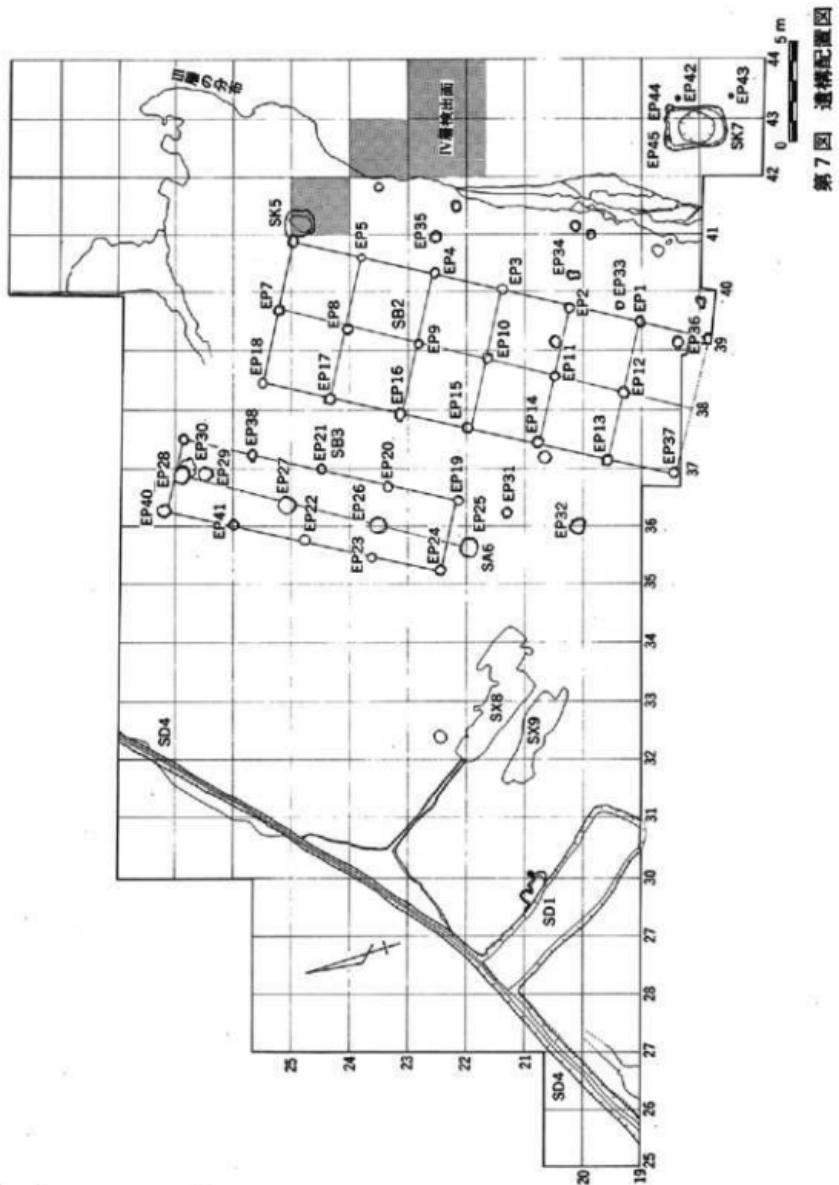
a 遺構の分布

検出された遺構は、表-1に示す通りで、掘立柱建物跡2棟、柱列1条、溝跡1条、大溝とした池状遺構1基、土壠1基、攪乱によると判断される性格不明落ち込み2基が検出された。これらの分布を見ると、西から北々東に向う溝(SD4)が遺跡西縁を限るものとみることができ、前記したIII層の分布も溝跡と重なるように跡切れてしまう。SD1は、SD4と同時に用いられたもので、31-20G近辺で閉じてしまう長方形の池状遺構である。SD1とほぼ直交するように位置している。溝跡と建物までは、SX8・9を除けば、かなり広い空間を持つ事になる。また、この空白部分には、遺物の分布も少なく、1グリッド30片未満で小細片が多い。建物跡は、X軸35列～41列の間に位置し、大小の建物がほぼ平行に配されている。各建物の規模は、1間×4間と2間×6間(以上)で、いずれの柱間も3.6m(12尺)等間である。単純に床面積を計算すると、SB2が155.52m²(桁行6間として)、SB3が51.84m²になり、SB2がSB1の3倍の大きさを示す。建物間の距離も3.6m(12尺)を測り、同時期に同一規格で建てられたものと考えられる。東側におけるIII層の分布は、SB2から5～7mの距離で跡切れてしまうがその周辺からは多量の遺物が出土している。また、東南辺の42～43-19～20Gでは焼土を伴うSK7が検出された。

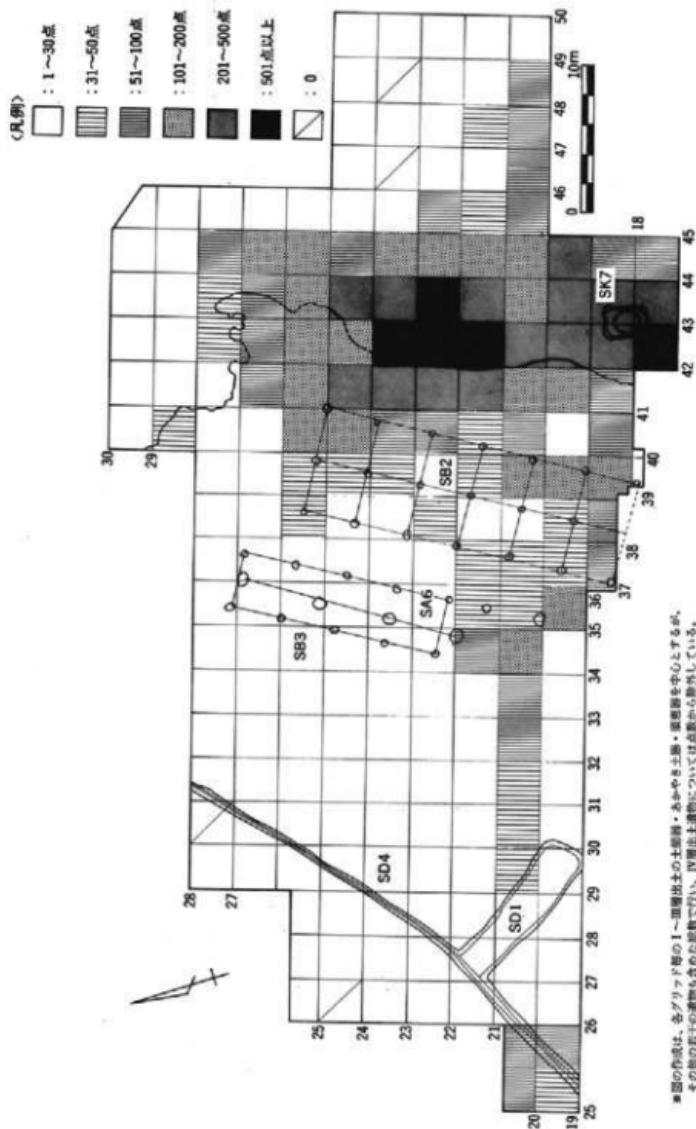
遺構No.	性 格	地 区	備 考	関連 遺構
				分類 No. 地 点 番 標 別 器種 備 考
SD 1	大 溝	28-31 -24-22	遺跡西縁を限る断続V字状の溝跡。	R P 1 42-19 I 土 錐
SB 2	掘立柱建物	37-40 -24-26	南北に長く2箇所6間(以上?)の構造で柱間12尺等間。	R P 2 43-24 II あかやき 环 大形環口縁共伴
SB 3	"	35-37 -23-28	S H 2 と略平行する1間×4間の建物跡。(12尺等間)	R P 3 II II II 瓢器底・内黒杯片共伴
SD 4	溝 跡	25-32 -25-28	SD 1 と同時共存。タライ状の範囲をもつ池状遺跡。	R P 4 42-24 II II II あかやき擾底部共伴
SK 5	土 壤	41-35-36	後根野Ⅳ層から多量の遺物抽出。後-後混として除外。	R P 5 41-25 IV あかやき 壱
SA 6	柱 列	35-37 -22-28	SA 3 を直視する柱列でSB3より若干前に偏する。	R P 6 II II II 环
SK 7	土 壤	42-44 -18-19	土壤に伴う柱穴3本を検出。塗上を多量に含む万形窓穴。	R P 7 20-29 II 圈状土質品
S X 8-9	性格不明	31-34 -21-23	後根野の擾乱と判断。	R P 8 27-22 II あかやき 瓢 脚付の底部片
遺構 No. 備 考				
EP 1～18・36・37				R P 9 43-21 II 土 錐
EP 19～24・38～41			SB 2 を構成する柱穴で、幅方径44～64cmを有り、深さは検出面から20～60cm。	R P 10 42-24 II あかやき 壱
EP 25～28			SB 3 を構成する柱穴で、幅方径44～64cm、深さ28～44cmを有する。	R P 11 42-23 II II II
EP 32			SA 6 を構成する柱穴で、幅方径78～100cmと大きい。	R P 12 II II II 口縁部大形破片
EP 42～45			深90cmの不規則形を呈す柱穴で、後に後縫の擾乱と判断。	R P 13 II II II あかやき环共伴
※ 遺構記号は、S：遺構 E：遺構因子を示し、他の記号は以下の性格を表わす。 A：柱 (柱) 列 B：建物 D：溝 K：土壤 ※ 捏回中で使用する遺構No.は、調査時点で用いたNo.をそのまま使用した。そのため、建物の柱穴等で一通番号とならない部分がある。				
※ 遺物記号(分類)は、R：遺物 P：土製品を表わす。				

表-1 遺構一覧

表-2 RP 遺物一覧



第8図 遺物分布図

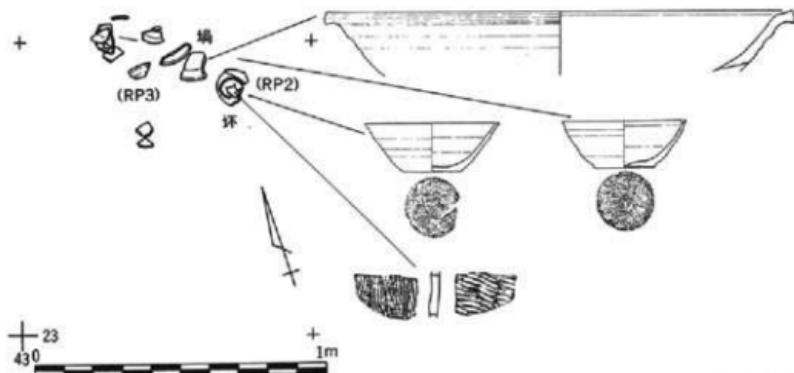


b 遺物の分布

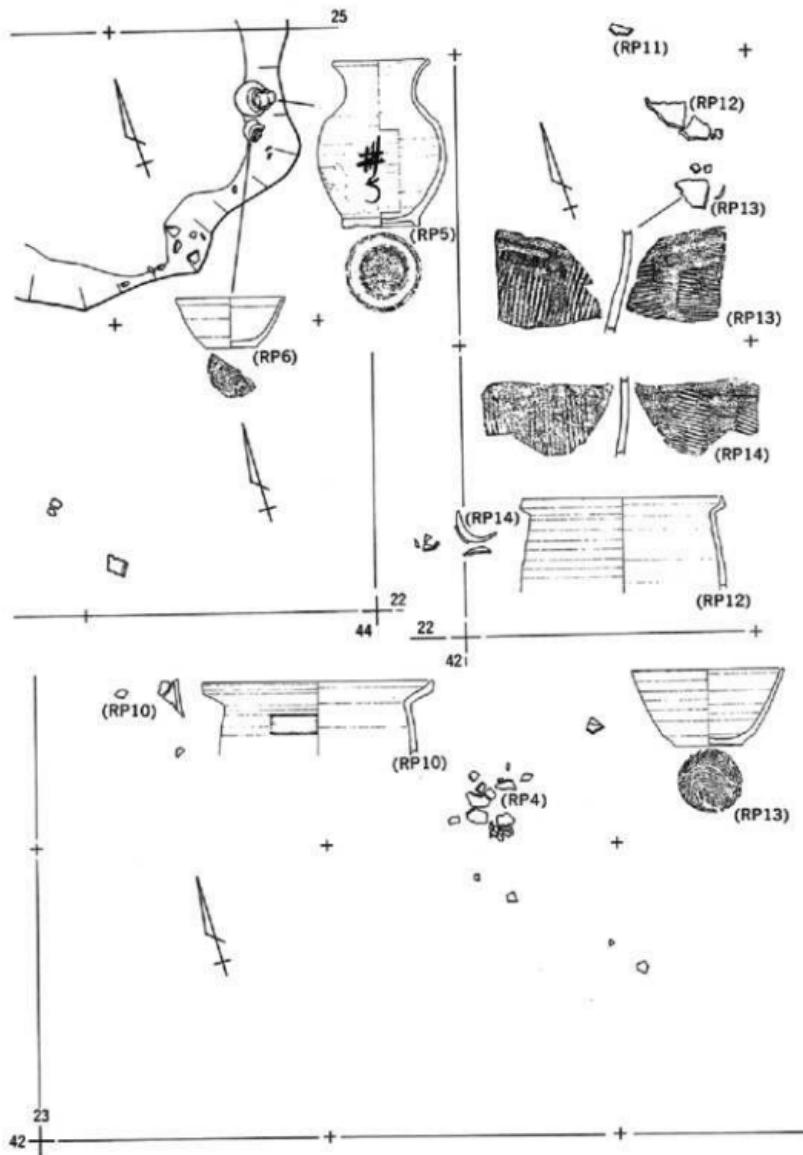
宅田遺跡出土遺物は、表一3・7に示す通りで、近世・近代の陶磁器片まで含めた総数は、破片を1点とした場合20,680余点である。以下では、各グリッド毎の出土遺物点数をもとに作成した第8図から、本遺跡における遺物分布の状況とその特徴・性格について概述する。遺構・III層の分布と遺物分布の関連については、若干前節で触れた部分がある。

全体の遺物分布とその密度を見た場合、遺物の集中する部分（以下ブロックと呼ぶ）が大きく3ヶ所にあることが判る。すなわち、焼土を多量に含むSK7周辺のブロックと、II層中で多くのRPNa土器を検出した42-23Gを中心とするブロック、これらとは距離をもち、SD4の西端部分から南西に広がると考えられる26-20G周辺を中心とするブロックである。他に、幾分まとまりを欠くと思われるが、SB2の中半から南西にかけて広がる散漫なブロックを指摘できるかもしれない。逆に遺物の検出のないグリッド4ヶ所、1~30以下のグリッド131ヶ所の分布を見ると、X軸27列~38列、Y軸21・22列以北のSB3建物跡前面、X軸45列以東およびY軸28・29列-X軸40~45列以北に認めることができ、後2者は、地形面等も考慮に入れれば、遺跡範囲の東を限るラインとほぼ一致するだろう。

一方、SB3建物跡の北西前面に広がる空間は、SB2・SB3建物敷地の西北辺をSD4が限るとすれば、建物敷地内の一画を大きく占めることとなる。性格については、建物・遺跡総体に対する性格付けが明確にされなければ言明できないが、SB2・3建物やSD1に関連する広場的機能が推測される。一方、SK7周辺のブロックは、SK7そのものの機能に係わる帰結なのか、ないしは二次的な投・廃棄による結果としての現象なのか判断に迷う所がある。また、42-23Gを中心とするブロックは、地形的・層位的な問題を多分に含むが、捨て場として意識された箇所への集中的な廃棄と考えてよいだろう。



第9図 土器出土状況（1）



第10図 土器出土状況 (2)

種別 部位	あかやき坏						あかやき鍋・甕(益)						土器器坏(内墨)						土器器坏(両墨)										
	出土地			口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面		
	半	高台村	高台村	便	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	
包含層 I ~ III	5,283	3,822	985	0	0	277	117	714	984	409	126	1,611	94	391	68	14	11	22	2	3									
	IV	310	655	189	2	3	68	24	159	138	69	40	285	49	80	36	4	3	0	0	0								
小計	5,593	4,477	1,165	2	3	345	141	873	1,122	478	166	189.6	143	471	94	18	14	22	2	3									
R P ・遺構内	R P	34	43	10	3	0	8	1	27	8	2	6	1	7	14	3	0	0	0	0	0								
	E P	16	9	6	0	0	2	0	5	4	0	1	0	7	9	3	0	0	0	0	0								
	S D	20	68	15	0	0	8	1	19	23	4	10	19	4	4	1	1	0	0	0	0								
	S K	484	1,134	221	12	0	83	3	86	148	53	13	233	62	66	14	3	0	0	0	0								
	S X	0	2	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0								
小計	554	1,256	252	15	0	101	5	138	183	60	30	253	59	94	22	4	0	0	0	0									
合計	6,147	5,733	1,417	17	3	446	146	1,011	1,365	538	196	2,149	223	565	116	22	14	22	2	3									

種別 部位	土器器坏 (非黒色化)						土器器壊						須恵器壊						須恵器甕									
	出土地			底	面	高台村	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面				
	半	高台村	高台村	便	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面
包含層 I ~ III	5	5	1	0	1	5	2	42	13	15	24	5	5	3	0	1	0	155	0									
	IV	0	1	0	0	0	0	4	0	5	4	0	1	0	0	1	0	7	0									
小計	5	6	1	0	1	5	2	46	13	20	28	5	6	3	0	2	0	162	0									
R P ・遺構内	R P	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	E P	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	
	S D	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	1	0	0	0	1	3	3	4	1								
	S K	7	7	0	1	0	0	0	13	3	2	0	0	0	0	0	0	2	0	11	0							
	S X	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計	7	8	1	1	0	0	1	14	5	3	2	0	0	0	0	1	5	3	17	1								
合計	12	14	2	1	1	5	3	60	18	23	31	5	6	3	1	7	3	179	1									

種別 部位	須恵器壊						須恵器甕						土器器壊						鉄器						陶器					
	出土地			口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面			
	半	高台村	高台村	便	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面	口	縁	体	部	底	面		
包含層 I ~ III	6	12	104	16	6	1	4	12	3	2	8	60	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1		
	IV	0	0	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
小計	6	12	114	12	6	1	4	12	3	2	8	60	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1		
R P ・遺構内	R P	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	
	E P	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	S D	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	S K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	S X	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	6	12	116	12	6	1	4	12	5	3	9	61	1	2	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	

表-3 出土遺物数量一覧(1)

※(高台)：あかやき壊
流動的壊はすべて田原切切りである。
高台村から下へ移る壊の範囲としたもの。高台片の表示を示す。

○あかやき甕 (内墨・両墨)
流動的壊は、高台村および平場ともすべて田原切切りである。

○土器器壊 (非黒色化)
黒色化壊は施されないもの。内墨の
えぎり、あるいは、外墨のえぎり。眞圓
のえぎり等が確認できる一例。

○土器器壊
ハケノ開口の範囲でできるもの。眞圓片
では2層の土器底が付くもの。

○須恵器甕
底部の平場は平場で田原切切り。
高台村は高台村で開拓して、高台村へ切離
し不規。高台片は高台村の開拓片を各々。

V 遺構

1 挖立柱建物跡 (S B)・柱列跡 (S A)

S B 2 建物跡 (第11図)

調査地区内では主屋的な掘立柱建物で、梁行2間、桁行6間以上（南辺は調査地区外にかかり、未確認）の規模を持ち、柱間距離は梁行・桁行とも3.6m（12尺）である。当初桁行5間まで検出し、後に確認のため調査区を拡張した所、さらに南西に一間分は延びる事が判明した。柱穴の検出面は、III層直上面であるが、一部ではII層下面でプランを確認できたものがある。したがって、柱穴掘り方の掘り込み面（層）は、直接的にIII層を掘り込んだものではなく、II層の形成途上かそれ以後という事になる。柱穴の径は、44～60cmで、検出面からの深さは20～40cmを測る。掘り方の平面形は円形を基調としている。また、プランの確認・検出、一部断ち割り調査の各段階で柱痕の検出に努めたが、明確にできなかつた。柱穴内覆土は、一様に第5図に示したE P 7の状況と同一である。

本建物跡の内、遺物の検出された柱穴は、E P 1～4、同10～12、同14・16・18があり、その内容は、土師器・あかやき・須恵器等の破片若干である。あかやきが多い。建物の主軸は、磁北を基準にすると、N-30°20'-Eで、以下に述べるS B 3 建物跡と略同一である。

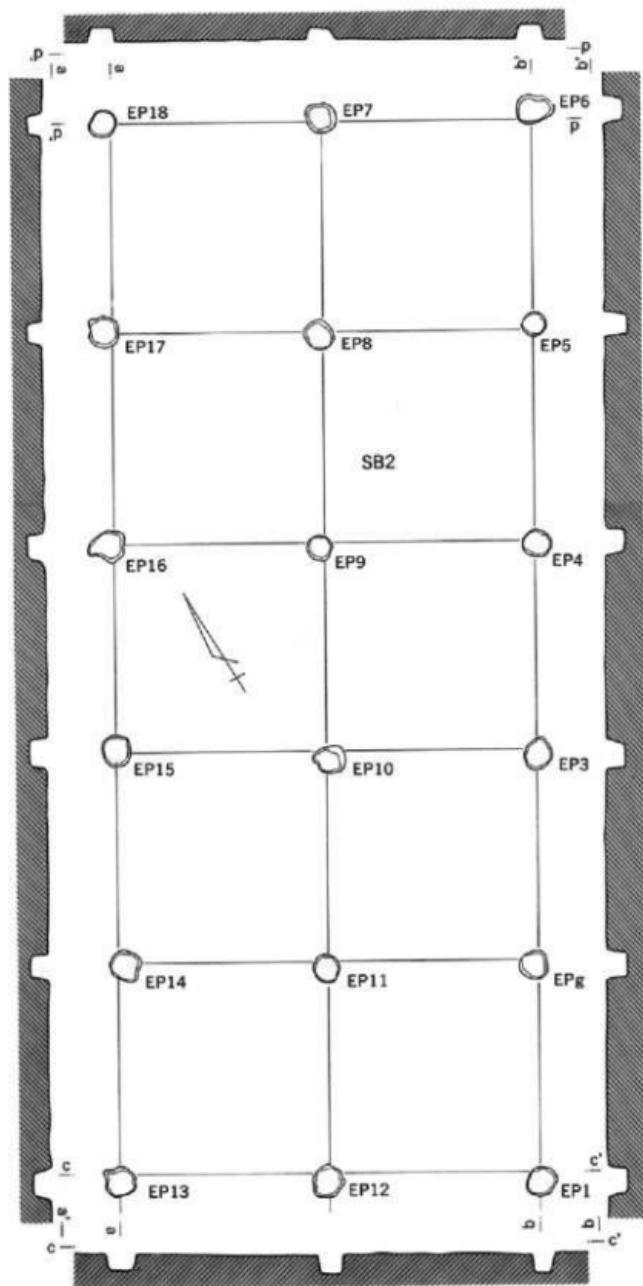
S B 3 建物跡 (第12図)

S B 2 の西北に位置し、S B 2 の主軸にはほぼ平行する。梁桁1間、桁行4間の掘立柱建物跡で、柱間距離は梁・桁行ともに3.6m（12尺）等間である。S A 6 と重複関係にあるが、その先後関係は明確でない。柱穴の埋土等からは、S A 6 が後続するかと思われた。

柱穴の確認面は、III層直上面であるが、基本的にはS B 2 と同様の事が言えるだろう。柱穴の径は、48～74cmで、略円形を基本とする。深さは、確認面から32～44cmを測る。柱痕は、柱穴の覆土上面を2～3cm下げて検出に努めたが明確にできなかつた。覆土は、シルト質のやわらかな微砂が主体で、S B 2 と大差ない。本建物を構成する柱穴の内、遺物の検出されたものは、E P 20に限られ、あかやき土器の破片1点があるだけである。本建物の主軸方向は、磁北を基準とした場合N-31°00'10"-Eを測る。

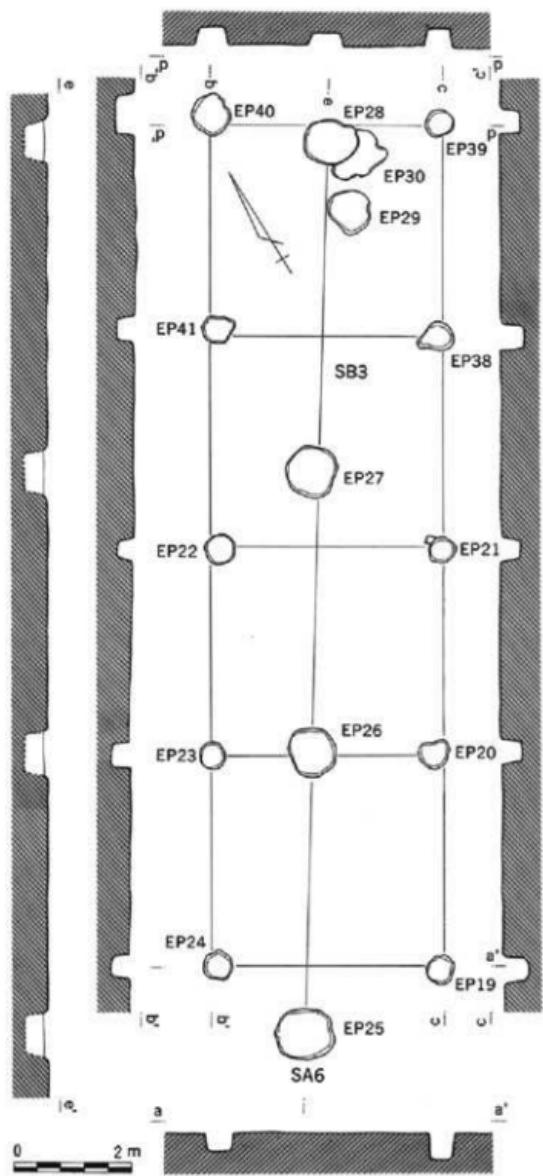
S A 6 柱列跡 (第12図)

S B 3 建物跡中央を、S B 2 建物跡主軸方向と略同一に走る柱列で、主軸方向は磁北を基準とした場合N-31°20'40"-Eを測る。柱穴の径は88～100cmで、建物跡柱穴に較べて大型である。桁行は4間で、4.8m（16尺）等間と大きい。柱穴の覆土は、灰黄褐色の微砂質土である。遺物の検出された柱穴は、E P 25・26があり、あかやき土器の小片各2点であった。柱痕の遺存はなく、アタリ等も明確でない。



E P N o	經	深き
E P 1	56	36
E P 2	52	36
E P 3	44	36
E P 4	50	36
E P 5	44	40
E P 6	64	32
E P 7	58	20
E P 8	52	(未測)
E P 9	46	(#)
E P 10	58	(#)
E P 11	52	(#)
E P 12	60	36
E P 13	60	32
E P 14	60	30
E P 15	54	32
E P 16	54	28
E P 17	54	32
E P 18	50	24

(cm)



E P No.	経	深
E P 19	52	44
E P 20	56	40
E P 21	44	32
E P 28	64	40
E P 39	48	34
E P 24	56	32
E P 23	48	32
E P 22	52	28
E P 41	58	32
E P 40	74	32
E P 25	100	(未標)
E P 26	88	(〃)
E P 27	90	(〃)
E P 28	94	(〃)
E P 30	96	(〃)
E P 29	78	(〃)

(cm)

第12図 SB3 建物跡・SA6 柱列跡

2 溝跡 (SD)

SD 1 溝跡 (第13図)

SD 4 に直交する形をとる長軸外径9.5~10.5m、短軸外径2.5~3m、深さ50cm前後を測る溝状（池状がむしろふさわしい？）の遺構である。SD 4 との関連は、第13図下段のセクションから明らかのように同時期で相互一体となる。すなわち、用水・利水・排水といった一連の関係で捉えられるものであろう。また、SD 1・4 の交差部分約2mが堰状の高まりを持ち、SD 4 底面との比高12cm前後を測る事は興味深い。覆土のあり方からは、ゆるやかな自然堆積による埋没と考えられる。出土遺物に、土師器（内黒坏）破片7点、あかやき坏・壙塗の破片125点、須恵器壙破片7点、その他2点がある。

SD 4 溝跡 (第14図)

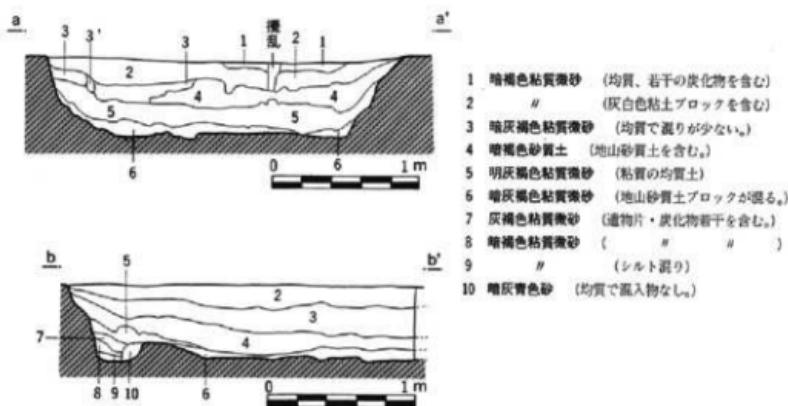
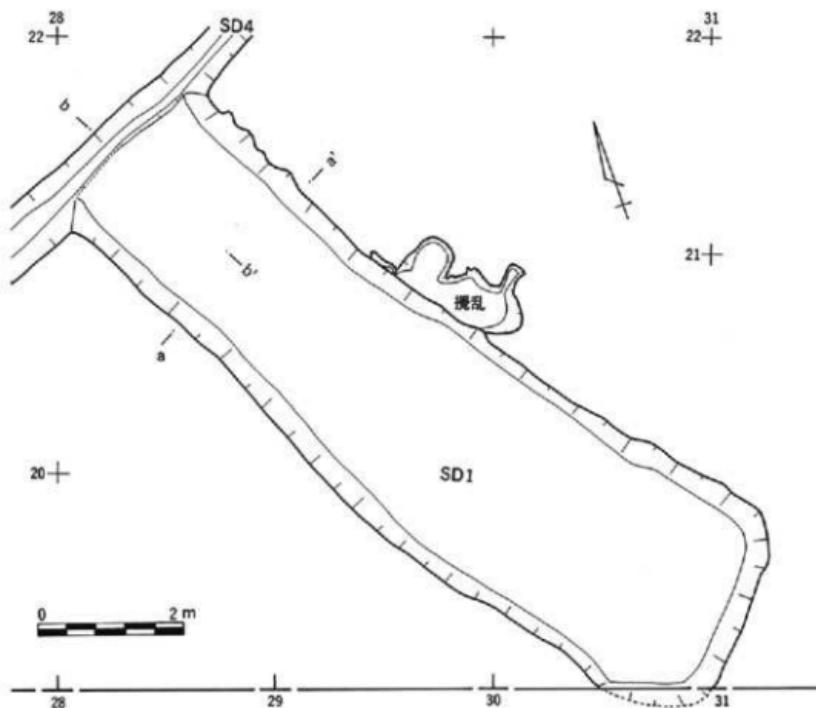
溝幅外径30~80cm、内径10~20cm、深さ50~60cmを測り、断面「V」字状を呈す。溝幅は、西で広く、北東に行くにつれて狭い。底面レベルでは、北東部が幾分高く、西に向う程低い。その両端でのレベル差は約10cmである。すなわち、水の流れを推定すれば、当然の事として北東→西方向へと流れた事になる。しかし、北西部では40mも行かぬ内に高瀬川となり、川との比高差5~6mがあることからすれば、常識的に見て自然流水を溝内に引き込んだとは考えられず、そこでは何らかの人为的な揚水が想定されねばならない。

3 土壙 (SK)

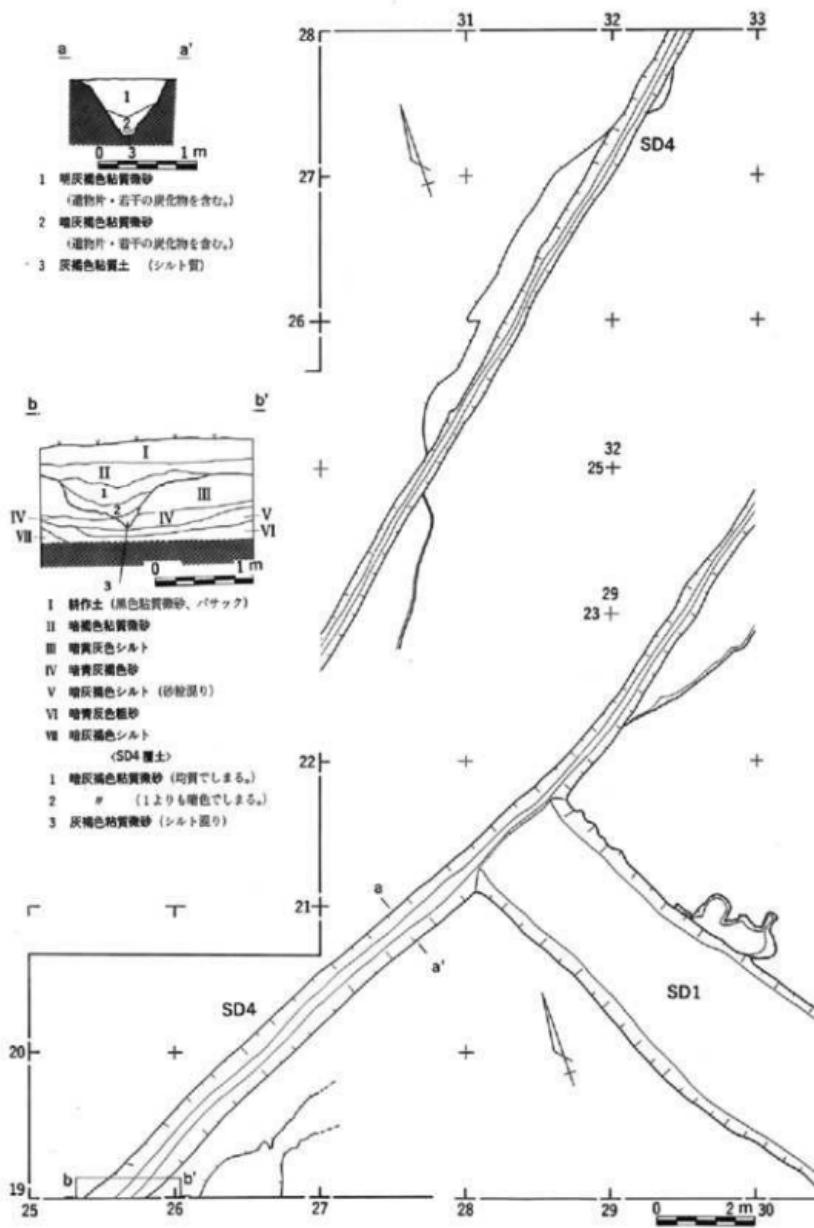
SK 7 土壙 (第15・16・17図)

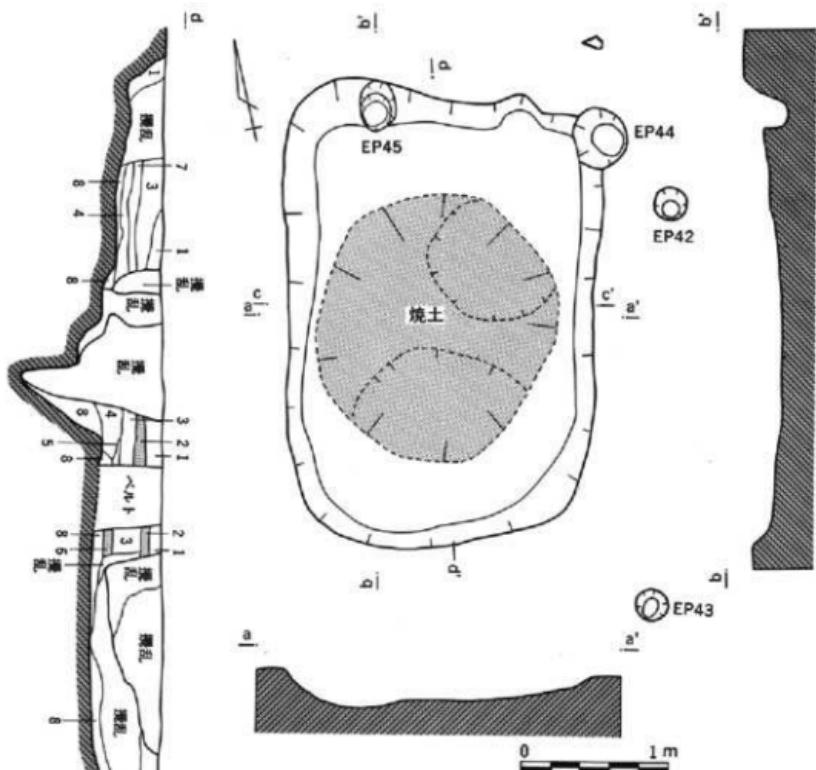
長軸外径2.85~3.2m、短軸外径1.9~2.2mを測る隅丸長方形を呈す竪穴状の遺構で、柱穴が北辺E P 44・45、と東辺E P 42・43で計4個検出された。西辺・南辺では未確認である。

遺構プランの確認は、検出した地点が荒地で耕作が長らく行われていなかった為か、他の遺構よりは上位でII層上～中位面であった。II層自体の層厚も他地点よりは厚い。壁の立ち上りは、不均質ゆるやかな傾斜を示す。確認面からの深さ10~15cmを測る。床面は、中央部分が円形に窪み、2ヶ所でさらに窪む。この凹部は全体に焼けており、暗褐色を呈す。覆土の状態を見ると、第15図のセクションに示す通りであるが、基本的には、焼土・炭化物層、遺物を多量に含む1・3層が互層をなす。遺物の出土・検出状況は、第16・17図に示したが、プランの確認・検出段階で北東コーナー寄りにあかやき坏・壙類の細片を主体とする多量の遺物を認めた。他に刃子等の鉄製品の出土もある。また、プラン検出後の覆土内における遺物のあり方を見ると、あかやき坏・壙類を主体に、ハケメのある土師器内黒坏や、須恵器坏等のやや大形破片が認められた。柱穴の覆土内にも若干の遺物がある。E P 42・43では、埋め土内に焼土・炭化物が充満し、SK 7 土壙本体と関連することを物語る。SK 7 内出土遺物の総数は、2,148点で、その内約90%があかやきである。

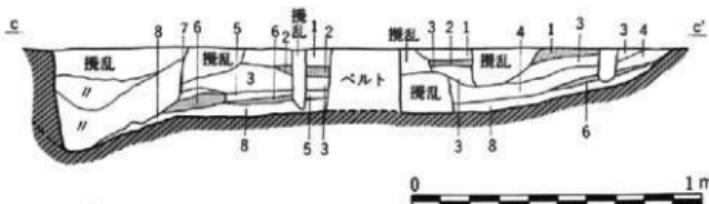


第13図 SD1溝跡

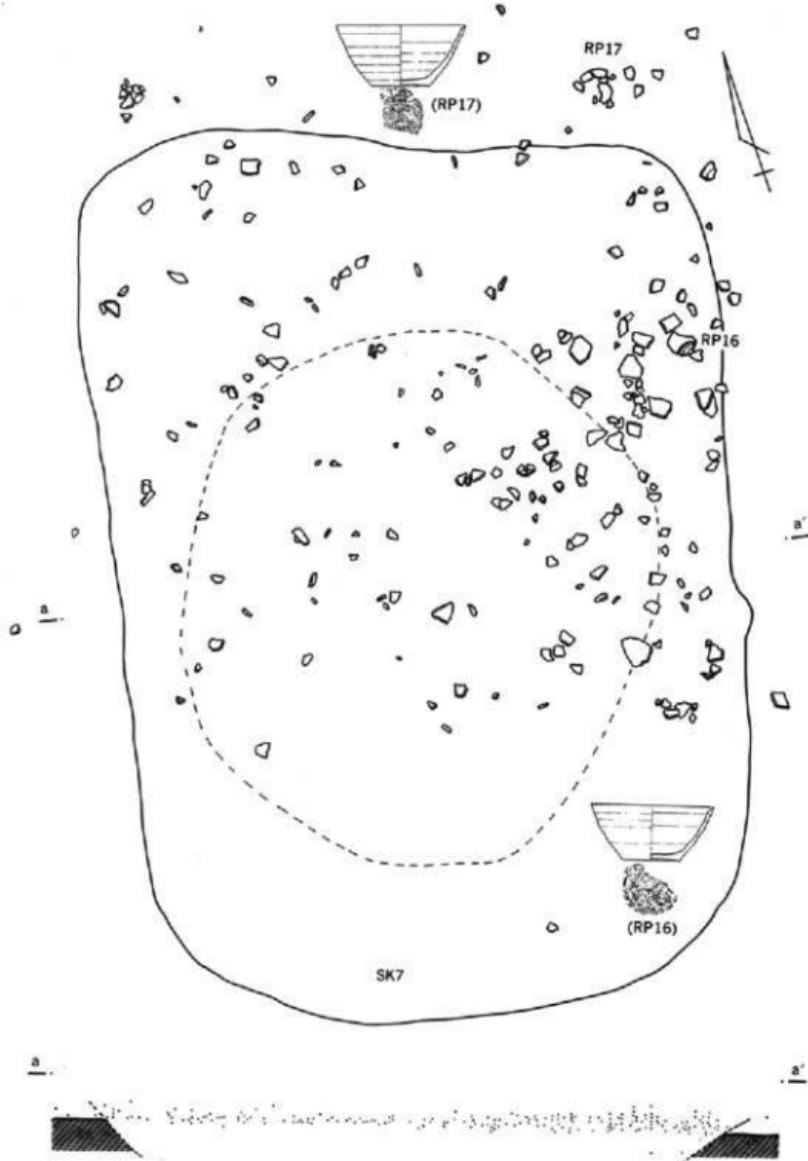




- 暗褐色粘質微砂（炭化粒・黃色粘土をまばらに含む。）
 - 暗赤褐色燒土（燒土のみの均質層）
 - 暗灰黃褐色粘質微砂（燒土粒若干・炭化物を含む。）
 - 暗褐色粘質微砂（部分的に燒土粒・炭化物を含む。）
 - 黑色炭化物層（炭化物の均質な層）
 - 暗赤褐色燒土（燒土の均質層）
 - 暗灰白色粘質微砂（シルト状を呈す灰層？）
 - 暗褐色粘質微砂（部分的に炭化物を含むが全体に混りが少ない。）

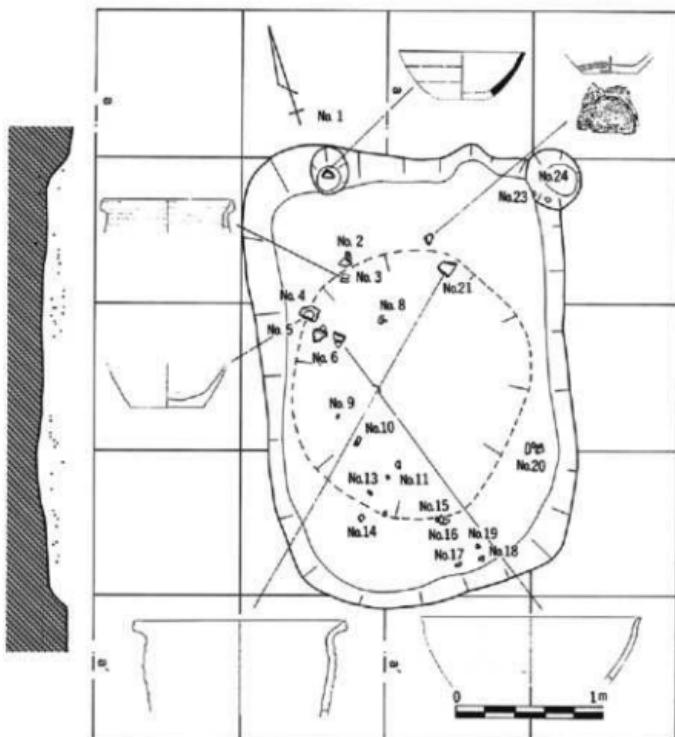


第15圖 SK7 土壠跡



0 1m

第16図 SK7 遺物出土状況 (1)



第17図 SK 7 遺物出土状況 (2)

No	種別	器種	備考	挿図No.	No.	種別	器種	備考	挿図No.
1	あかやき	壺	口縁部片、底部欠損(赤切り?)	33-338	12	フ	フ	底部、回転条切り	
2	あかやき	壺	体部片、内外側ともロクロ整形		14	フ	フ	口縁部片、ロクロ整形	
3	フ	フ	口縁部片、ロクロ整形	33-337	15	フ	フ	底部片、回転条切り	
4	フ	フ	底部片、ロクロ整形、回転条切 り	33-336	16	フ	壺	口縁部片、ロクロ整形	
5	フ	フ	底部片、ロクロ整形、回転条切 り		17	フ	壺	口縁部片、ロクロ整形	
6	フ	壺	底部片、ロクロ整形、回転条切 り		18	フ	壺	体部片、平行タタキ目・アテ痕	
7	フ	フ	口縁部片、ロクロ整形	32-335	19	フ	壺	口縁部片、(大形の址標器種)	
8	フ	壺	体部片、平行タタキ目・アテ痕		20	フ	壺・壺	舟口縁部・壺体部片他	
9	フ	—	手づくね標記土のかたまり。		21	フ	壺	口縁部片、ロクロ整形	33-340
10	フ	壺	体部片、平行タタキ目・アテ痕		22	土師器	壺	内面ミガキ→黒色化、外側ハゲ 目	32-331
11	フ	壺	体部片、平行タタキ目・アテ痕		23	あかやき	壺・壺	網目部片(ケズリ)壺体部片(ロ クロ)	
12	フ	フ	体部片、ロクロ整形		24	フ	壺	体部片、ロクロ→ケズリ	

表一4 SK 7 下層面出土遺物一覧

IV 遺 物

出土土器の分類

本遺跡からは、土師器、あかやき土器、須恵器、製塙土器等の出土がある。ここでは、これらの土器のうち、土師器、あかやき土器、須恵器の分類について述べる。

1) 土師器 (I) (第18図)

土師器には壺 (A), 高台付壺 (B), 高台付皿 (C), 壺 (D) の各器種があり、調整技法の相異によって、細分できる。

壺 (A) は以下の 7 類に細分できる。なお、底部は A1・7 を除き回転糸切り痕が残る。

A1 類： 内面にミガキ→黒色処理、外面の体部下半と底部に回転ヘラケズリが施されるもの。

A2 類： 内面にミガキ→黒色処理、外面の体部下半にハケメ調整が施されるもの。

A3 類： 内面にミガキ→黒色処理、外面口縁部にミガキが施されるもの。

A4 類： 内面にミガキ→黒色処理が施されるだけで、外面は無調整。

A5 類： 内・外面ともミガキ→黒色処理の施されているいわゆる両黒土器。

A6 類： 内面と外面口縁部にミガキが施されるが黒色処理のないもの。

A7 類： 内面と底部外面にミガキが施されるが黒色処理のないもの。

高台付壺 (B) はつぎの 3 類に細分できる。

B1 類： 内面にミガキ→黒色処理、外面体部上半まで手持ちヘラケズリが施されているもの。

B2 類： 内面にミガキ→黒色処理が施されるだけで外面は無調整。

B3 類： 内面にミガキが施されるが、外面は無調整。

高台付皿 (C) はつぎの 2 類に細分できる。

C1 類： 内面にミガキ→黒色処理が施されるだけで、外面は無調整。

C2 類： 内面と外面口縁部にミガキが施されるが、黒色処理のないもの。

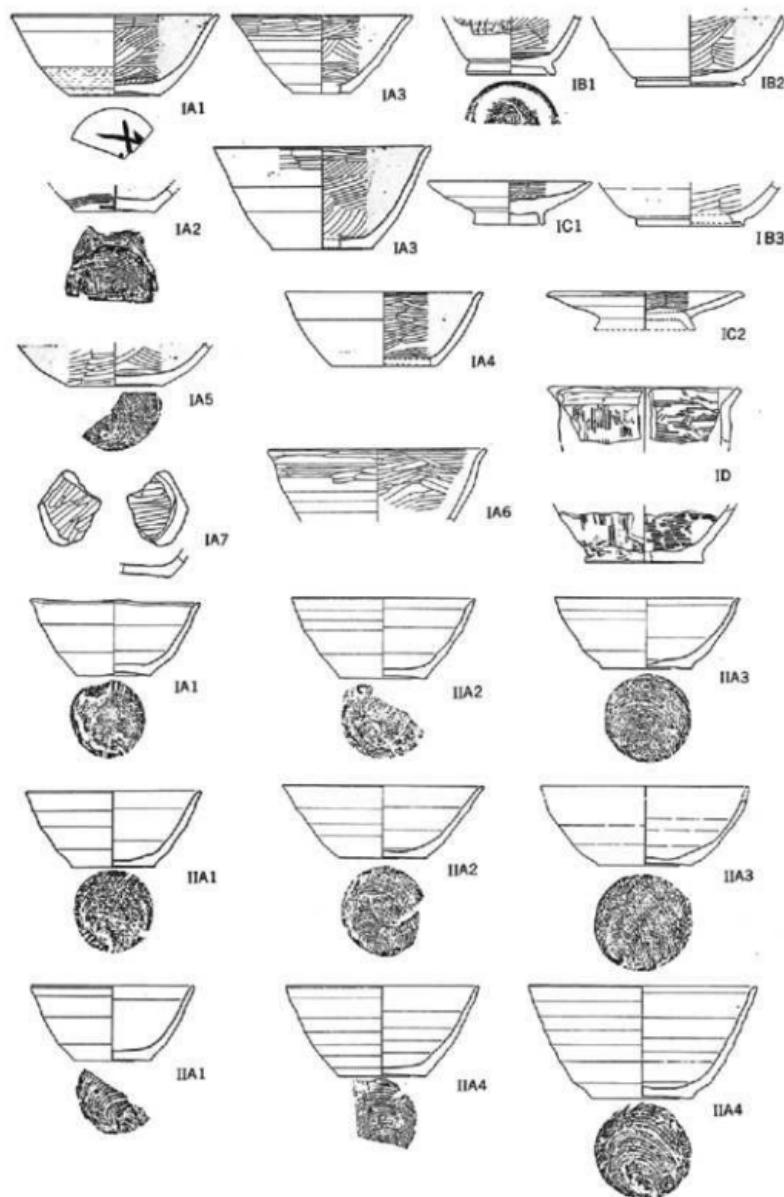
壺 (D) は破片資料を入れても 9 点と少ない。口縁部資料によると、口縁部内外面にヨコナデが、頸部以下内外面にハケメが施されている。底部に木葉痕のあるものが 2 点出土している。

2) あかやき土器 (II) (第18~20図)

あかやき土器には壺 (A), 高台付皿 (B), 鉢 (C), 壺 (D), 壺 (E), 堀 (F), 羽釜 (G) の各器種がある。これらは、法量や、口縁部形態等によって細分できる。

壺 (A) は、すべて回転糸切り無調整のものであるが、立上りの形態や、法量の相異によりつぎの 4 類に細分できる。

A1 類： 底径の割に口径が大きく、器高も高く、やや内溝気味に急角度で立上る。口径 120



第18図 土器分類図(1)

S = 1 : 4

mm以下、底径は51~57mm、器高は51~54mmの範囲内にあり、小形である。

A2類：開き気味に立上り、直線的に外傾する一群。法量は口径120~138mm、底径54~60mm、器高は48~54mmと中形である。

A3類：大きめの底部から内湾気味に立上る。法量は口径126~156mm、底径60mm前後、器高は48~58mmと中形である。

A4類：口径、底径とも大きく、器高も高い。やや内湾気味に立上がり、そのまま外傾する。法量は口径132~156mm、底径60~66mm、器高63~78mmと大形である。

高台付皿（B）は、脚部の剥落した資料が1点出土している。

鉢（C）については破片資料だけであり、その全体的な形状はなお明確にはできないが、脚の長い高台のつくC1類、脚のつくC2類、把手のつくC3類に分けられる。

壺（D）は完形品1点のみである。胎土に石英砂が他のあかやき土器と同じように混入されているが、色調は白っぽい灰褐色であり、須恵器の生焼けの可能性もある。ロクロ整形後、体部下半に手持ちヘラケズリが施されている。なお、底部には回転糸切痕が残されている。体部中央から下半にかけ墨書が認められるが判読不能である。

甕（E）は壺につぐ出土量があるが、体部の小破片では、場との区別が難しい。図示可能なものから法量によって大きく3類に分けられた。口径が220mm前後のE1類、140mm前後のE2類、110mm前後のE3類である。図示できたものも体部上半から口縁部にかけての資料だけであり、体部下半から底部にかけては明らかではないが、体部資料の器厚等からE1類とタキ整形、E2類とケズリ調整、E3類とロクロ整形がそれぞれ対応関係をもつものと考えられる。ただし、断面実測の可能な口縁部資料のなかで、E2類の占める割合は低いが（第22~23図）、ケズリ調整をもつ体部資料がその割には多いことから（表-3）、E1類とケズリ調整の対応関係も否定できない。E1~E3類は断面実測による口縁部資料（第22・23図）も参考に入れるとつぎのように細分できる。

E1a：口縁部は長く外反し、口唇部が上方につまみ出されてたつ。

E1b₁：口縁部は短かく外反し、口唇部が上方に長くつまみ出されてたつ。

E1b₂：口縁部は短かく外反し、口唇部が上方に短かくつまみ出されてたつ。

E1c：口縁部がIb類よりさらに短かく外反し、口唇部が長く上方につまみ出されてたつ。

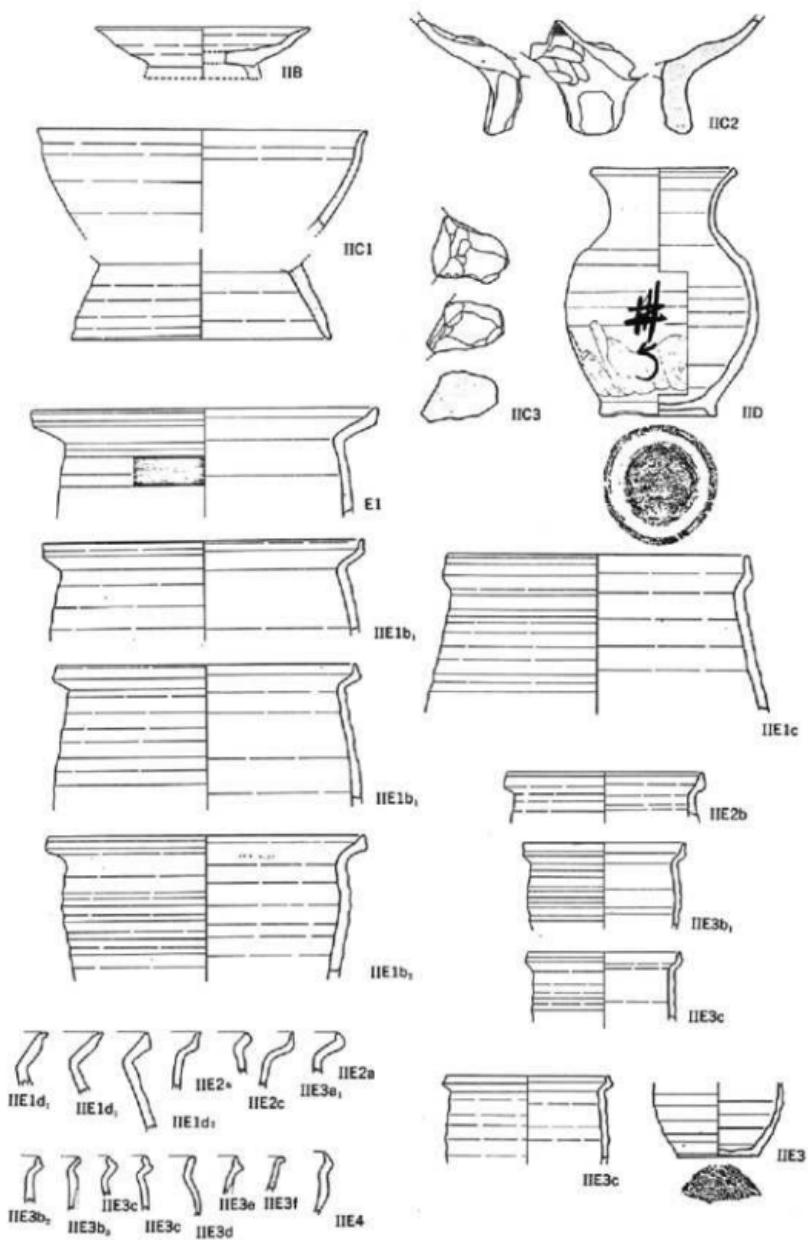
E1d₁：口縁部が単純に「く」の字状に外反し、口唇部は尖る。

E1d₂：口縁部が単純に「く」の字状に外反し、口唇部は肥厚する。

E2a：口縁部が外反し、口唇部が上方に長くつまみ出されてたつ。

E2b：口縁部が2a類より短かく外反し、口唇部は上方に長くつまみ出されてたつ。

E2c：口縁部が単純に「く」の字状に外反し、口唇部が肥厚する。



第19図 土器分類図（2）

S = 1 : 4

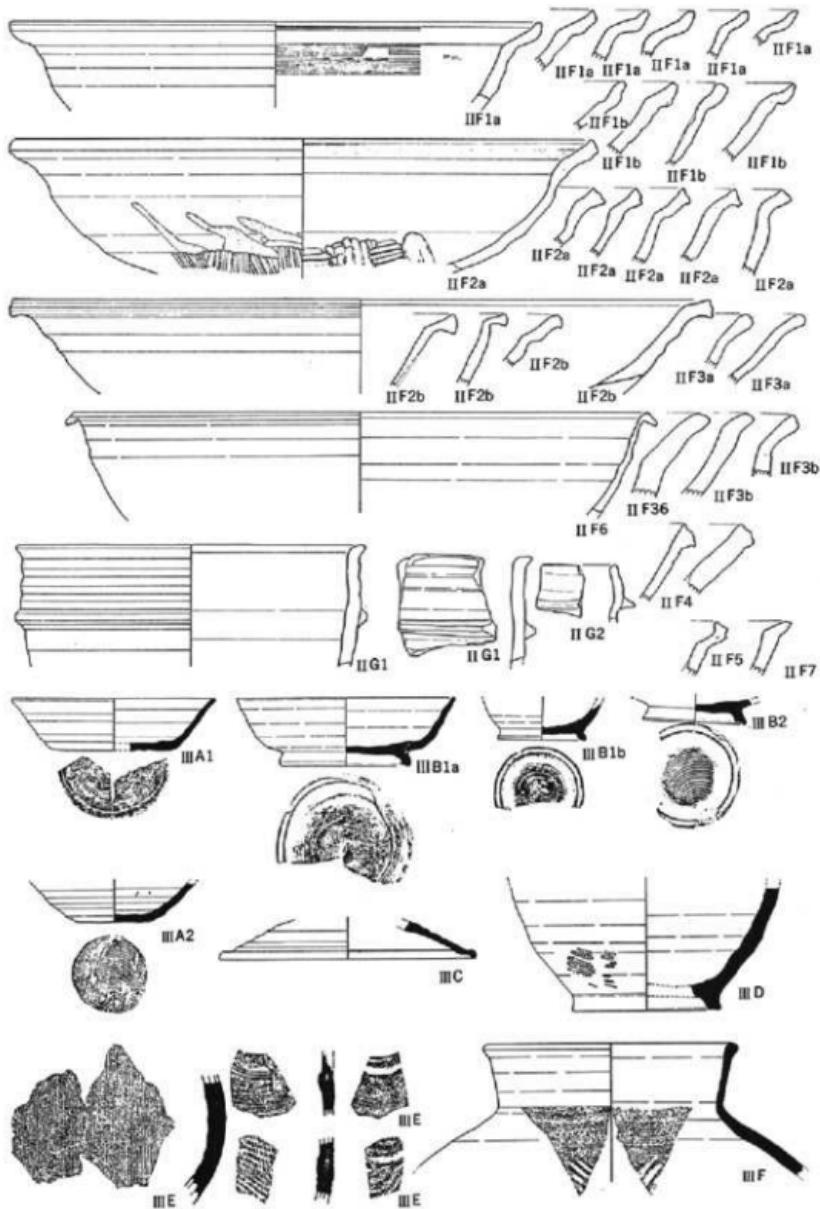
- E3a₁ 類： 口縁部は長く外反し、口唇部は上方に長くつまみ出されてたつ。
- E3a₂ 類： 口縁部は長く外反し、口唇部は上方に短かくつまみ出されてたつ。
- E3b₁ 類： 口縁部は短かく外反し、口唇部は上方に長くつまみ出されてたつ。
- E3b₂ 類： 口縁部は短かく外反し、口縁部は上方に短かくつまみ出されてたつ。
- E3b₃ 類： 口縁部は短かく外反し、口縁部は上方にわずかにつまみ出される。
- E3c 類： いったん外反した口縁の口唇部が内傾するようにつまみ出される。
- E3d 類： 長めの口縁部が外反気味にたつ。
- E3e 類： 口縁部が短かく外反し、口唇部は上方と下方につまみ出される。
- E3f 類： やや内湾気味の体部から、口縁部が強く外反する。

このほか、頸部がすぼまり、いったん外反して口縁部がさらに内傾する小形のものが1点出土している。これをE4 類とした。また、最大径の位置が口縁部にあるものと、体部にあるものがあるが、上述した各類との対応関係については、必ずしも明確にはできないが、E1、E2、E3 の各類とも、単純に「く」の字状に外反するものは、体部に最大径があるようである。また、口縁部が外反して、さらに口唇部が上につまみ出されるものでは、E1 類には両者があるが、E3 類では体部に最大径のあるものはない。

堀(F)は、図示可能なものでは、口径が480mm前後、400mm前後、370mm前後の3種を確認したが、口縁部の器厚を根拠として口径を推定するのは無理があり、ここでは口縁部形態の相異によって分類した。体部中ほどから下半にかけてはタタキによる成整形、ケズリ調整(第24図206他)、タタキによって成整形されたあとケズリ調整が施されるもの(第32図320他)があり、底部はナベ底状(第25図229)を示すものと、平底(第24図204)になるものがある。底部付近までケズリ調整のあるものは平底になるようである。

- F1a 類： 口縁部が長めに外反し、口唇部が上方につまみ出されてたつ。
- F1b 類： 口縁部が短かく外反し、さらに口唇部が上方につまみ出されてたつ。
- F2a 類： 口縁部が外反し、口唇部は上方と下方につまみ出されて肥厚する。
- F2b 類： 口縁部が2aよりさらに強く外反し、口唇部は上方と下方につまみ出されて肥厚する。
- F3a 類： 体部とほぼ同じ器厚の口縁部がそのまま外傾する。
- F3b 類： 体部とほぼ同じ器厚の口縁部がやや外反する。
- F4 類： 外傾する口縁の口唇部が上につまみ出されて肥厚する。
- F5 類： 外反する口縁が上方にたち、さらに口唇部が左右につまみ出されて肥厚する。
- F6 類： 口縁が強く外反し、口唇部は下方につまみ出される。
- F7 類： 口縁部が外反し、口唇部は尖がる。

羽釜(G)は最低3個体の出土があり、口径240mm前後のG1 類と、それより小さなG2 類



第20図 土器分類図（3） S = 1 : 4

に分けられる。いずれの資料も体部下半から底部の形態については明確でない。

3) 須恵器 (III) (第20図)

須恵器には壺 (A), 高台付杯 (B), 蓋 (C), 壺 (D), 横瓶 (E), 瓢 (F), の各器種があるが、全体的に量が少なく、底部から口縁部までの形態がわかるものは壺と高台付壺が各1点あるだけである。

壺 (A) は底部切離し技法の相異によって2類に分けられる。切り離し後の調整はない。

A 1類：回転ヘラ切り手法によるもので、大きめの底部から直線的に外傾する。器高は低い。

A 2類：回転糸切り手法によるもので、1類よりは小さめの底部から開き気味に立ちあがる。

高台付壺 (B) も壺と同様つぎの2類に分けられる。

B 1類：壺部は回転ヘラ切り手法によって切り離される。法量の大きなB1a類と、小さなB1b類の二者がある。

B 2類：壺部は回転糸切り手法によって切り離される。皿状のたちあがりを示す。

蓋 (C) は口縁部資料が1点だけ出土している。

壺 (D) で図化できたものは1点の底部資料だけである。このほか、第26図230、第27図246、256、257、261などの破片があり、いずれも体部にはカキメが施されている。

横瓶 (E) の破片と思われるものが3点出土したが、第31図297、299は壺の可能性もある。

瓢 (F) で図化できたものは口縁部から肩部にかけての資料が1点だけである。体部破片も多くない。体部破片のタタキとアテの組み合わせをみると、格子目ふうタタキと同心円のアテの組み合わせをもつものが多い(第25図232、234、241、第26図249、258、260等)。ほかに、格子目ふうタタキと平行アテの組み合わせがある(第25図248、251、255、第26図233、236、243、245等)。

2 製塙土器、土製品、石製品、鉄製品(第30・33図、図版28)

輪積痕を残す土器が9点出土している。第30図301、302である。砂を多く含み、灰褐色ないしは暗褐色を呈している。製塙土器と考えられる。

第33図346、347、351は漁網錘である。手捏ねによって成形されている。

同図348～350は手捏ねによって成形された環状土製品で、下野沢地区では戦前まで魚焼に用いる割竹のオサエ用具として使われていたという。いずれもI～III層から出土した。

同図352は貫通孔のある土製品であるが、その性格は明らかでない。

同図345は両面と、左右両側に砥磨面のある安山岩製の砥石である。

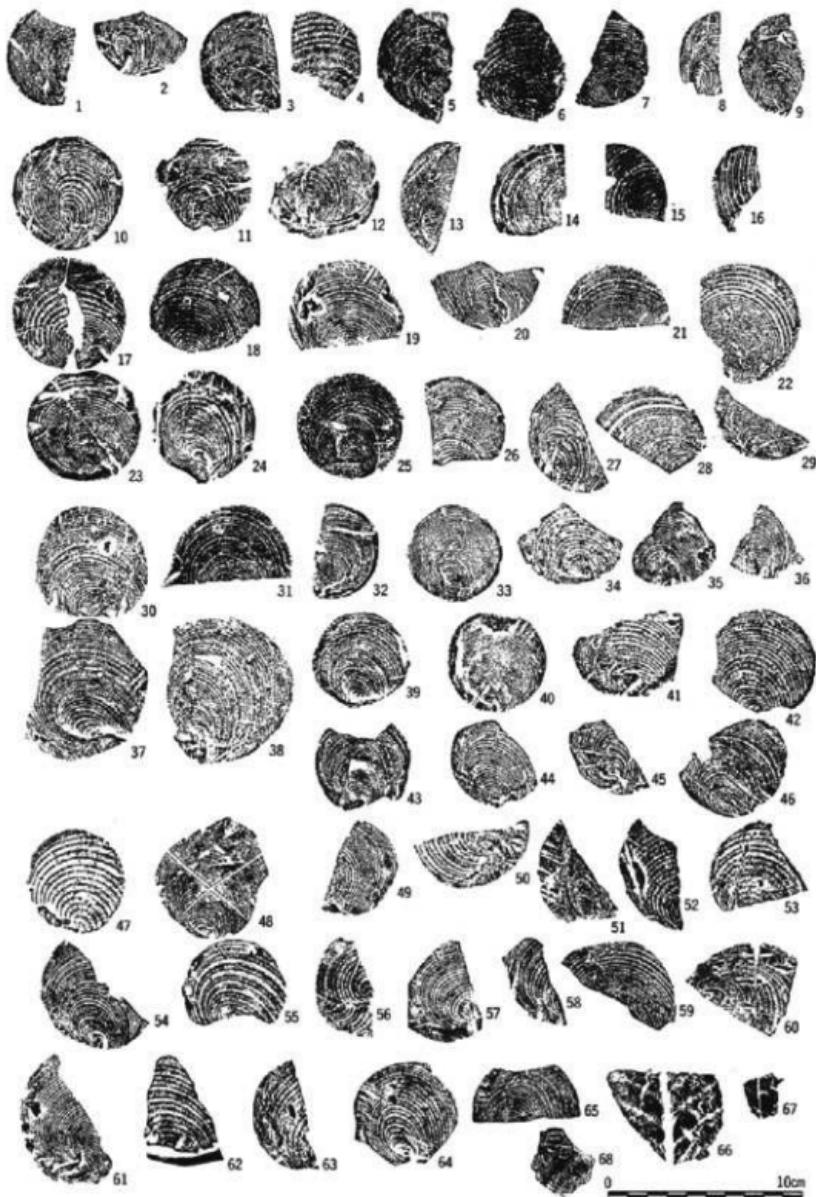
図版28の200と201は鉄製品である。201はSK7から出土したもので刃子の基部とみられる。また、200はノミの基部と思われる。袋状となった内部に木質部が残っている。刃先は折損していない。I～II層からの出土であり、所属時期は明らかでない。

排番 図号	図番 版号	出地 土点	種別	器種	焼成	胎土	色調	法量 (mm)		調整		底部	分類	備考	
								口径	底径	器高	外面	内面			
263	42-21II	土師器 (内裏)	坪	良好	白色磨砂を 若干含む	白色	暗黄色	56		無調整	ミドリ 無調整	白い手切り 無調整	I A3or4		
264	19-163-29-25II	土師器 (内裏)	#	#	白色磨砂を 若干含む	黑色	黑色	64		ミドリ 無調整	#	#	I A3		
265	19-162-35-21I	高台坪	#	白色磨砂を 若干含む	白色	暗黄色	113	49	29	無調整	#	ナデで不明	I C1		
266	19-161-X-III	#	坪	#	白色磨砂を 若干含む	#	58			無調整	ミドリ 無調整	白い手切り 無調整	I A3or4		
267	19-166-42-24II	#	高台坪	#	黑色-白色を 胎土を割合せ	#	60			無調整	ミドリ 無調整	白い手切り 無調整	I B1		
268	19-165-41-25II	#	坪	#	白色磨砂を 若干含む	灰褐色	124	40	54	無調整	ミドリ 無調整	白い手切り 無調整	I A3		
269	19-167-48-21I	土師器	壺	#	白色磨砂を 若干含む	#	133			ハケメ	ハケメ		I D		
270	42-23II	土師器 (内裏)	坪	#	白色磨砂を 若干含む	#	72			無調整	ミドリ 無調整	白い手切り 無調整	I A3or4		
271	19-164-43-23II	土師器	#	#	黑色磨砂を 若干含む	暗黄色				#	ミガキ	ミガキ	I A7		
272	19-166-47-21II	#	壺	不良	粗砂を若干 含む	暗褐色	82			ハケメ	ハケメ	妙	I D		
273	23-157-X-20II 42-24I	あかゆき	坪	良好	帶褐色-黒色 若干含む	褐色	117	50	53~51	無調整	無調整	白い手切り 無調整	II A1	右手の握けヒ ズマあり	
274	20-176-30-27II	#	#	不良	粗砂を含む	暗黄色	121	58	53	#	#	#	II A1		
275	20-172-43-24II	#	#	良好	砂を若干含む	#	128	62	60	無調整	#	#	II A3	二重的な火跡で 断面焼けた火跡	
276	43-25II	#	#	#	苔斑砂を若干 含む	赤褐色	130	56	52				II A2		
277	20-176-43-24II	#	#	#	粗砂を含む	暗黄色	138	60	50.5	無調整	無調整	#	II A2	二重的な火跡 で斜面あり	
278	20-175-42-23II	#	#	#	粗砂を含む	#	157	68	78	#	#	#	II A4		
279	42-23I	#	#	#	白い磨砂-灰 色を若干含む	褐色		64		#	#	#	II A4		
280	35-20II	#	高台付箆	#	粗砂を含む	赤褐色	148			#	#	#	I B2	高台削落	
281	21-177-42-24II	#	壺	#	白色磨砂を 若干含む	灰褐色	236			カキメ	ロクロ		II E1a	最大断口部	
282	24-166-42-23II	#	#	#	白色磨砂を 若干含む	暗黄色	110			ロクロ	#		II E3b	#	
283	21-140-42-23IV	#	#	#	石灰粉-白色 磨砂を若干含む	#	206			上手 ロクロ	上手 ロクロ		II E1c	最大怪体部	
284	21-179-42-24I	#	#	#	黑色磨砂を 若干含む	褐色		56		ロクロ	ロクロ	無調整	II E3?	小形のロクロ 力(?)	
285	21-143-41-25 46-21II	#	瓶	#	黑色磨砂を 若干含む	灰褐色	120			#	#		II G1		
286	21-178-37-19II	#	鉢把手	やや良	石英砂を含む	暗灰色				ケスリ			II C3		
287	21-141-27-22II	#	錐	良好	粗砂を多く 含む	赤褐色					ナデ・サギリ		II C2		
288	43-19 I	瓦質土器	深鉢	#	粗砂を多く 含む	暗褐色	169								
289	21-144-43-19I	あかゆき	壺	#	粗砂を多少含む	褐色-深褐色 前に褐色	406			ロクロ	ロクロ		II F6	全体下半から 底辺は不明	
290	21-142-43-24II	#	#	#	石灰粉-黑色 磨砂を若干含む	暗黄色	240			上手 ロクロ	上手 ロクロ		II F2b		
291	22-145-42-20II	圓底壺	壺	#	粗砂-混入量 少ない	暗灰色	176						III C		
292	22-147-42-26II	#	壺	#	粗砂-小粒を 含む	#	176						III F		
293	22-148-26-21II	#	高台坪	#	粗丸、圓凸均 なし	暗青-暗褐色	70			無調整	ナデ		III B2		
294	22-148-27-21II	#	#	#	粗砂を含む	暗白色	58			無調整	ナデ		III B1b	直面輪が内側 に付く	
295	22-150-29-24II	#	蓋	#	粗丸、石英砂 を若干含む	灰褐色	102			タタキ	ロクロ		III D	直面輪が外側 に付く	
296	22-149-26-21I	#	#	#	石英砂を含む	暗灰色	88			無調整	タタキ		III B2		
297	22-154-42-24I	#	横瓶	#	石英砂を含む	暗灰褐色				ロクロ	ロクロ		III E		
298	22-151-41-23II	#	高台坪	#	粗丸、磨砂を 若干含む	暗褐色	150	88	47	無調整	ナデ		III B1b		
299	22-152-27-23II	#	横瓶	#	粗丸、磨砂を 若干含む	#				ロクロ	ロクロ		III E		
300	22-153-41-23I	#	#	#	石英砂を含む	暗褐色				タタキ	ナ ナ		III E		
301	22-155-43-19I	圓底壺	やや良	石英砂を 若干含む	石英砂を 多く含む	暗褐色				ナ ナ	ナ ナ		輪積瓶を右側 に残す		
302	22-156-29-31II	#	#	良好	石英砂を含む	明褐色				ナ ナ	ナ ナ		輪積瓶を左側 に残す		
303	19-170-42-23IV	土師器 (内裏)	坪	#	石英砂を含む	灰褐色	50			無調整	ミドリ 無調整	白い手切り 無調整	I A3or4		
304	19-169-42-23II 42-22II	#	高台坪	#	石英砂を含む	暗黄色	76			#	#		II B2		
305	19-171-41-25II	#	坪	#	石英砂を含む	灰褐色	144	62	56	無調整	ナデ	ナデ	I A1	底部外縁に墨書	
306	23-158-41-25II	あかゆき	#	#	粗砂-小粒を 含む	#	113	55	51	タタキ	タタキ	タタキ	II A1		
307	41-25II	#	#	#	粗砂-小粒を 含む	暗黄色	156	60	58	無調整	無調整	#	II A3		
308	23-161-41-25IV	あかゆき	坪	良好	石英砂を含む	暗黄色	53			無調整	無調整	#	II A3	鉢付着	

表-5 出土遺物観察表 (1)

拂番 固番 固号	出土地 土点	種別	器種	焼成	胎 土	色 調	法量 (mm)		調 整			底 部	分類	備 考
							口径	高径	器高	外 面	内 面			
309	23-160 41-23IV	あかやさ	升	良好	古(青)黄褐色 土色含む	灰褐色		56		無調整	無調整	回転お切り 無調整	II A2	小形立ち上がり急斜 一部ヒビガ有心
310	23-162 42-22IV	*	*	*	石英砂等 土色含む	赤褐色		68		*	*	*	II A3	
311	42-21IV	*	*	*	石英砂等 土色含む	棕黄色		56		*	*	回転お切り	II A2	
312	23-163 42-24IV	*	*	*	石英砂等 土色含む	棕褐色		67		*	*	回転お切り	II A4	
313	42-23IV	*	*	*	石英砂等 土色含む	灰褐色	152	63	72	*	*	回転お切り 無調整	II A4	器形式別、刃削れ有 平底部の心こみがある
314	24-167 43-21IV	*	羽皿	*	石英砂等 土色含む	灰褐色				*	*		II G1	
315	23-159 42-24IV	*	升	*	石英砂等 土色含む	棕黄色		50		*	*	回転お切り 無調整	II A4	
316	24-166 41-25IV	*	甕	*	石英砂等 土色含む	赤褐色	218			*	*		II E1b	最大径 口縁部
317	42-23IV	*	*	*	石英砂等 土色含む	棕黄色	104			*	*		II E3b1	
318	24-169 42-24 H. I. H.	*	台付鉢	*	石英砂等 土色含む	棕褐色		179	只(馬) 茎(茎)	*	*		II C1	
319	24-168 42-23IV	*	甕	*	石英砂等 土色含む	赤褐色	212			*	*		II E1b	最大径 体部
320	24-164 42-23IV	あかやさ	鍋	*	石英砂等 土色含む	棕黄色	406			ロクナリ タキケリ ナツアリ			II F2a	黒色地に白い模様 器形式別、刃削れ有
321	25-173 41-25IV	復器型	升	*	石英砂等 土色含む	暗灰青色	140	80	36	底部河原 ナナ		回転お切り	III A1	
322	25-171 41-25IV	*	*	*	石英砂等 土色含む	灰白色		50		無調整	無調整	回転お切り	III A1	底外面に黒帯 (判読不能)
323	25-172 42-22IV	*	*	*	瓶	灰褐色		56		無調整	無調整	*	III A2	
324	42-23IV	*	*	*	瓶及、混入物 少なし	灰青色		64	34	無調整	無調整		III A3	
325	26-177 S.K7	土師器	高台付 升(直)	*	石英砂等 土色含む			136		無調整	ミガキ		I C2	黒色処理なし
326	25-170 41-25IV	あかやさ	壺	*	石英砂等 土色含む	灰褐色	100	80	179- 杯下付 ハカリス付	底部下付 無調整	回転お切り 付蓋台		II D	墨書きあり
327	25-176 S.K7 F.	土師器	高台付升	*	石英砂等 土色含む	棕黄色		74		無調整	ミガキ	不明、竹高台	I B3	黒色処理なし
328	S.K7	*	升	*	石英砂等 土色含む	灰褐色		60		無調整	ハラミ 底部お切り 無調整		I A6	
329	26-178 S.K7	*	*	*	*	*	150			ミガキ	ミガキ		I A6	
330	26-174 EP22F	土師器 (内周)	*	*	白色石英砂等 土色含む	深褐色 土色	136	72	50+ 1-2	無調整	ミガキ		I A4	
331	26-175 S.K7	*	*	*	石英砂等 土色含む	灰褐色		55		ハケテ 土色含む	底部お切り		I A2	
332	26-182 S.K7	あかやさ	*	*	石英砂等 土色含む	赤褐色	126	60	55	無調整	無調整		II A2	
333	26-180 S.K7	*	*	*	砂及十音 土	灰褐色		132	60	62	*	*	II A4	
334	26-183 S.K7	*	*	*	細砂を含む			66		*	*		II A3	
335	S.K7	*	鉢	*	石英砂等 土色含む	赤褐色	226			*	*		II C1	
336	S.K7	*	甕	*	石英砂等 土色含む	灰褐色		75		*	*	回転お切り	II E3d	
337	S.K7	あかやさ	*	*	石英砂等 土色含む	灰褐色		133		*	*		II E2b	
338	S.K7	復器型	升	*	瓶及、混入物 なし	灰褐色		130		*	*		II A?	
339	EP20F	あかやさ	羽皿	*	石英砂等 土色含む					*	*		II G2	
340	26-181 S.K7	あかやさ	甕	*	石英砂等 土色含む	棕黄色	216			上 サカワ コラ	上 サカワ コラ		II E1b	最大径口縁部
341	EP19F	土師器 (内周)	*	*	白色石英砂等 土色含む	灰褐色	150	69	20	底部下付 ミガキ	底部お切り 無調整		I A3	外面上第一節 黒色を呈す
342	20-173 EP22F	あかやさ	*	不良	粗砂を含む	灰褐色	108	58	55	無調整	無調整	回転お切り	II A1	
343	EP22F	あかやさ	*	良好	石英砂等 土色含む	棕黄色	128	60	48	無調整	無調整		II A2	
344	EP22F	あかやさ	*	*	白色石英砂等 土色含む	赤褐色	368			ロクロ	カキ目		II F1a	
353	S.K7	あかやさ	甕	*	石英砂等 土色含む	棕黄色	110			ロクロ	ロクロ		II E3c	最大径口縁部
拂番 固番 固号														備 考
345	27-192 47-22 II	石製品	鐵石	*		暗褐色	73	71	20					
346	27-186 42-19 I	土製品	土罐	良好	石英砂等 土色含む	灰褐色	52	14						
347	27-191 44-26 II	*	*	*	石英砂等 土色含む	灰褐色		13						
348	27-167 20-26 II	*	質・秋 土製品	*	石英砂等 土色含む	赤褐色		10	28					
349	27-189 26-21 I	*	*	*	石英砂等 土色含む	灰褐色		10	22					
350	27-188 42-21 III	*	*	*	石英砂等 土色含む	赤褐色		9	20					
351	27-185 43-21 II	*	土罐	*	石英砂等 土色含む	棕黄色	55	13						
352	27-184 49-18 II	*	陶器	*	石英砂等 土色含む	棕黄色	53	31	17					

表-6 出土遺物観察表(2)

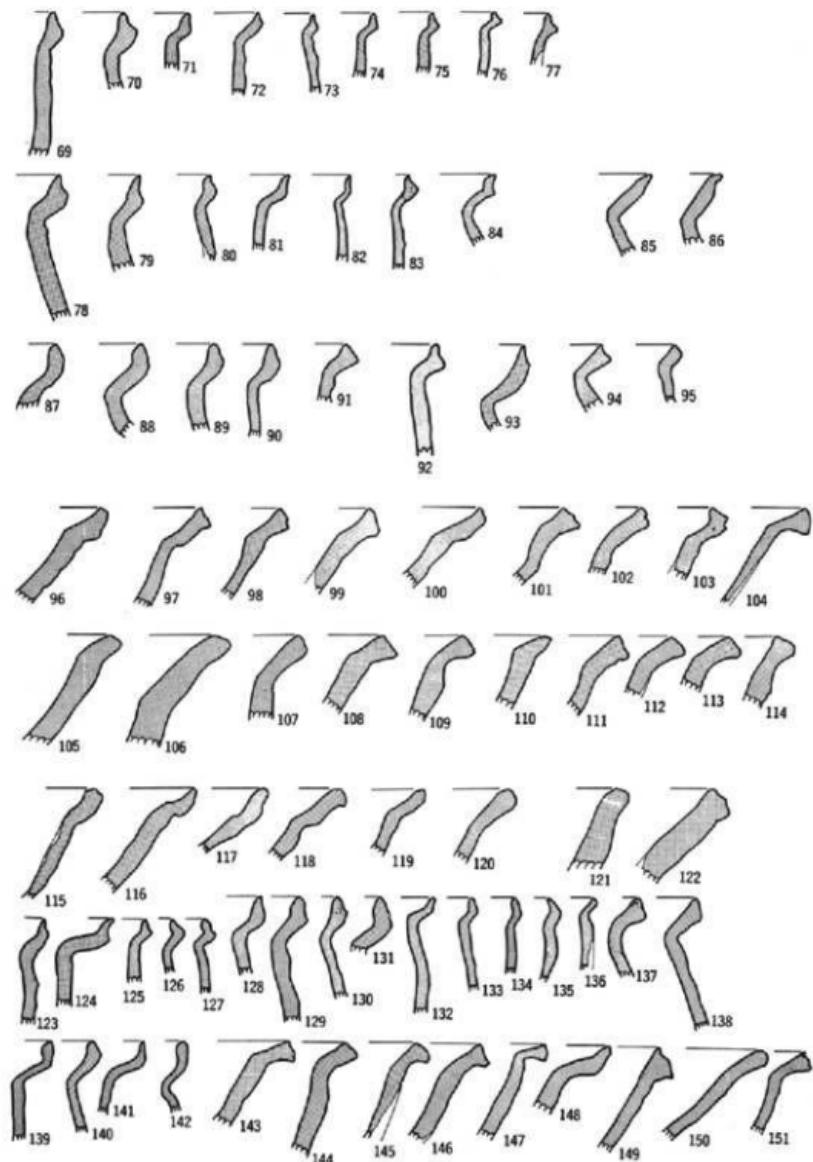


第21図 あかやき壺底部・土師器壺底部

-33-

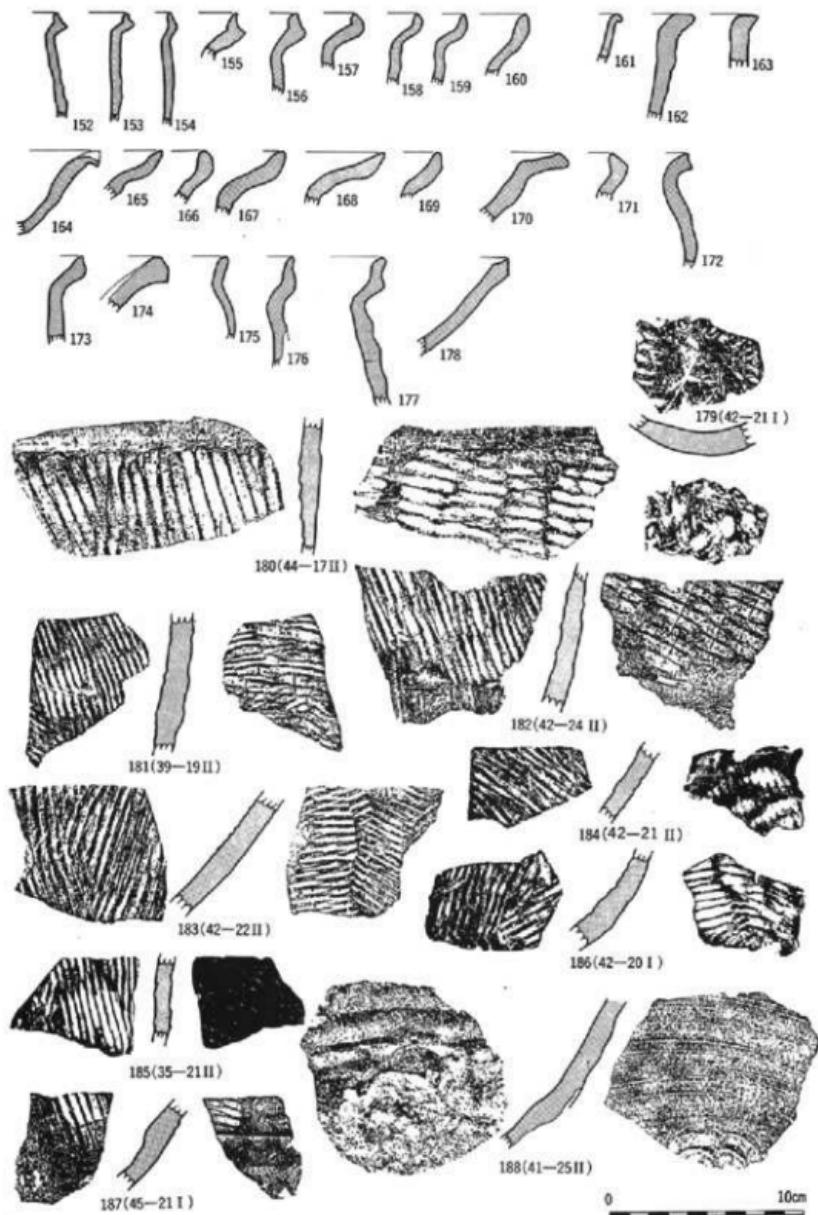
1~38: I~II層 39~53: IV層

54~65·68: SK7 66: SD4F 67: 55~181



0 10cm

第22図 あかやき甕・堀口縁
69~122: I~III層 123~151: IV層
※断面中スクリーン: あかやき土器

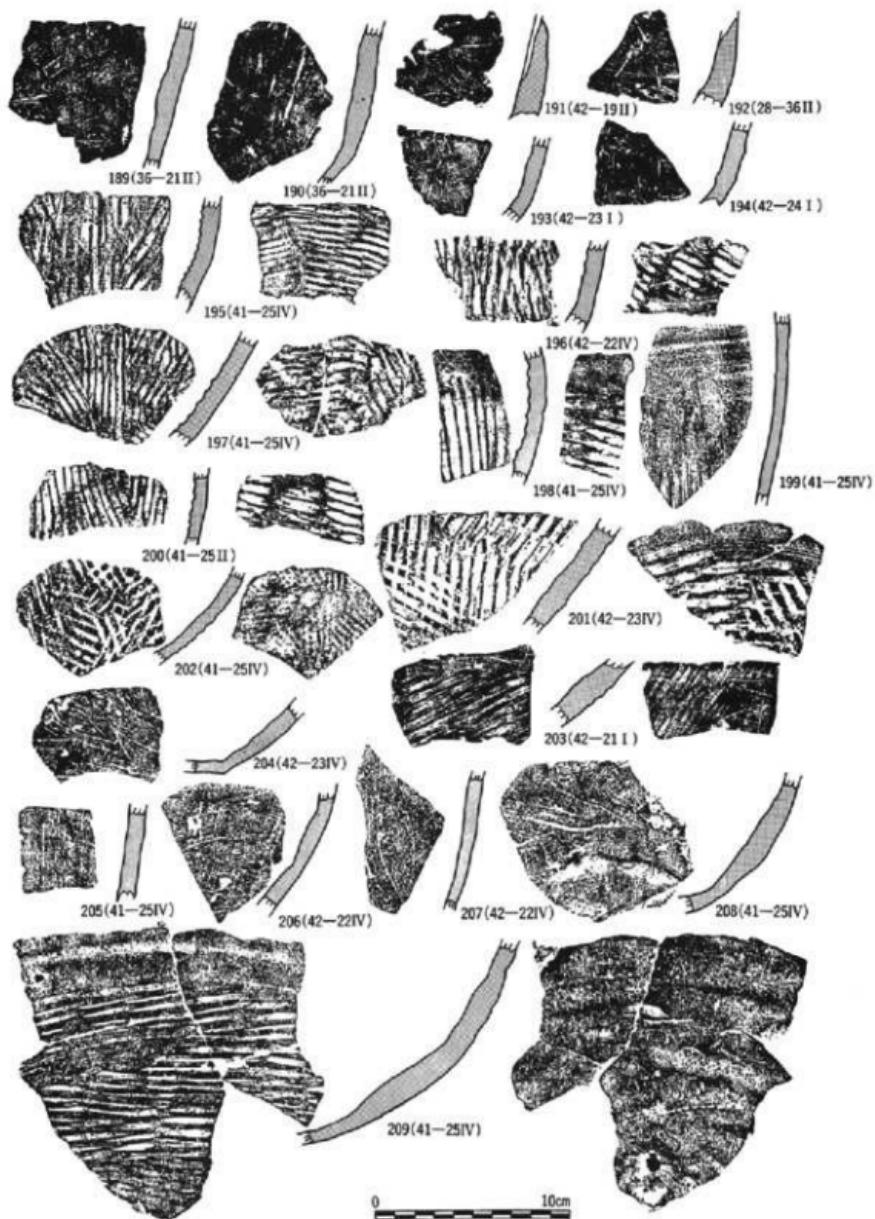


第23図 あかやき甕・堀口縁・体部

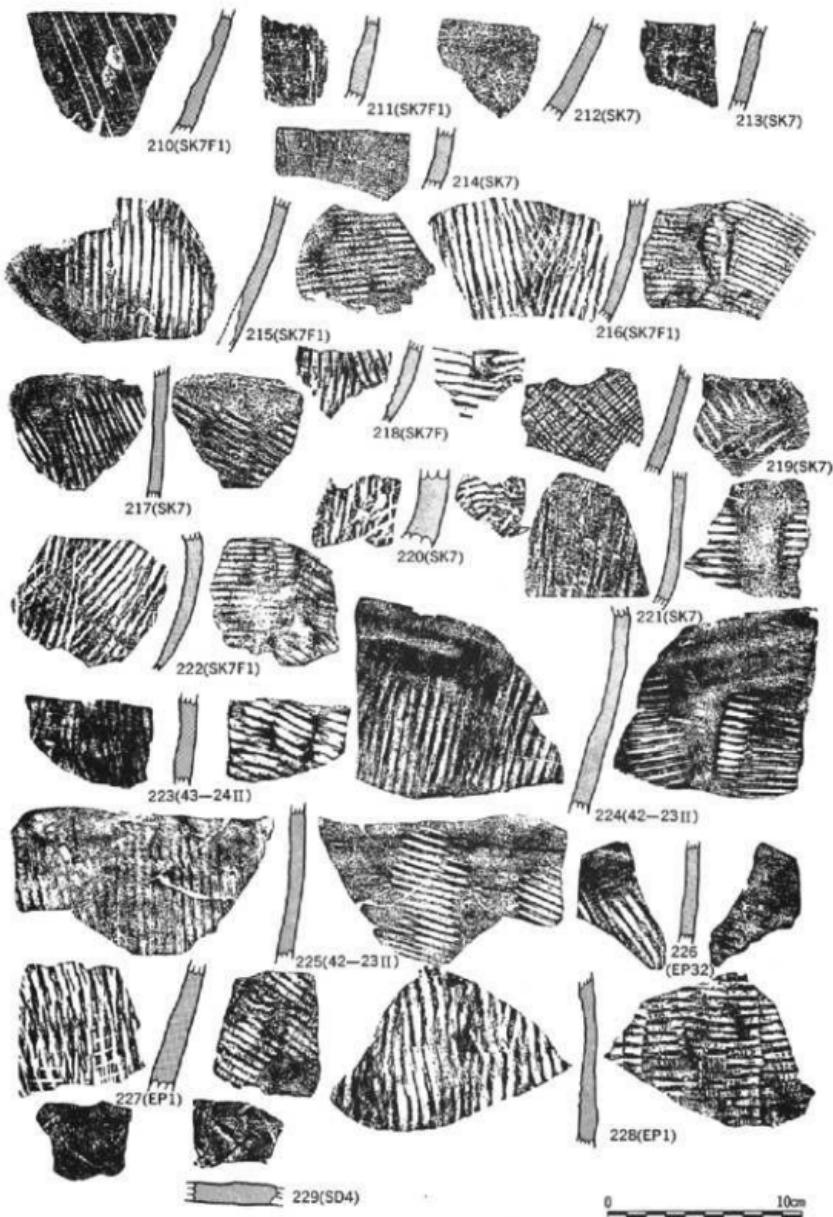
152~169: SK7 170~172: SD1

173~174: SX8 175: Ep34 176: RP14

177: RP15 178: X-O



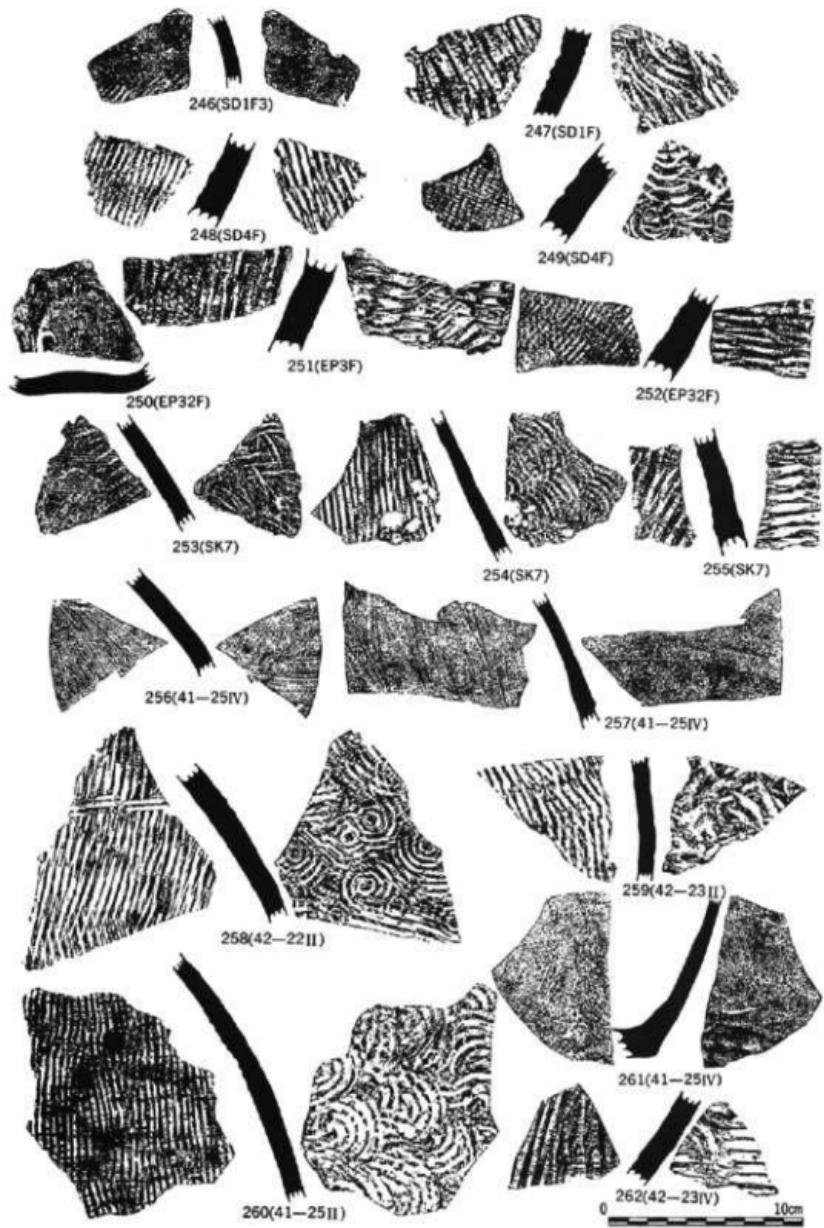
第24図 あかやき甌・堀体部



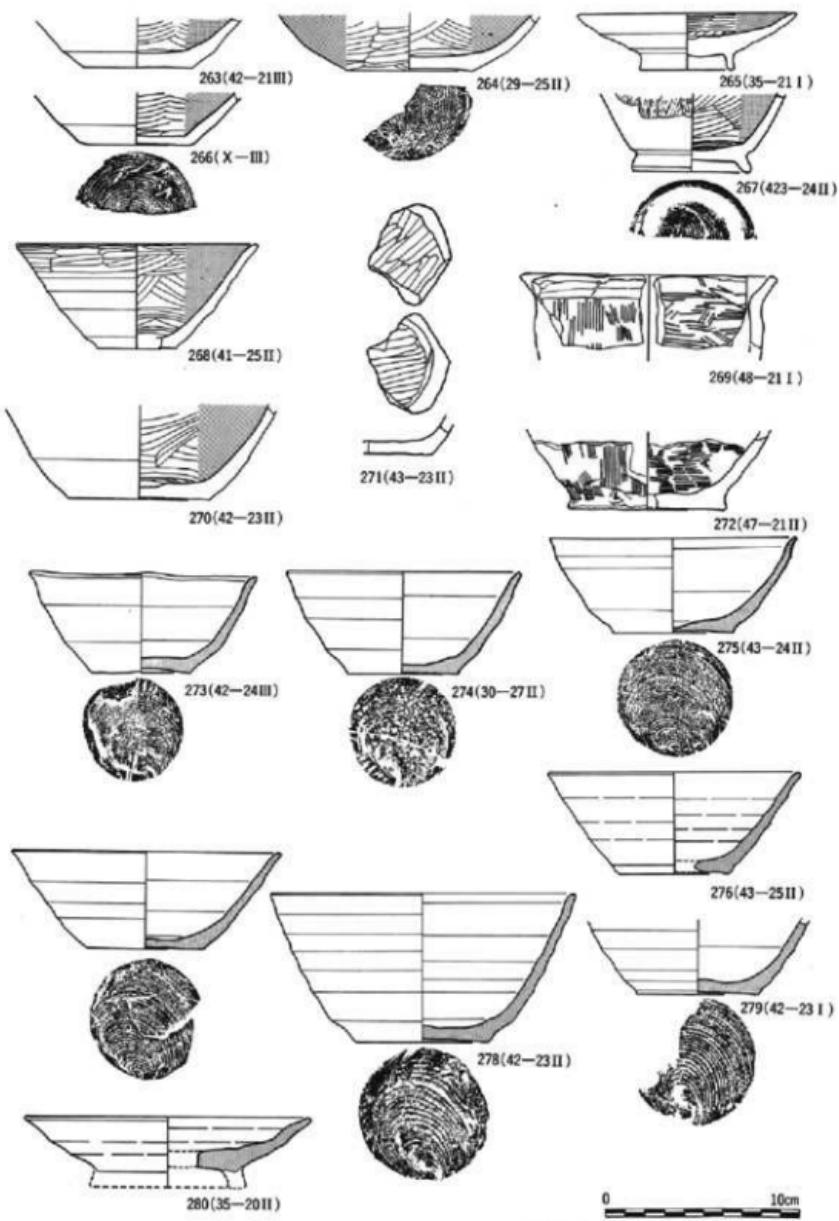
第25図 あかやき甕・堀体部・底部



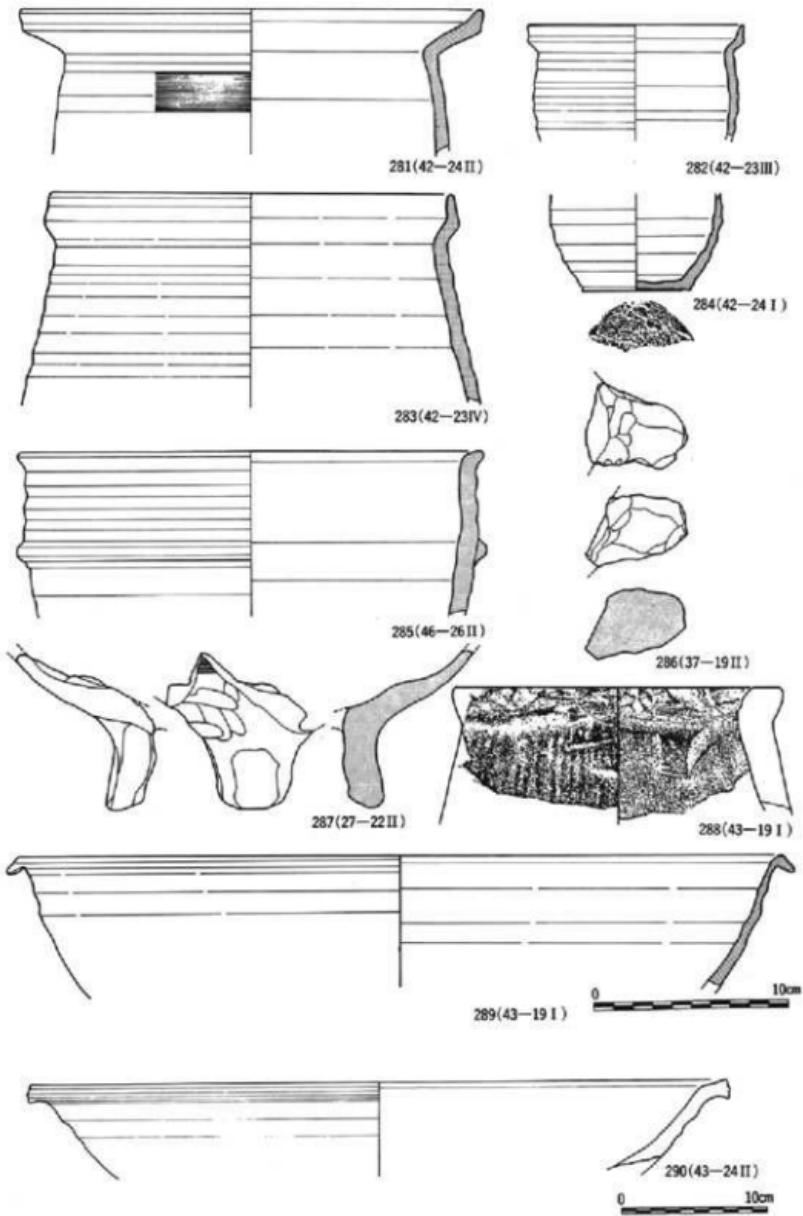
第26図 須恵器壺・壺体部
※断面図：須恵器



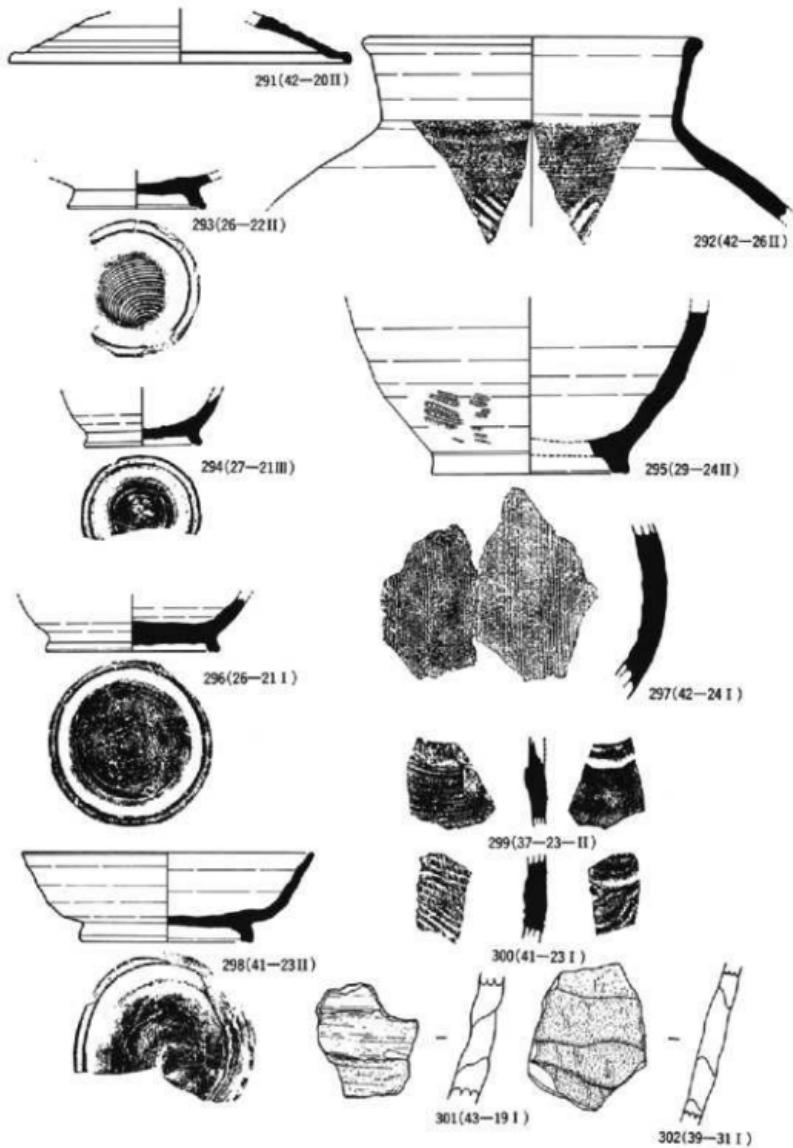
第27図 須恵器甕・壺体部他



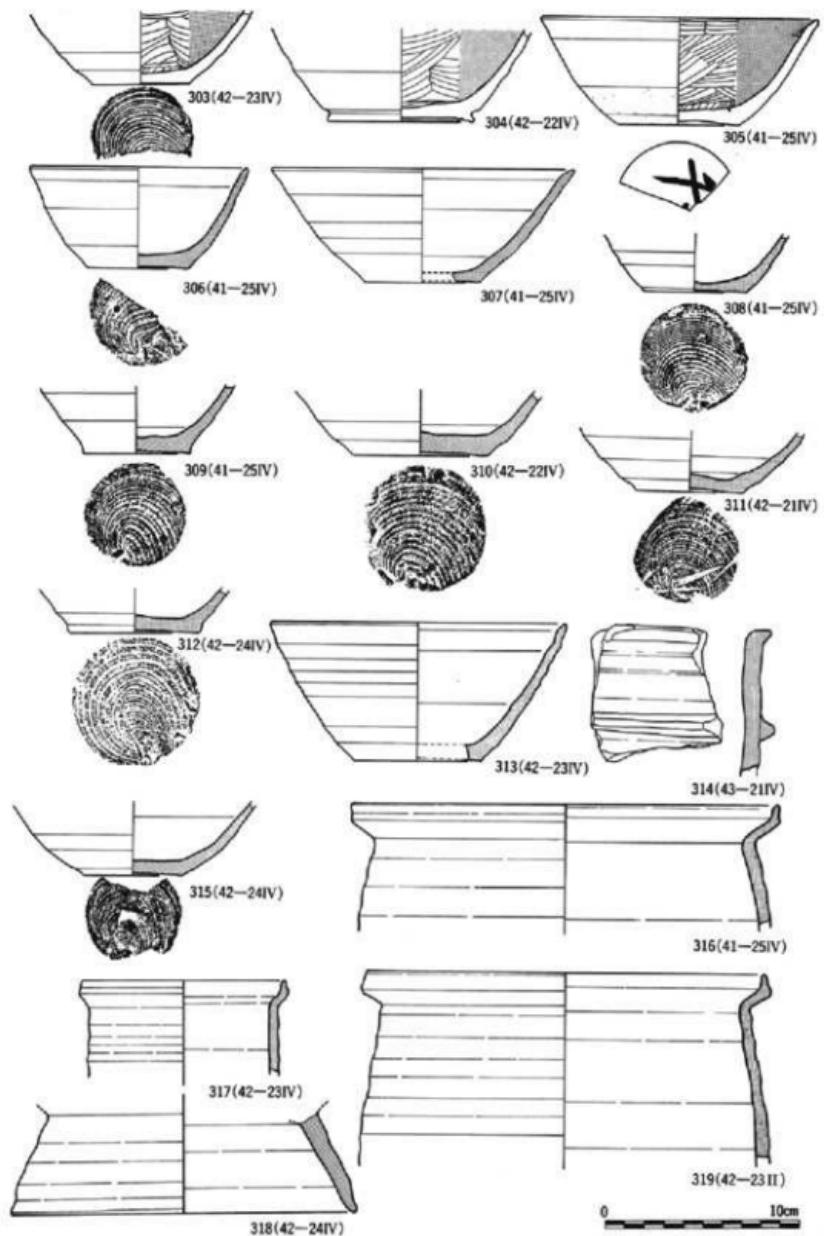
第28図 I～III層出土土器 (1)
※断面白ヌキ：土器器



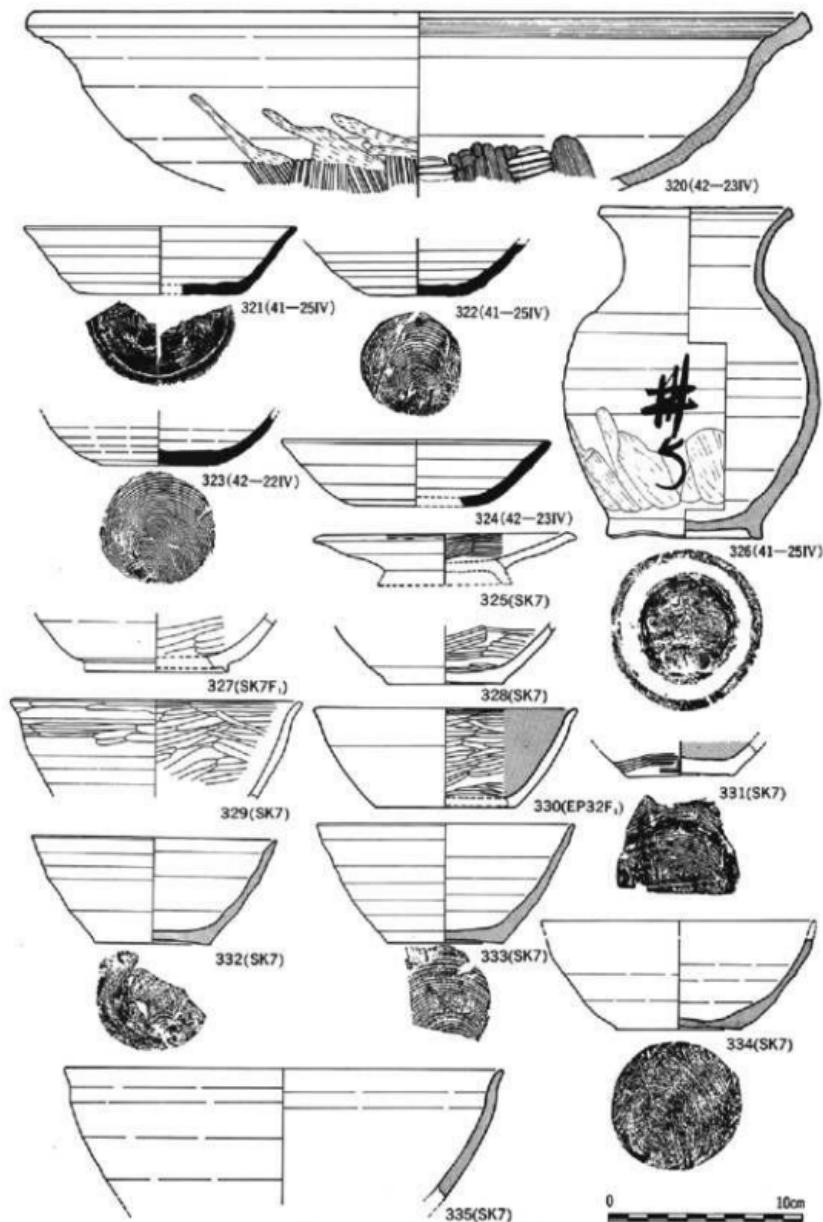
第29図 I～III層出土土器 (2)



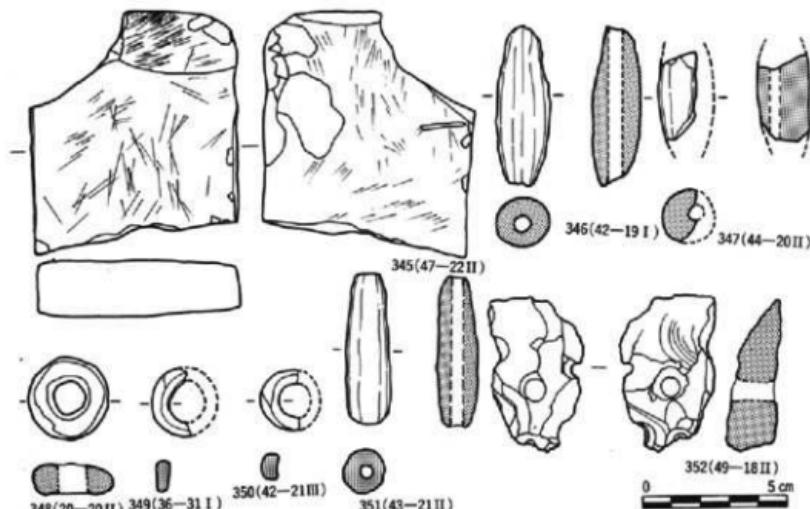
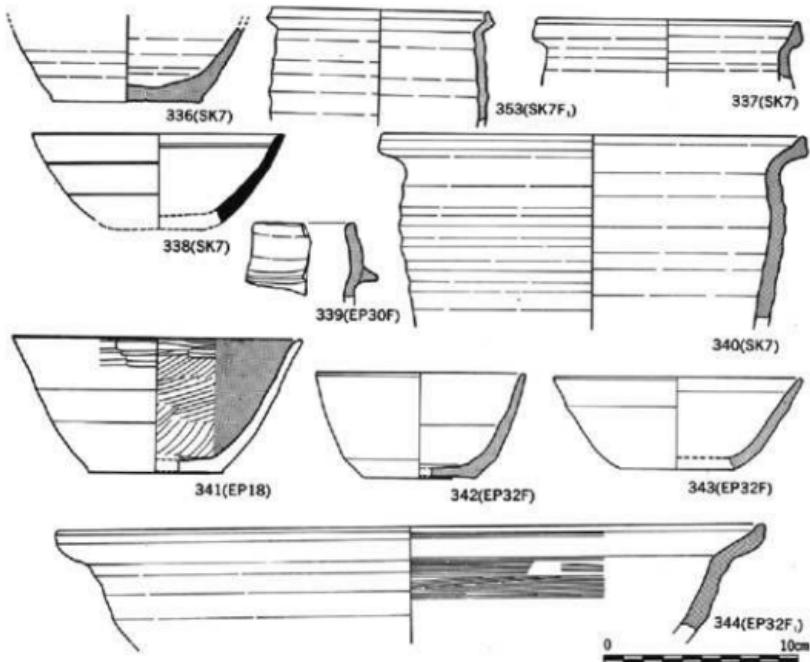
第30図 I～III層出土土器 (3)



第31図 IV層出土土器（1）



第32図 IV層出土土器（2）・SK7土壤出土土器（1）



第33図 SK 7 土壤出土土器（2）・各遺構出土土器・土製品・石製品

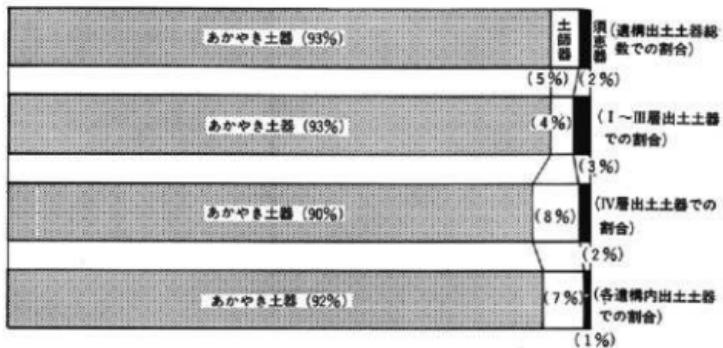
VII まとめと考察

1 出土土器の検討

種別の土器組成とあかやき土器

本報告では、出土土器を「土師器」「あかやき土器」「須恵器」の三種に大別した。本遺跡における層位・遺構毎の上記三者の組成は第34図に示す通りである。この中で、特にあかやき土器として類別した一群については、その物を規定するための要件を明確にし、用語の定義付けを行っておく必要性を痛感する。結論的に言えば以下の諸点に要約されよう。

1. 酸化焰焼成が意図されたものであること。2. 製作器種には供膳・煮沸・貯蔵の各形態があるが、供膳形態・一部の貯蔵形態を除いては、須恵器と競合せず、煮沸・供膳形態にその製作の主体がある事。その意味では土師器と強い競合関係にある事。3. 製作技法では、須恵器製作技法の系譜に連なるが、胎土の選択、成形(粘土紐巻き上げ or 積み上げ→ロクロ or タタキ)、整形(ケズリ・ナデ)の各段階を通じて須恵器とは区別出来るあかやき土器に適した技法が時間的変遷の中で確立され、独自の製作体系をもつに至る事等々



第34図 土器組成グラフ

層位 遺構 番号	あかやき				土 師 器				須 恵 器				土 製 品				計		
	环	盤	鉢	盃	内面	内側	外側	縁	环	盤	鉢	盃	縁	縁	縁	縁			
I~III層	11.00	4.18	117	2	0	567	38	6	5	8	103	7	156	132	4	2	3	12	81 1 15,389
	IV	1.58	759	24	2	0	159	3	1	0	0	14	0	8	12	0	0	0	0 0 0 2,132
包含層計	11.38	4.87	141	4	0	726	41	7	5	8	117	7	164	144	4	2	3	12	81 1 (17,512)
R.P. ・遺構内	R.P.	90	53	1	0	1	24	0	0	0	1	0	1	0	0	1	2	0	0 1 175
	E.P.	31	12	0	1	0	19	0	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0 0 0 67	
	S.D.	103	83	1	0	0	10	0	0	0	1	4	0	11	2	0	0	0 0 0 215	
	S.K.	1.81	616	3	0	0	145	0	7	8	0	19	0	15	0	0	0	0 1 0 2,663	
	S.X.	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 0 0 6	
遺構内他計	2.27	766	5	1	1	200	0	9	8	1	25	0	26	2	0	1	2	0	1 1 (3,126)
合計	11.57	5.60	146	5	1	926	41	16	13	9	142	7	190	146	4	3	5	12	9 2 20,638

表-7 出土遺物数量一覧 (2)

※ 表註 内ミは内面ミガキ
間ミは内外面ミガキ

(破片点数)

である。従来の用語としては、「赤焼き土器」が一般的であるが、用語の定義としては小笠
^(註-12)原好彦氏の論考が最もわれわれの考え方方に近い事から、氏の用例「あかやき土器」を用いて
^(註-13)いる。

種別の土器組成では、遺跡全体・I～II層・IV層・各遺構内ともにあかやき土器の占める割合が90%以上の数値を示す。次いで土師器が4～8%で、IV層・各遺構内（主としてSK7）にやや多く、I～II層までの包含層での割合は低い。須恵器は、1～3%の数値を占めるにすぎず極めて少ないと言える。こうした種別の土器組成の問題は、大きな時間の流れから見た場合、あかやき土器の占める割合が多くなるべきである。
^(註-14)性格が大きく関与する筈であり、性急な結論は控えるべきである。

器種別の土器組成

遺跡全体から出土した土器類の個体数は、その遺跡を残した人々の生活様式を知る上で欠かすことができない。ここでも、その前提に多々問題を残すが、底部個体数や、接合作業を通して得られた個体数から種・器種別の数量を機械的に割り出し、その関係を見てみよう。個体数としてまとまりのあるあかやきの壺・甕・坏、土師器内黒坏・須恵器甕の比較では、あかやき壺を1とした場合、同甕3、同坏10、土師器内黒坏1、須恵器甕1となる。その他のものは日常什器組成の一般的な方でなく、その希少性が問題となろう。

製作技法の検討

a 土師器

坏・高台付坏の胎土には石英砂や黒色微砂が含まれ、あかやき土器の胎土との差異は見出せない。色調は橙黄色になるものもあるが、大半は灰褐色を呈し、あかやき土器よりはやわらかい印象を受ける。第25図に示したように、坏の口径と底径の大きさは、I～III層、IV層、SK7の間でバラつきがみられるが、遺跡全体をみると、口径は12～16cm、底径は5.5～6.5cmに集中し、あかやき土器坏よりも幾分大きめであるといえる。内面のミガキ方向は、口縁直下は口縁と平行する方向に、体部は斜め方向に、底部周縁は、周縁をまわるような方向に（第35図模式図）、そして底部は、A2類のハケメ調整のあるもの1点が放射状のミガキ（同図2）となるほかは、すべて平行状のミガキとなっている。また、その切合関係から、口縁部直下と、底部周縁が新しく、体部は下方から上方へという調整順序が読みとれる。この調整法と順序はA1、A3、A4、A6（図版26、179b）、B1、B2、C1類に共通する。内面に黒色化処理を施した土器と、非黒色処理の土器に、ミガキの共通性があることからこれらの非黒色処理の土器も本来は、黒色処理を受けるべきものであった可能性が高い。

甕はロクロ不使用で、口縁部はヨコナデ、体部外面は綫方向の、内面は横方向のハケメが施されている。また底部は砂底であり、木葉痕のあるものもある。胎土はあかやき土器の甕・堀との相異点を見つけることはむずかしいが、色調は暗褐色となり、焼成温度が異なるものと考えられる。

b あかやき土器

坏の胎土は、土師器坏に似て石英粗砂や黒色微砂を含み、水漉粘土は使われていない。図版20—174のような割れ方からみて、成形は粘土紐巻きあげによる可能性が高い。色調は橙黄色と灰褐色、それに赤褐色を呈し、焼成も良好でかたい。口径は12~14cm、底径は5~6cmに集中し、I~III層、SK 7の間でバラツキも少ない。

甕・堀の胎土も坏に類似するが、大粒の粗砂の混入がめだつ。大形の甕、すなわちE1類は上半にロクロメ、下半にタタキがあり、第23図180や第25図224のように、ロクロとタタキの境界部分で器厚が極端に異なるものが多い。また、ロクロとタタキ、それにケズリの切り合い関係をみると、例外なくロクロ→タタキ→ケズリとなる。このことから成形にあたっては上半と下半を別々につくって接着し、その後にタタキによって成形、さらにケズリ調整を行ったものと思われる。堀においても、このような工程が観察される。堀では裏面に残されたアテをナデによって消したものもある（第24図209）。タタキとアテの組み合せをみると、木目に平行する溝を入れて作ったタタキ具による平行タタキと平行アテの例が多い（第23図180、181、183、184、185、186、187、第24図195、197、199、第25図215、216、220、221、222、224、225、227）。

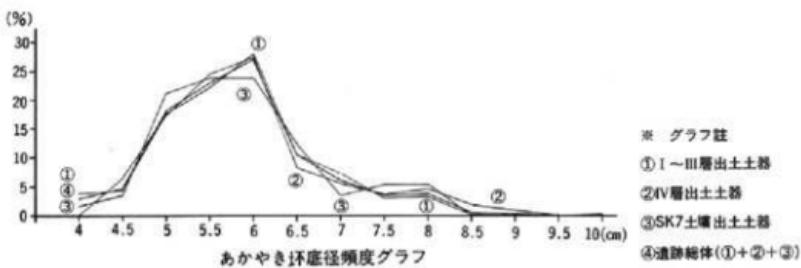
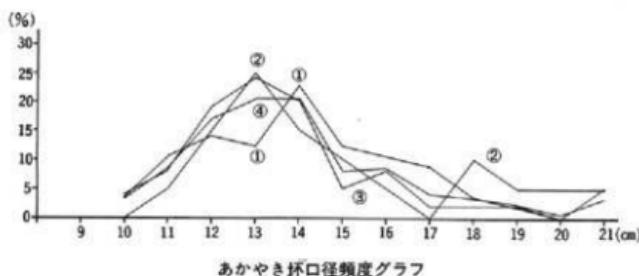
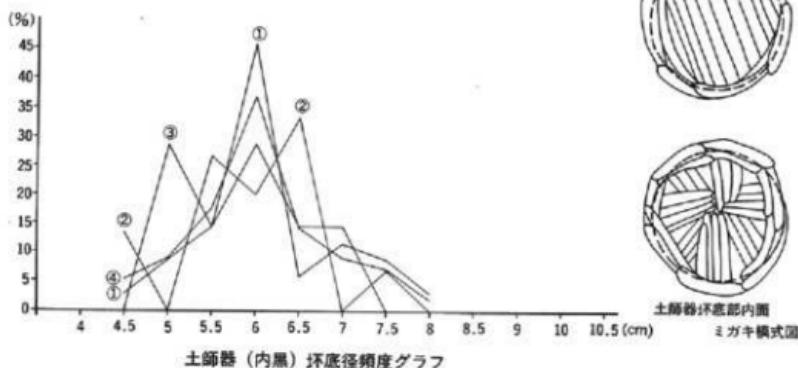
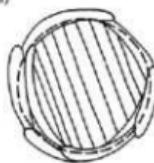
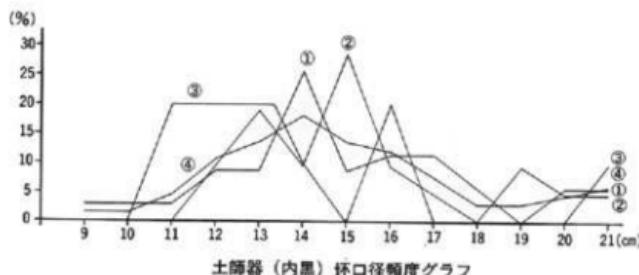
ほかに、平行タタキと木目に直交する溝を入れて作った格子目ふうのアテの組み合せによるもの（第23図182、第24図196、第25図223、228）、格子目ふうタタキと平行アテのもの（第24図197、198、第25図217、218、219）、格子目ふうタタキと格子目ふうアテ（第24図201）がある。また、同心円のアテをもつ堀の破片が1点だけ出土している（第23図188）。

E2、E3類の甕は、恐らく粘土紐巻きあげないしは積みあげの後、ロクロで成・整形され、回転糸切りによって切り離されたものとみられる。E3類では切り離し後の調整はなく、底部の大きさも坏とほぼ同じであるが、立上がりの相異で区別できる。

甕・堀とも色調は橙黄色を呈するものが多く、焼成も良好でかたい。

c 須恵器

坏・高台付坏、蓋の胎土は水漉粘土を使うもの（第30図291、293、第32図321、323、324、第33図338）と、砂を含むもの（第30図294、第32図322）があり、それぞれに、ヘラ切りと糸切りのものがある。しかし、土師器・あかやき土器の坏と比較すると、砂を含むものについても、器面は、肌理がこまかく、焼成以前の段階での差異が明らかである。



第35図 あかやき・土師器 (内黒) 壺口・底径頻度グラフ・土師器壺底部内面ミガキ模式図

壺・甕の胎土には砂が含まれるが、前述したように、タタキとアテの組み合せに、あかやき土器の甕・堀との相異がある。

I～II、SK7、IV層の土器組成

本遺跡の土器群は掘立柱建物跡の確認面であるIII層を境として、層位的にI～II層とIV層に、すなわち、掘立柱建物以降の土器と、掘立柱建物以前の土器に分けることが可能である。

また、掘立柱建物跡と同時期ないしは新しい時期と推定されるSK7から比較的まとまった資料の出土がある。ここでは、これらの三者の土器組成について検討してみる。なお、III層出土の土器は、厳密には掘立柱建物以前と見えられるが、I、II層とIV層の土器の区別を明確にするため、ここでは意識的に除外した。また、X軸42以東の調査区ではIII層の分布がなく、I・II層と、IV層の間で2例の接合があったが、この資料については、一部攪乱等によるものと考え、IV層に帰属させた。

表-8は図示した土器について、前章で分類したもののが否を表わしている。○印は実測で、△印は断面実測あるいは拓影図で示したものである。また十は図示不能であるが、破片の存在を確認しているものである。この表と、表-3、それに表-5・6から、その量も考え合わせて、組成をみるとつぎのことが指摘できる。

- 1 体部下半に回転ヘラケズリのある内黒土師器杯(A1)がIV層に、ハケメのある杯(A2)がSK7にそれぞれ1点ある。
 - 2 II層に土師器の甕がある。
 - 3 あかやき土器の甕はSK7に小形のA1類を欠くが、ほかの種類は三者に共通する。
 - 4 IV層にあかやき土器の壺と、同心円のアテのある堀の破片が各1点あるが、その他の堀、甕、羽釜については三者の間に顕著な差異はない。
 - 5 須恵器の杯・高台付杯はI・II層とIV層での差異はない。
- このように、出土量の少ないものについては、I・II層、SK7とIV層とに若干の差異が認められるが、量的に保障されたものでは、ほとんど変化がないということができよう。このこ

分類	I～II層	SK7	IV層
土師器	A1		○
	A2	○	
	A3	○	○
	A4	○	○
	A5	○	+
	A6	+	○
	A7	○	
	B1	○	
かき土師器	B2	+	○
	B3		○
	C1	○	
	C2	○	
	D	○	
	E1a	○	○
	E1b	○	○
	E1b ₁	△	○
やき土師器	E1c	△	○
	E1d	△	
	E1d ₁		△
	E2a	△	
	E2b	△	○
	E2c	△	
	E2d		△
	E3a	△	
須恵器	E3b	○	△
	E3b ₁	△	△
	E3b ₂	△	△
	E3b ₃	△	△
	E3c	△	○
	E3d		△
	E4		△
	F1a	△	△
III	F1b	△	△
	F1c	△	○
	F2b	○	△
	F2a	△	
	F3	△	
	F4	△	
	F5	△	
	F6	○	
表-8 図示土器組成表	F7	△	
	G1	○	△
	G2		○
	A1	+	○
	A2	+	○
	B1	+	+
	B2	○	+
	C	○	
E	D	△	
	E	○	△
	F	○	△
	G	○	△

表-8 図示土器組成表



第36図 日本海沿岸の主要遺跡

とから、掘立柱建物の以前・以後とはいえ、時間的にはごく近接するものと判断せざるを得ない。

平安時代土器の研究と地域性

奈良・平安時代の土器研究では、集落跡における一括遺物を基礎とし、そのセットとしての把握が要求される一方、生産地・供給地としての窯跡の研究も集落跡での研究と有機的に関連付けられなければならないのは当然の事である。以下では、日本海沿岸地域における庄内とする立場から、北陸における近年の当該期研究の状況を概観し、本遺跡出土土器の年代的位置付けを考察する。

北陸における奈良・平安時代土器の編年的研究は、吉岡康暢氏の「加賀三浦遺跡の研究」^(註-15)によってその基礎が築かれた。すなわち、同遺跡出土の土器を、出土層位により下層・中層・上層の三つに区分し、中層を奈良末～平安初期、上層を平安後期として各位置付けるとともに、関連する窯跡・集落址出土の一括資料を加えた編年的研究の基礎が示されたのである。その後、富山県内においてほぼ同一時期に初期莊園に係わる莊所跡とされる高瀬遺跡・じょうべの間遺跡が調査され、舟崎久雄氏による富山県内の須恵器窯跡の編年的研究と、高瀬・じょうべの間両遺跡出土土器の編年代位置が考察された。すなわち、両遺跡出^(註-16)

土器は、「加賀三浦中層」と「同上層」の中間に位置し、なおかつ「三浦上層」より「同中層」に近く、その年代は9世紀代であるとする考えが示されたのである。また、巻末に収録された「北陸の莊園と両遺跡」では、「三浦上層」期についての年代観をめぐって、高島忠平氏等により、「9世紀～10世紀末」までの幅があるのではないかとする見解が出されるなど、その位置づけについての論議が活発化した。さらに、富山県立山古窯跡群出土須恵器をもととする藤田富士夫氏の5基の窯跡編年（8世紀末～10世紀初）もほぼ同期の研究成果である。その後の調査研究では、魚津市佐伯遺跡における9C前半を主体とするとされた出土遺物や、小杉町・大門町、小杉流通業務団地内遺跡群中の2号窯跡および豊穴住居跡出土遺物、さらに、断続的に継続されている入善町じょうべのま遺跡の調査等が注目されている。しかし、以上の報文や論文の中では、本報告で用いているあかやき土器とする概念ないしそれに近いものも見られず、すべて「土師器」として扱われている。但し、吉岡氏は、「須恵器と土師器の成形技法と煮沸形態の共通性、土師器にみる器種の著しい規格化、…中略…両工人集団が緊密な技術交流を通して接触しつつ生産性の向上をはかっていたと考察せざるを得ない。」あるいは、「北陸では須恵器のⅠ期後半の時期から、貯蔵と供膳形態は須恵器、煮沸形態は土師器というふうに、はっきりと日常用器の中で機能分担がおこなわれている。その反面、須恵器の工人と埴輪ないし土師器の工人が緊密な技術交流を持続していたフシがある。」とする見解や「須恵器から土師器への転換も11世紀に急速に進行したのではなく9世紀ごろから餘々に展開していたということになれば…後略」とする部分等は、まさに筆者らのあかやき土器認識の出発点とも言えるものである。「11世紀…、9世紀…」では、前者は、あかやき土器後半期における画期としての所謂須恵系土器の認識と一部共通し、後者はその出現期としての年代的妥当性があると考える。

一方、新潟県域におけるあかやき土器の認識についてみてみると、南中赤坂・南中五輪岬遺跡の報文中に千葉英一氏の論者がおり、おそらく初出であろう。細部では筆者らと見解を異にする部分が認められるが、あかやき土器の基本的な認識の点ではほぼ同一とすることができる。上記千葉氏の調査より3年前、1冊の興味深い報告書が中川成夫・川上貞雄・土井義夫の各氏により刊行されていた。笛神村狼沢窯址群の調査報告書である。そこで発掘された第2号窯跡（半地下式の登り窯）からは、「一見土師器質の一群」・「土師器のような焼成を示す一群」の土器が窯床から出土したという。すなわち、大形甕、白色の大形甕底部、平底壺、丸底壺、ヘラミガキがある碗等である。こうした事実に対しては、「偶然の所産」と基本的には理解されており、「製品として流通していた可能性も考えられよう。」と結論づけられている。須恵器の機能上の形態は、供膳・貯蔵形態にある。煮沸形態の堀甕が、しかも一見土師器質（すなわち酸化焰焼成）で、さらに窯床から出土すると

いう事実は、北陸における平安期の土師器、本報告でいうあかやき土器の生産跡を理解する上で重要な意味をもつ。庄内地域の古代窯跡についても狼沢窯址と同様の現象が認められる事について、以前に若干触れた所があった。そこで理解は、「あかやき土器の生産は、須恵器を焼成したと同じ登り窯を使用した。」につきると思われる。しかし、曾根遺跡の報文で家田順一郎氏が指摘するごとく、窯跡における須恵器とあかやき土器のあり方、およびその焼成の方法等実証的に解明されねばならない問題が多く残されている。また曾根遺跡報文は、新潟県下の最近の研究状況、成果を知る上で有意な指唆に富み評価される。

庄内の各地の遺跡からは、北陸文化の範囲としてもたらされた特徴的な遺物が時々認められる事がある。遊佐町地正面遺跡出土の双耳瓶等は、まさしく北陸特有の器種でありその形態からは、石川県河北郡高松町黒川2号窯式^(註-26)9世紀前半代に比定される。降って12世紀後半から13世紀代には、多量の珠洲系陶器がもたらされる現象が近年明かにされている。^(註-27)以上的研究状況を概観すると、庄内地域における平安時代遺跡の出土土器は、「絶じて石川～秋田県の北部日本海地域の土器群と強い類似性を示し、山形県の内陸地域や太平洋岸の地域との共通性は少ない。平安時代の庄内の土器は『北部日本海沿岸土器文化圏』のなかで理解できる。」とする渋谷孝雄の見解に帰着するであろう。そこには、平安期の庄内(飽海平野)^(註-31)が、9世紀以降の新しい出羽国衙として建置された「城輪柵遺跡」を中心とする一大フロンティア的性格を有する事、同時にそれを支えたのが北陸道諸国との文物であった事等々の歴史的背景とも強く結びつき、その影響の一端を物語るものといえる。^(註-32)

出土土器の年代とその前提

宅田遺跡出土の土器は、その出土状況(層位)から、I～II層とIV層、およびSK7内出土土器群の三つのまとまりをもつ土器群として大別できた。しかし、製作技法・土器組成の比較検討の結果からは、三者の間に顕著な差異を見い出す事ができず、量的に保障される土器相互でもほとんど変化を見い出せなかった。すなわち、この三者には、時間的な先後関係は言えても土器型式として捉えられるだけの時間差がなく、極めて近接する時間の中で発起したものと判断された。

種別の土器組成だけを見れば、あかやき土器がI～II層、IV層、SK7ともに90%以上となり、次いで土師器が4～8%，須恵器が1～3%の順で構成される。前述した地正面遺跡の9世紀前半と推定したSX11では、須恵器50.2%，あかやき土器44.6%，土師器5.2%^(註-34)の組成率を示す。須恵器窯の底部切り離しが窓切り主体である関B遺跡では、須恵器40.7%^(註-35)あかやき土器54.7%，土師器(黒色土器)3.5%，同じく回転糸切りが主体の茅針谷地遺跡^(註-36)では、須恵器15.1%，あかやき土器78.8%，土師器(黒色土器)5.9%を各示す。また、竪穴住居跡を検出した上台遺跡では、須恵器3.5%，あかやき土器67.7%，土師器24.4%とな^(註-37)

り、壺類の切り離しは種別を問わず回転糸切りである。北田遺跡では、須恵器12%、あかやき土器^(註-38)82%、土師器6%で、須恵器壺類の切り離しは回転糸切りである。さらに、上ノ田遺跡のS D401では、異時期のものが混在するとされるが、横瓶などの奈良時代まで遡り得る可能性ある一群の資料がある。種別の土器組成を参考まで記せば、須恵器79.9%、あかやき土器18.2%、土師器（黒色土器）1.3%の組成比を示す。須恵器・高台付壺での底部切り離しは、平底壺で箆切りが84.5%、回転糸切り15.5%、高台付壺で箆切りが41%、回転糸切りが59%を占めるという。上記各遺跡とも全面発掘ではなくまた、同一性格とも考えられない事から一様の比較は多分に危険性をともなうが、全体的な流れとすれば、須恵器壺類での箆切り→回転糸切りへ、須恵器の日常什器に占める割合の減少とあかやき土器比率の増大、土師器の絶対量の減少といった傾向性は認めてよいだろう。

一方、器面に施される二次的な調整（回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ等）では、あるものからないものへの変遷が一般的には了解されるが、特に壺類での考察はされても、種別器種総体での技法分析は厳密にはなされていないのが現状である。タタキ技法一つだけを見ても、須恵器とあかやき土器ではその用法に差異を認め得ることは、本文中の製作技術の検討の項で明らかである。また、器種・器形的に古いと思われるもの（例えば横瓶の存在・長頸壺の肩部の張り出し。）ないし、壺・甕類の口縁部形態で簡素なものが一般に古く、複雑さを増すものが新しいといった観点も、厳密な形での論証はこれまでなされていない。従って、こうした状況を見た場合、これら土器群の絶対年代を積極的に根拠付けできるものが、北陸および庄内を含めて無いのが現状と言わねばならないし、一般的な年代判定の基準としているものについても、厳密な論証および十分な検証を受けたものでないしなければならない。そこでは、種々の歴史的背景から導かれる相対的年代と、地域毎に集成された一括遺物等の先後関係および製作技術の検討、さらに周辺地域での編年と特殊遺物との言わば交差編年等にたよらざるを得ないのが現状であろうか。

以下では、宅田遺跡の年代を探るために、器種組成とその各形態的特徴の類似性、および技法面での共通性等の観点から、地域内での類似資料を抽出し、その相対的あり方に検討を加える。さらにその輪を北陸的視野にまで広げながらその相対的な年代を検討する。

土師器の内黒壺では、回転ヘラケズリ、手持ちヘリケズリを持つものがあり、遊佐町地正面遺跡に類似品がある（SK143・SE3）。また、壺では、同地正面遺跡（SX11）、余目町上台遺跡他に若干例があるにすぎないが、宅田遺跡出土のものはより前者に近いと思われる。あかやきの壺では、A I類としたやや小形で内湾気味に立ち上る壺と、高台付皿Bに類するものが同じく地正面遺跡（SE3）に各1点認められる。壺・甕・羽釜類では、地正面遺跡（SK4、その他）、上台遺跡（ST2）、境興野遺跡（III層羽釜）、順瀬山1号^(註-40)

窯（場口縁形態に類似品あり。）等に類似品が認められている。次に須恵器壺では、底部切り離し技法に、回転ヘラ切りと、回転糸切りとの2種がある。前者は、A I類にあたり、大きめの底部から直線的に外傾する口縁をもつもので器高は低い。後者は、小さめな底部から開き気味に立上る口縁をもつもので、いずれも地正面遺跡（S X11）に類似例を認める。

高台付壺B I a・B I b類では、遊佐町唐戸岩窯跡や同地正面遺跡（S X11）の一部に
（註-43）
類似例を見い出すことができる。

宅田遺跡では、以上検討した各種別の器種の他、須恵器では蓋・壺・横瓶と思われる破片資料等がある。しかし、全形が不明であり、他との比較は困難である。以上のような出土土器の類例の抽出を行った所、当初予測していた筆者らの心算とは裏腹に、從来から古い様相を持つとして9世紀後半～10世紀初めあるいは10世紀前半と位置付けがなされて来た地正面遺跡S X11やS E 3、および遺跡の主体的時期となる建物跡の時期に用いられたものと近似している事、また、上台遺跡にも類するものがある事等が言えそうである。上台遺跡については從来11世紀前半ないし、10世紀後半として位置付けられて来ているが、改めて白紙の状態から考え直すべき必要性を感じる。筆者等は、吉岡氏の編年に照して地正面S X11出土土器については9世紀前半ないし中葉とする立場をとっている。S E 3その他主体となる造構の時期についても9世紀後半～10世紀前半と考えるのが妥当のように思っているのである。すなわち、黒川2号窯～小袋窯にかけての時期である。また、上台遺跡S T 2の時期についても、10世紀前半～中葉までその位置を廻らせる事が可能ではないだろうか。宅田遺跡の土器群はこうした意味では、地正面S X11よりは幾分新しく、遺跡の主体的時期（S E 3を含む）により近いか同時期すなわち9世紀後半～10世紀前半代の年代が考えられる。とすれば、本来的には須恵器の占める割合もより高率である筈で、さもなければ、何らかの遺跡（地点）自体の性格が関与していると考えざるを得ない。また、年代的根拠の1つとして、須恵器壺類での形態と底部切り離し技法が上げられる。検討に耐え得るだけの十分な資料を得なかったが、やや大きめの底径に直線的に低く立上る口縁をもつものや、同高台付の存在、小さ目の底径から大きく開き気味に立上る口縁をもつ回転糸切りを示す壺等からは、壺類に回転糸切りが一般的に採り入れられた頃からそう遅くない時期（9世紀中葉～後半代）が考えられる。10世紀代では回転糸切りが主体をなすであろう。以上、必ずしも十分な論証とは言えないが、現時点での筆者らの可能な見解を示し、宅田遺跡の年代について考えてみた。こうした年代観は、むろん、これからの調査研究の進展によっては流動する余地が多分に残されている事を最後に明記しておく。

遺跡・造構については、調査が部分的でもあり、また、紙数も尽きた事から十分な検討

ができないが、建物跡については、柱間12尺等間で完数尺を示す事、柱穴の配列が整然と
（註-49）
しSB2の規模がかなり大形である事などからは、近年明らかとなつて来た平安期の庄内
における一般的な村落のあり方とは異なるものであらうと指摘するに止める。
（註-50）

〈註・引用・参考文献〉

- 註-1 佐藤庄一・野尻 健・安部 実（1982）「地正道跡・前田道跡・犀川道跡・佐藤道跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第51集・山形県教育委員会
- 註-2 小野 忠「城輪道跡」『月刊考古学ジャーナル』1月号（1999）他
- 註-3 佐藤庄一・安部 実等が考へ出されたもので、「城輪道跡・周辺道跡で検出される道跡などの剖面的な資料と、相対的な道跡位置と城輪道跡からの距離によつているとの関連性を受けた。
- 註-4 小野 忠氏の考へで、条里閑道名（『…目』の付く地名）と古代尺の換算から100mを基準にするのではないかとの御教示を受けた。
- 註-5 佐藤庄一・野尻 健・安部 実（1982）「北田道跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第53集。P45。表-2「庄内地内井戸跡出土例一覧」他
- 註-6 1に同じ。佐藤庄一他（1982）
- 註-7 清谷幸雄（1978）「東北川郡鶴島町平形道跡第7次発掘調査現況説明会資料」山形県教育委員会・鶴島町教育委員会
- 註-8 1979年、分布調査のおり現地踏査。庄内、興道工事により破壊された便道部分から出土したと思われる遺物片多数を、庄内教育事務所埋蔵文化財調査室で安部英実らの御研究にて見出する機会を得た。
- 註-9 1978年、勝原出土のあかやき土器類（彌・提・瓶）の探査中、興道博物館に所蔵されている越後守唐戸岩戸跡出土の遺物を酒井忠一・酒井英一氏の御好意で見出し、実測させていただく機会を得た。
- 註-10 異論としての「あかやき土器」・「赤陶土器」の認識はより一般的になつたもの、製作技術や体系、工人と生産群といった問題追及と認識は意外と行われていないのが現状である。
- 註-11 あかやき土器の発掘については、赤陶土器の土器を中心に半十分ながら行った事がある。阿部明彦（1979）「山形県喜多方市上台道跡の竪穴住居跡と出土土器について」P44。5. あかやき土器について「庄内古事記学年号」
- 註-12 あかやき土器の作業体験については、明確に証されてはいない。ここでは、平安時代初期なし。それ以前（奈良時代）の須恵器製作技術から派生し、平安時代に渡り独自の系統を確立するとの見通しをしていている。その根拠は、あかやき土器の技術的統一と須恵器製作技術との比較、収集調査の差異を示す土器等があげられる。秀一郎・家田（1982）が指摘したように、須恵器におけるなり方と特徴・検証しなければならない。
- 註-13 小原邦代（1976）「東北地方における平安時代の土器について二、三の問題」『東北考古学の諸問題』
- 註-14 吉岡雅裕（1967）「遺跡の断面的考察」P44～5「加茂三浦道跡の研究」
- 註-15 14に同じ。
- 註-16 鳥島忠平・博正本・舟崎久夫（1974）「波戸川高麗道跡・入善町「ようべのま道跡発掘調査報告書」富山県埋蔵文化財調査報告書III
- 註-17 鶴田富士夫（1974）「富山県立山古瀬跡群」『古吉学ジャーナル』7月号。No.97
- 註-18 博正本・上野義・山本正敏・佐藤正洋・松本幸一（1980）「富山市魚津郡佐伯町道跡発掘調査概要」富山県教育委員会
- 註-19 吉岡雅裕（1965）「石川県河北郡黒川町2号窯址」『日本考古学年報』12期。
- 註-20 博正本・岸本敏穂（1975）「入善町「ようべのま道跡発掘調査概要」（3）」入善町教育委員会
- 神保幸造・井村吉信（1981）「入善町「ようべのま道跡発掘調査概要」（4）」入善町教育委員会
- 岸本敏穂・山本正敏・島島吉信（1982）「入善町「ようべのま道跡発掘調査概要」（5）」入善町教育委員会
- 註-21 22・23 16に同じ。
- 註-22 木下貞一・木下貞男（1977）「鶴来前谷闇跡整備地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」南中牟坂道跡・西中牟坂道跡・坂田五輪町道跡」下田村教育委員会
- 註-23 土井義典・中川成夫・川上真雄（1973）「新潟県北蒲原郡坂戸村御塗跡群の調査」立教大学文学部考古学研究室調査報告1 立教大学文学部考古学研究室
- 註-24 阿部明彦（1979）。川崎利夫（1979）「西田町鶴山1号窯の須恵器」「さあい」第3巻。第2号
- 註-25 家庭順一（1982）「鶴田町文化史報告」（四）「曾根道跡II」南浦原郡鶴田町教育委員会
- 註-26 佐藤庄一・野尻 健・安部 実（1982）「地正道跡発掘調査説明会資料」山形県教育委員会
- 註-27 19に同じ。吉岡雅裕（1965）他
- 註-28 佐藤清掌（1968）「庄内川流域出土の珊瑚系陶器」『庄内考古学』第17号他
- 註-29 7に同じ。浜谷孝雄他（1978）
- 川崎利夫・野尻 健・長橋義・高橋正（1980）「平形道跡・周辺道跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第36集 山形県教育委員会
- 註-30 阿部明彦（1978）「地正道跡発掘調査説明会資料」山形県教育委員会
- 川崎利夫（1980）「城輪道跡の道跡—般歴の奥義解説から—」『山形文化』112号
- 伊藤博幸（1984）「鐵城城と古代山城と計画構造」『日本史研究』215号
- 註-31 平川 南（1977）「出羽國府跡」『研究紀要IV』多賀城調査研究所
- 註-32 1に同じ。佐藤庄一他（1982）
- 註-33 川崎利夫・野尻 健・安部 実（1982）「閑道跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第47集 山形県教育委員会
- 註-34 川崎利夫・野尻 健・安部 実（1984）「芋谷谷地道跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第49集 山形県教育委員会
- 註-35 名和道跡（1978）「上台道跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書第14号』山形県教育委員会
- 註-36 佐藤庄一・野尻 健・安部 実（1982）「北田道跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第53集 山形県教育委員会
- 註-37 佐藤庄一・野尻 健・安部 実（1983）「上田道跡」『新井・土木事業所道跡跡は鉄城跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第52集 山形県教育委員会
- 註-38 佐藤庄一・野尻 健・安部 実（1983）「後田道跡」『鳥井事業所閑道跡』（2）『奥義解説』山形県埋蔵文化財調査報告書第64集 山形県教育委員会
- 註-39 佐藤利夫・野尻 健・安部 実（1981）「境野道跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 山形県教育委員会
- 註-40 佐藤清掌（1971）「西田町鶴山4号窯跡」『山形史研究』第7号・仙台市古文書記念特集一・川崎利夫（1979）
- 註-41 9に同じ。
- 註-42 あかやき土器が、I・II層、IV・V層、SK7とともに、遺物土器群に占める割合が50%以上あった事から、当初平安後期かと考えていた。整理が進むにつれて、古い標本を持つ事で判別できる。
- 註-43 佐藤庄一（1979）「山形県における土器標本（子宮）」『庄内考古学』第16号
- 註-44 11に同じ。阿部明彦（1979）
- 註-45 小野芳孝（1975）「金沢市東山道跡の道跡群とその歴史的性格」『石川県考古学研究会誌』第18号
- 註-46 14に同じ。吉岡雅裕（1965）7-67 P47-48に依った。
- 註-47 宮本昌二郎（1974）「北陸の往來と両道跡」P168 高橋忠平編（1974）所収
- 註-48 阿部義平（1978）「古代出羽の土器調査食堂一の前道跡とその周辺」『日本史紀』8月号他

図版 1



遺跡遠景



調査風景 (4)



調査風景 (1)



調査風景 (5)



調査風景 (2)



建物跡



調査風景 (3)



説明会風景

图版 2



遗物出土状况（1）



遗物出土状况（5）



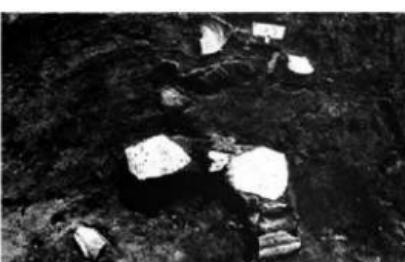
遗物出土状况（2）



遗物出土状况（6）



遗物出土状况（3）



遗物出土状况（7）

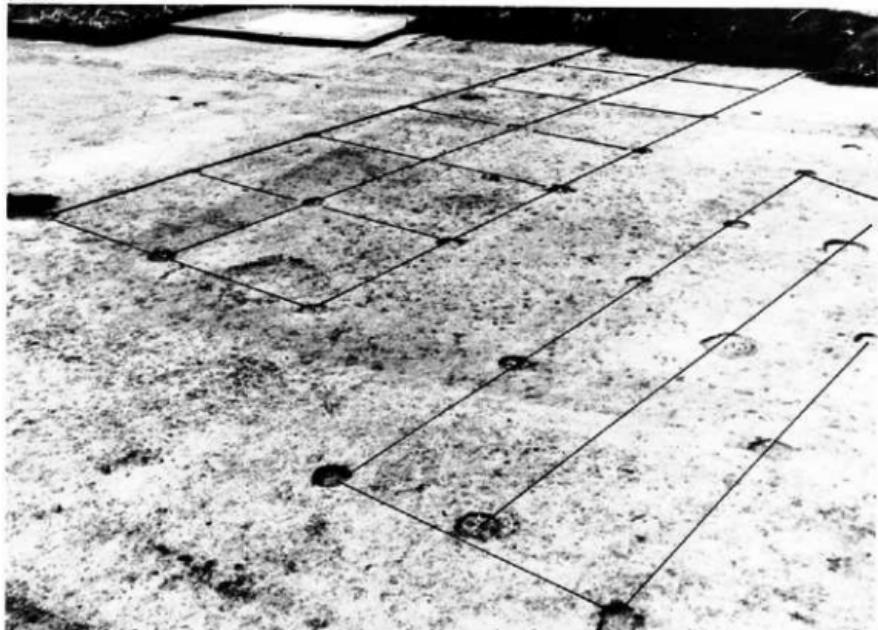


遗物出土状况（4）

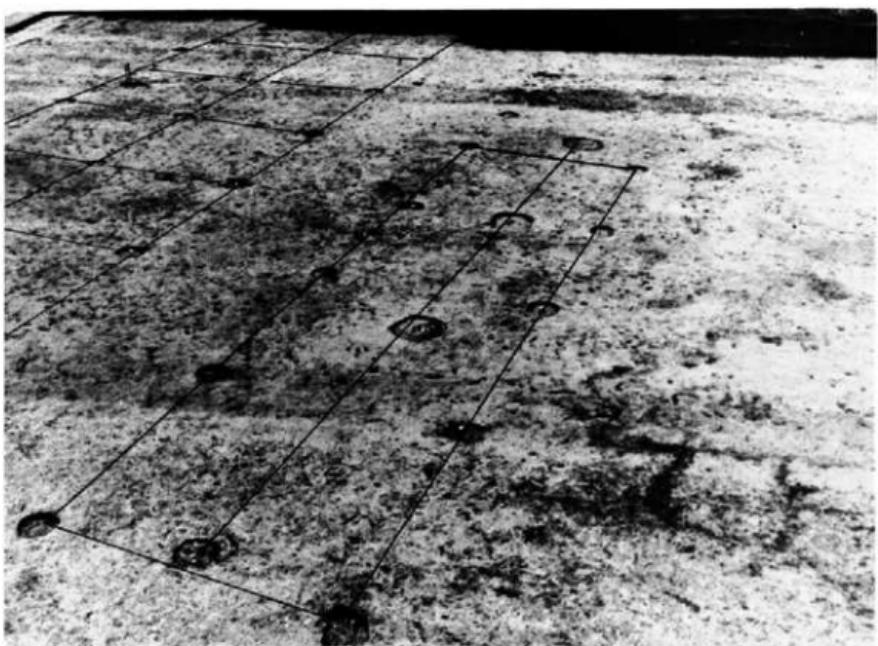


遗物出土状况（8）

図版 3

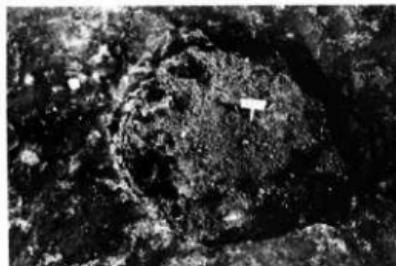


SB2・SB3 (北東から)

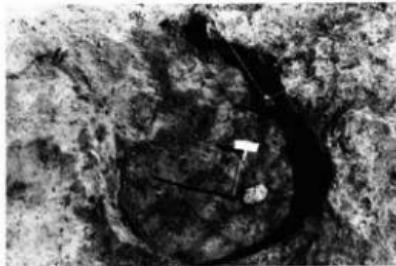


SB3 (北から)

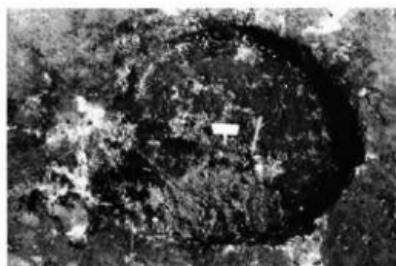
図版 4



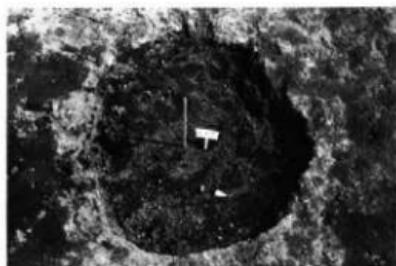
SB2EP1



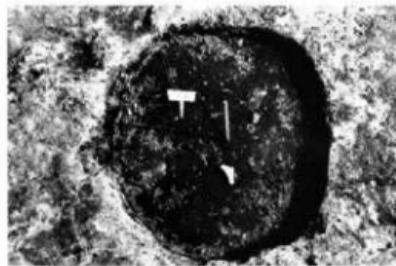
SB2EP5



SB2EP3



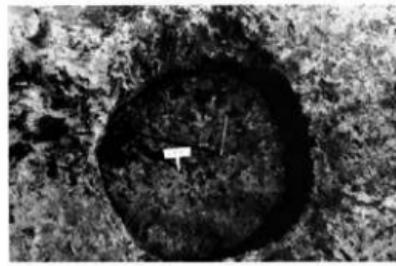
SB2EP7



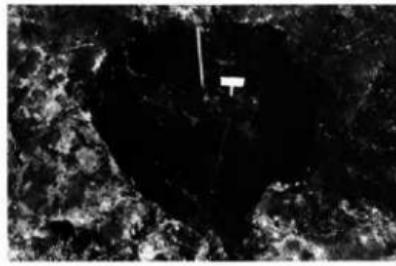
SB2EP4



SB2EP8

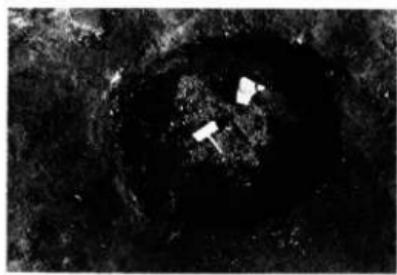


SB2EP5



SB2EP10

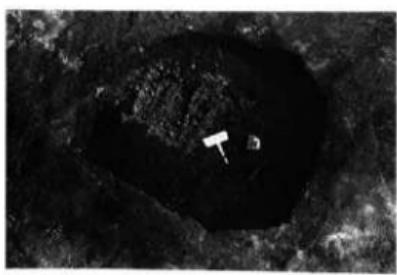
図版5



SB3EP19



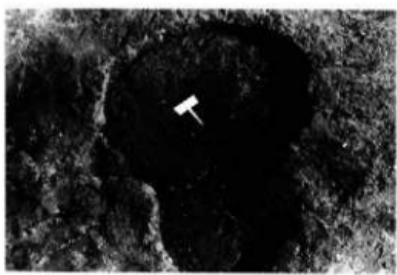
SB3EP23



SB3EP20



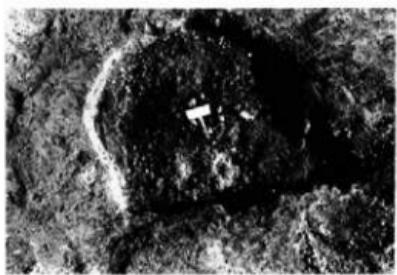
SB2EP24



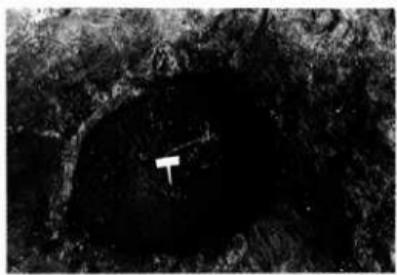
SB3EP21



SA6EP25



SB3EP22



SA6EP25

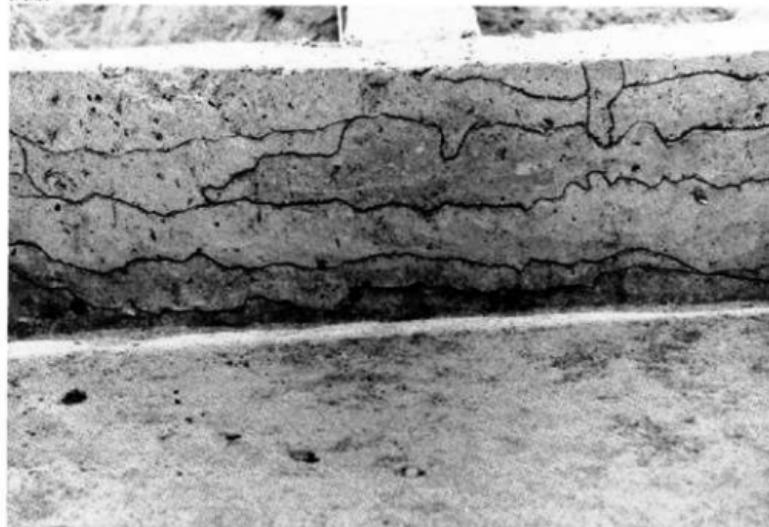


SD1全景（北東から）



SD1・SD4土層断面（南西から）

図版7

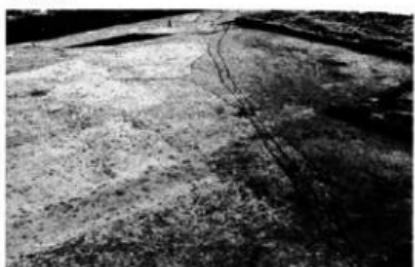


SD1土層断面（東から）

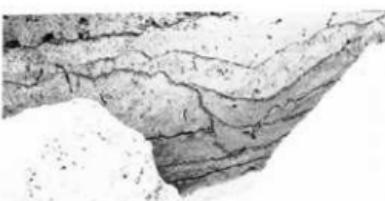


SD1土層断面（南から）

図版 8



SD1・4



SD4土層断面（北から）



SD4の発掘状況

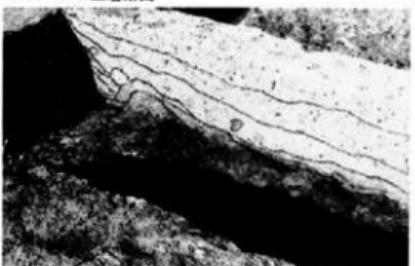


SD4

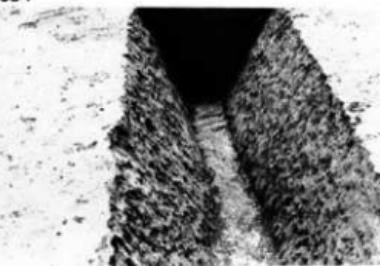


SD4

SD1・SD4 土層断面



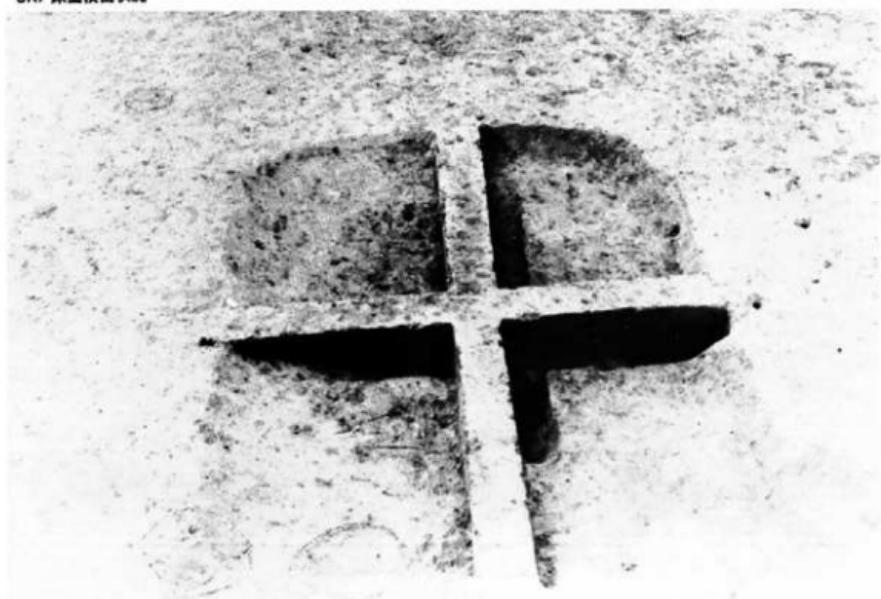
SD4





SK7 遗物出土状况

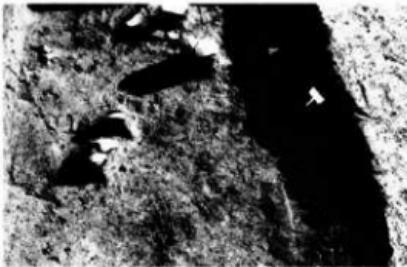
SK7 床面检出状况



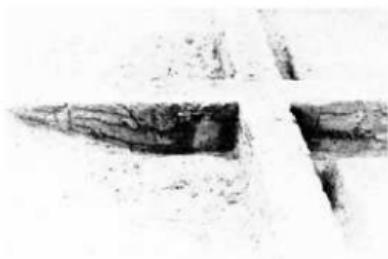
図版10



SK7 基底面検出



SK7 内遺物出土状況



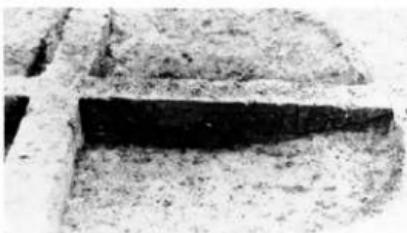
SK7 土層断面 (1)



SK7 土層断面 (2)



SK7 土層断面 (3)



SK7 土層断面 (4)



SK7 床面検出状況



SK7 完整状況

図版11

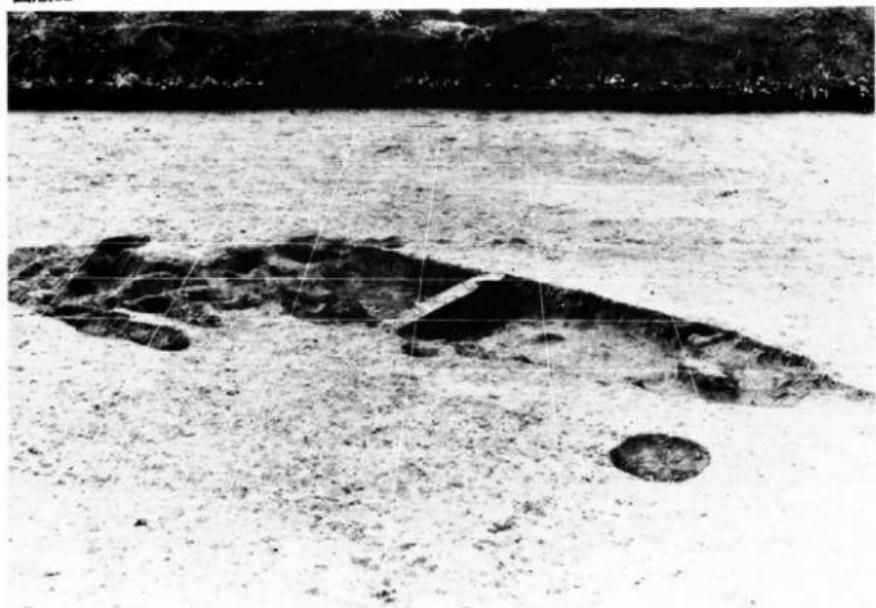


IV層面掘下げ部分



III層上面の状況

图版12

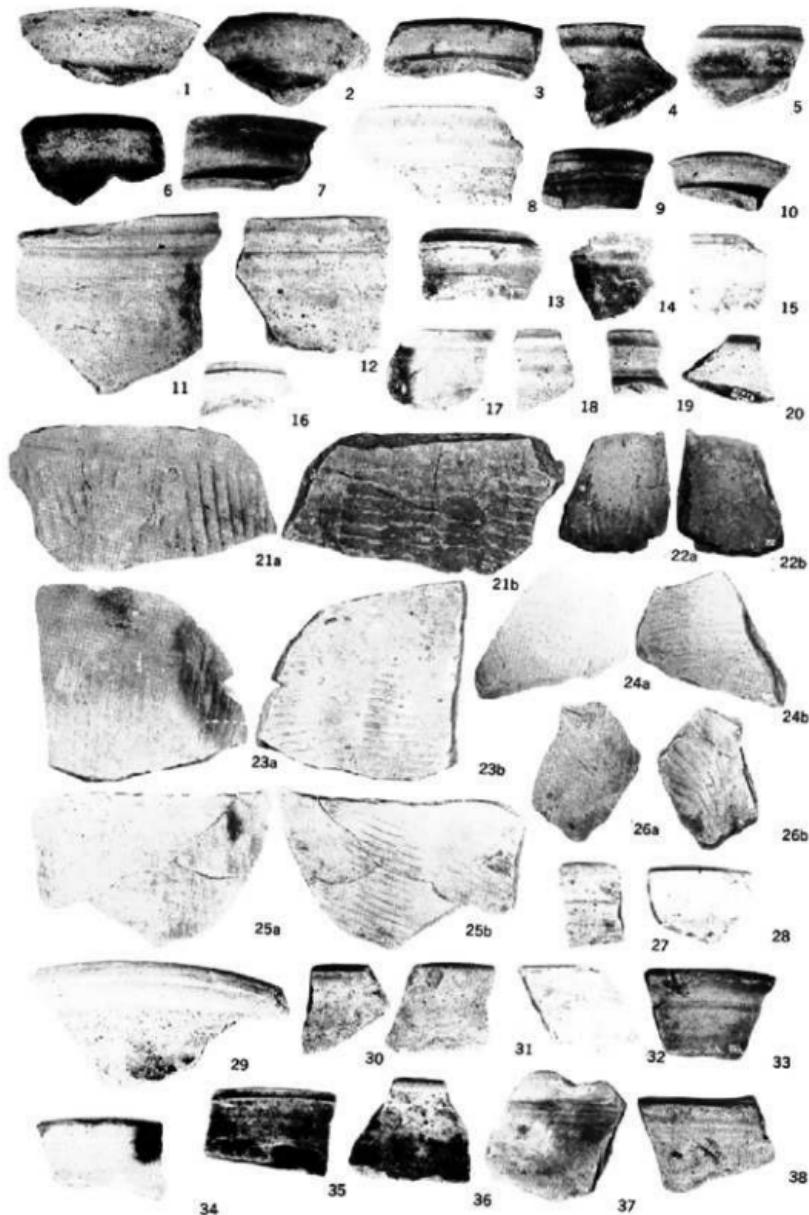


SX8 检出状况



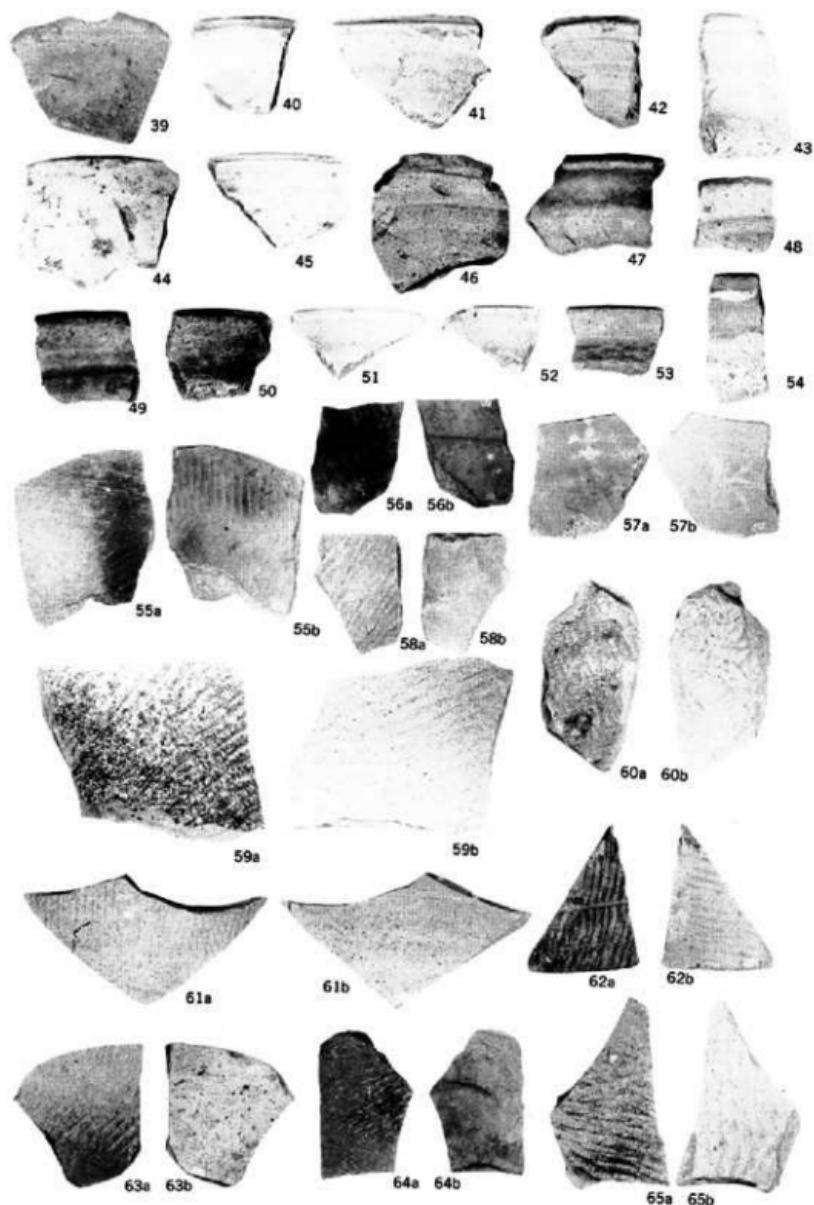
EP32 检出状况

図版13



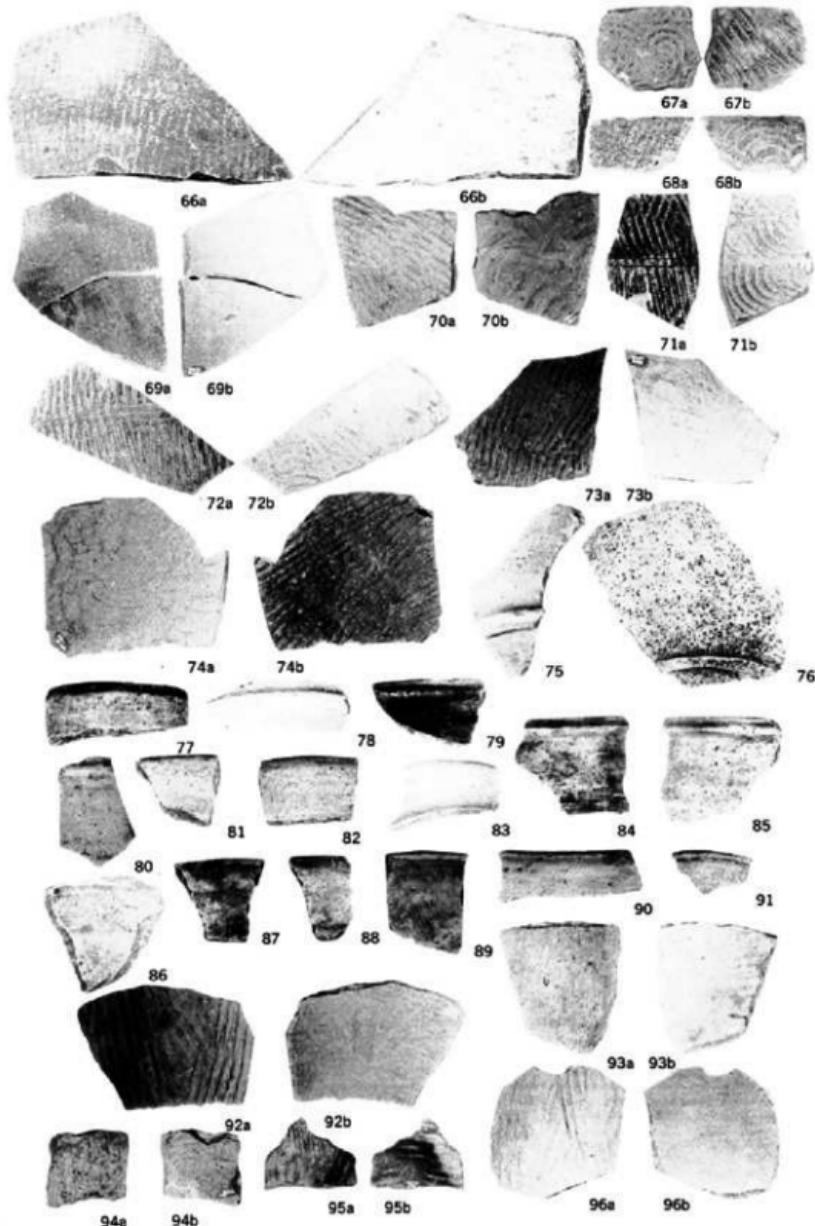
I～III層出土あかやき壺・鍋 (1/3)
1～26：壺 27～38：鍋

図版14



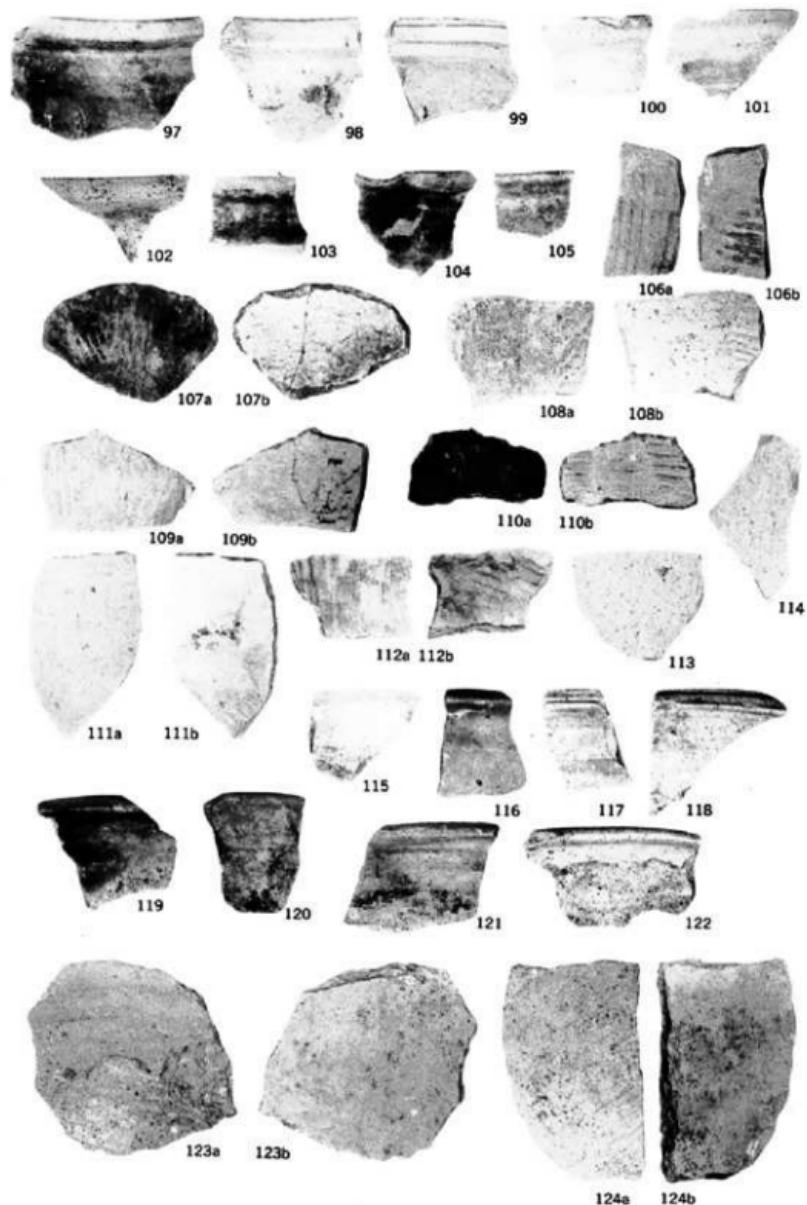
I～III層出土あかやき場・須恵器壺・甌 (1/3)
39～58：あかやき場 59～65：須恵器壺・甌

図版15



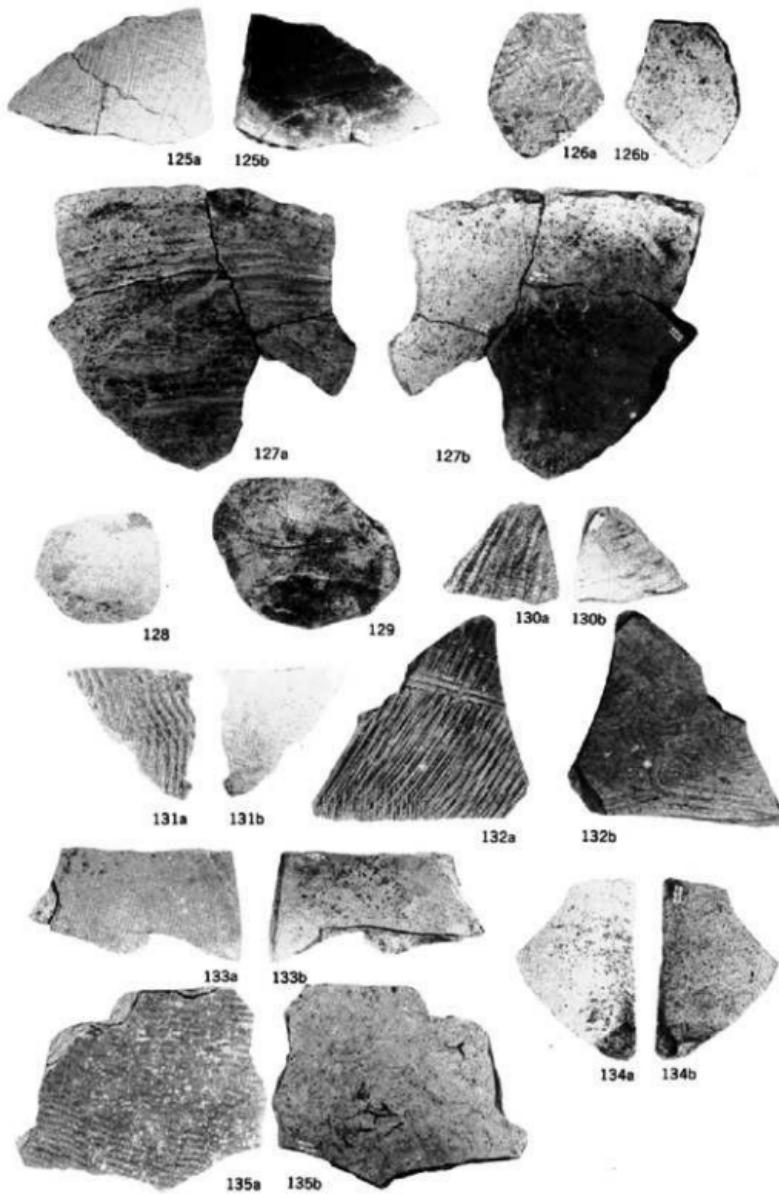
I～III層・SK7 出土須恵器壺・甌・あかやき甌・壺 (1/3)
66～75 : I～II層 77～96 : SK7

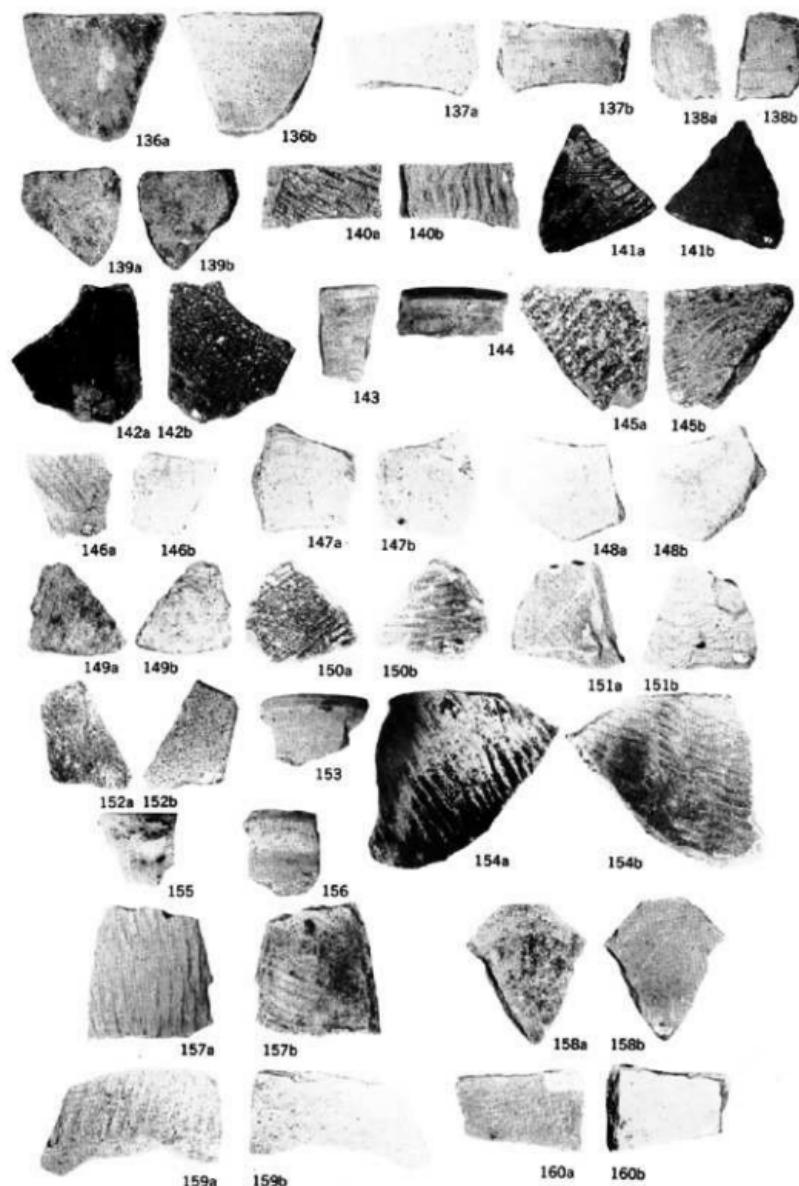
図版16



IV層出土あかやき壺・堀 (1/3) 97~114: 壺 115~124: 堀

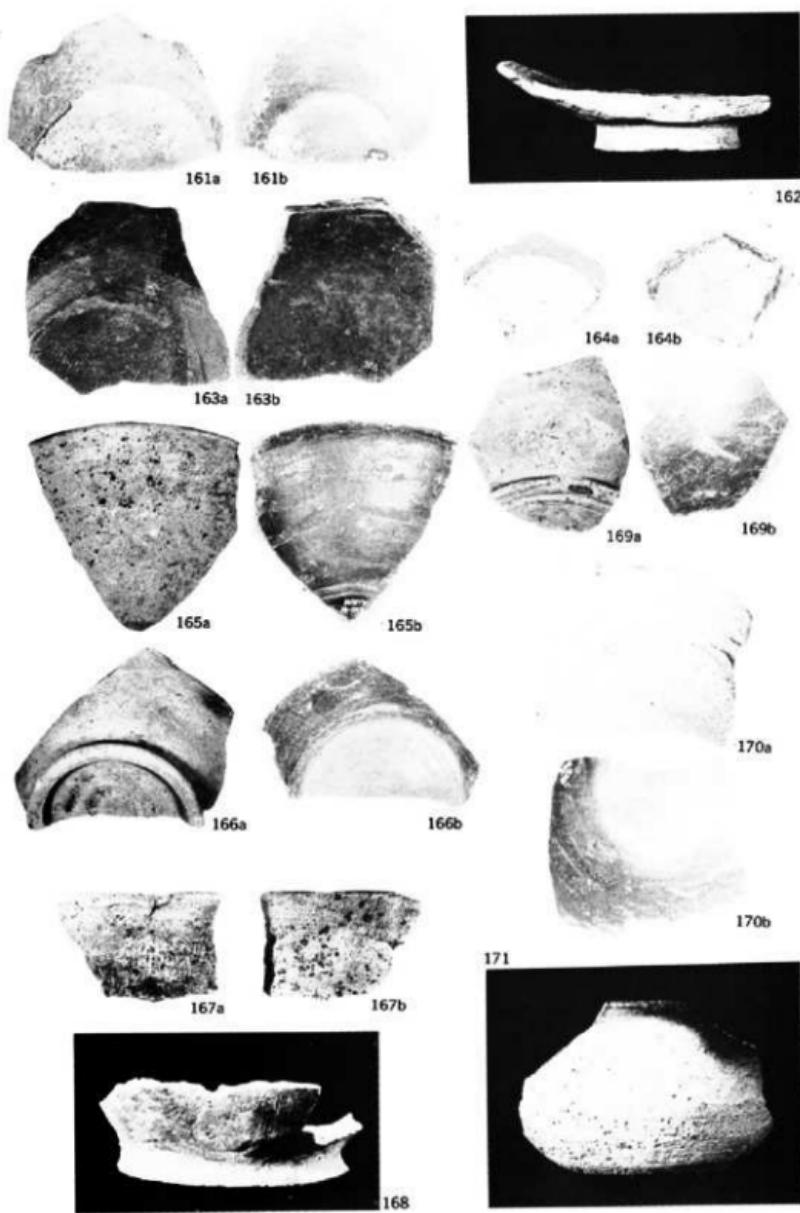
図版17





通構内出土須恵器壺・甌・あかやき甌 (1/3)
136~142:SK7 143~145:SD1 146~153:SD4
154~157:EP1 155:EP39 156:Sx8 158~160:EP32

图版19



I ~ III · IV 层出土土器内黑环 · 壶 (1/2)
161~168: I ~ III 层 170 · 171: IV 层

図版20



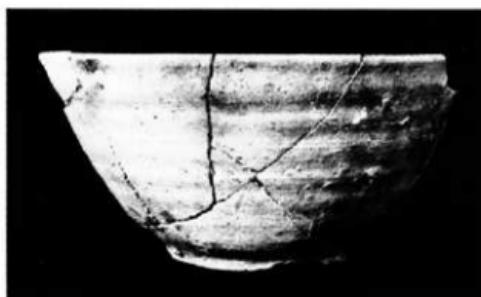
172



173
(EP32)



174



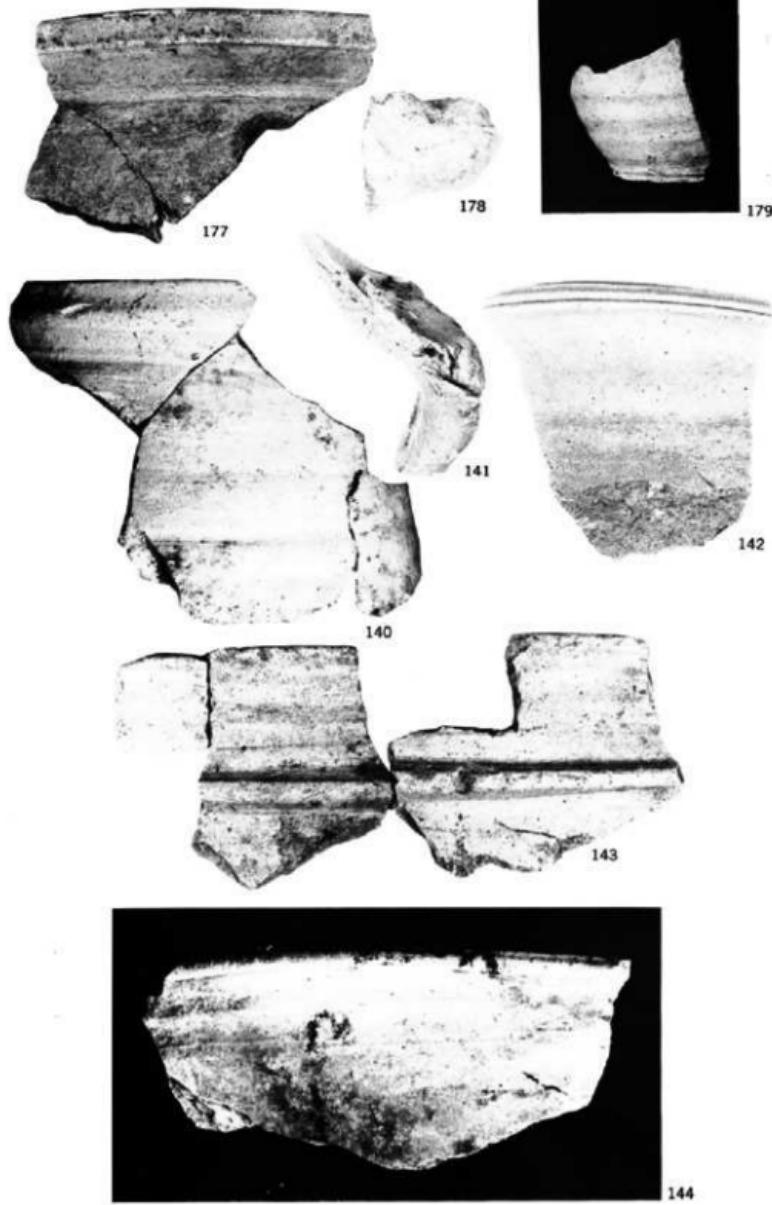
175



176a

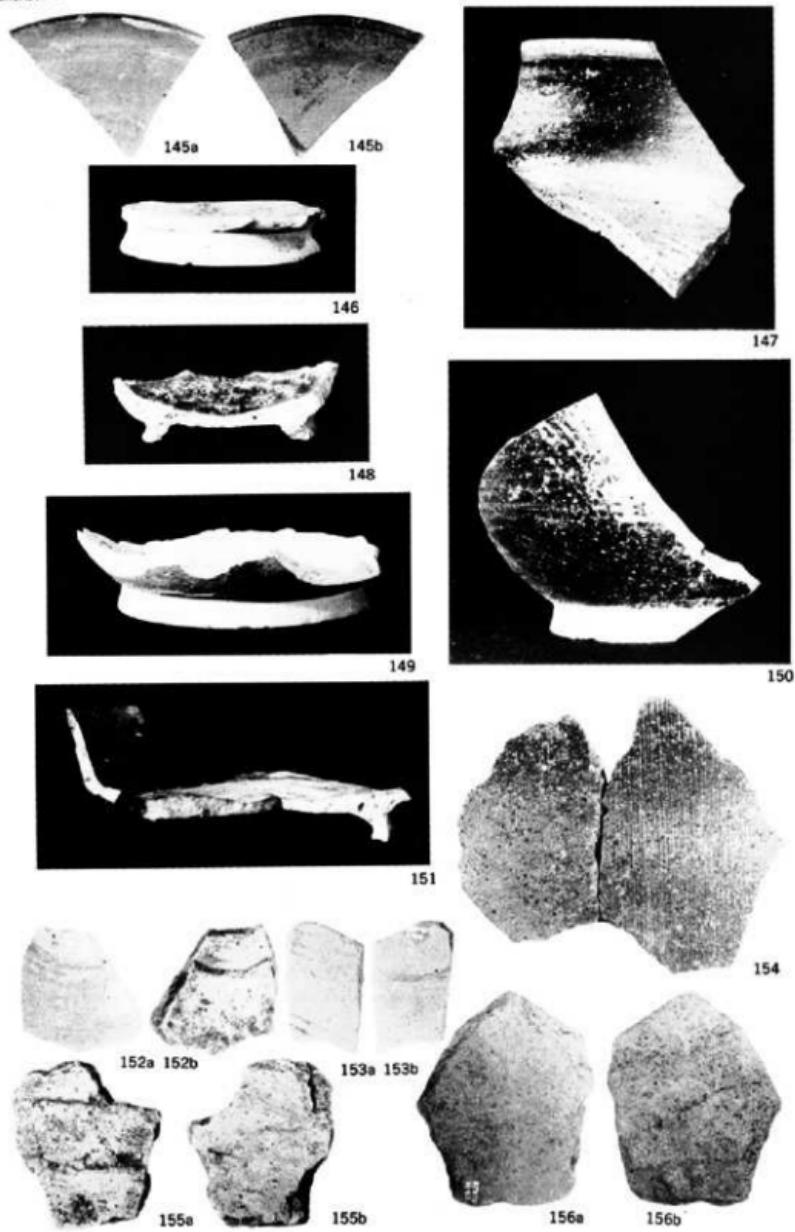


176b



I～III層出土あかやき場・羽笠・甌・把手・脚 (1/2)

図版22



I～III層出土須恵器・製塙土器 (1/2)



157



158a



158b



159a



159b



160



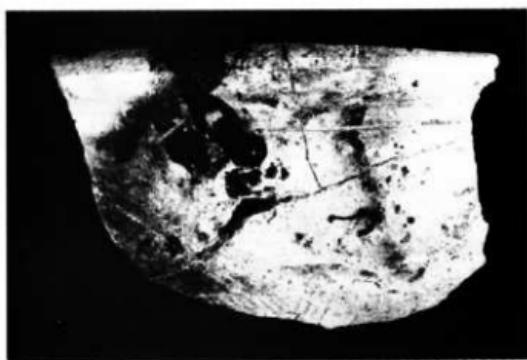
161



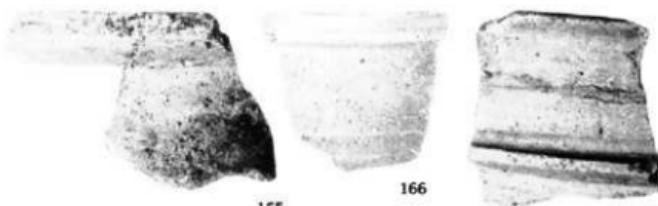
162



163



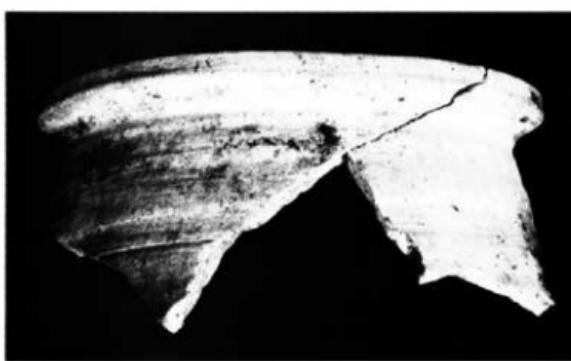
164



165

166

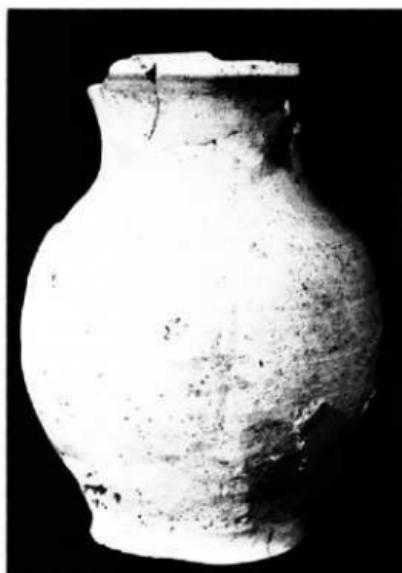
167



168(RP12)



169



170a



170b



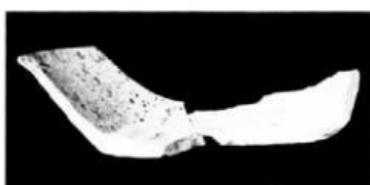
(墨書き部分拡大)



171

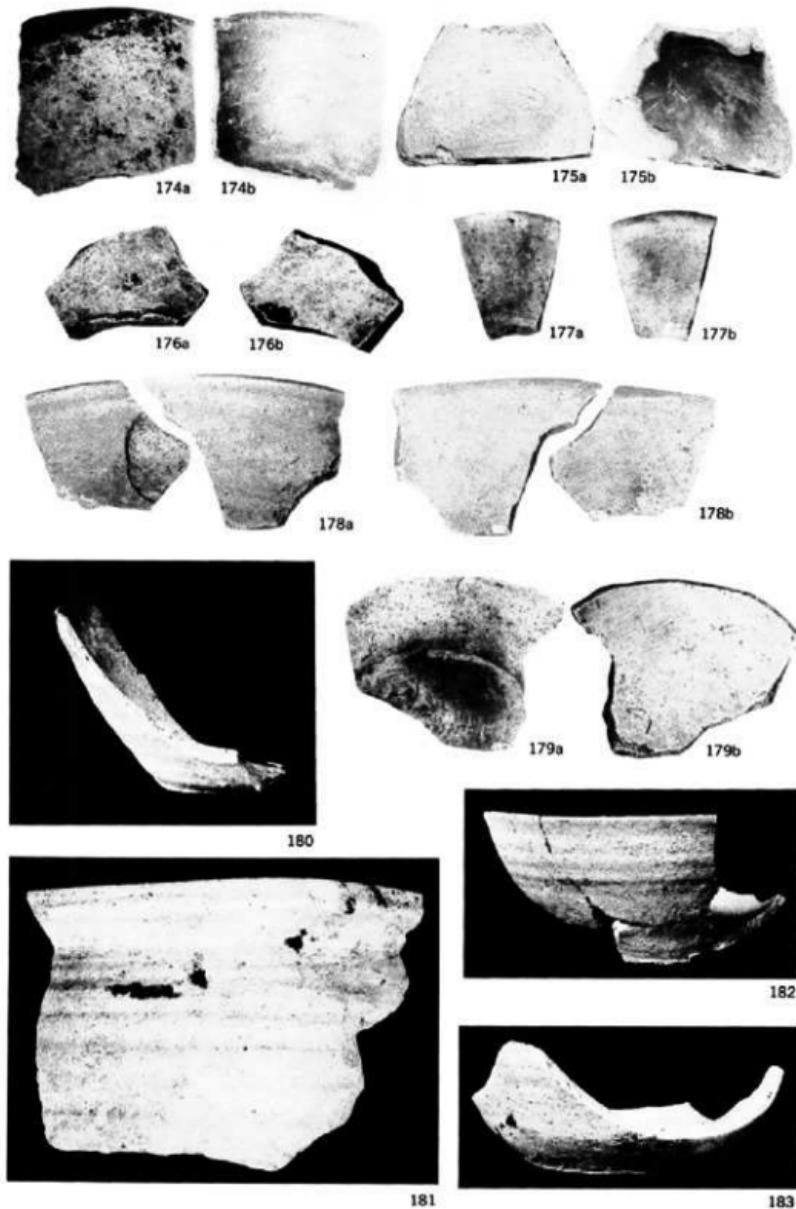


172

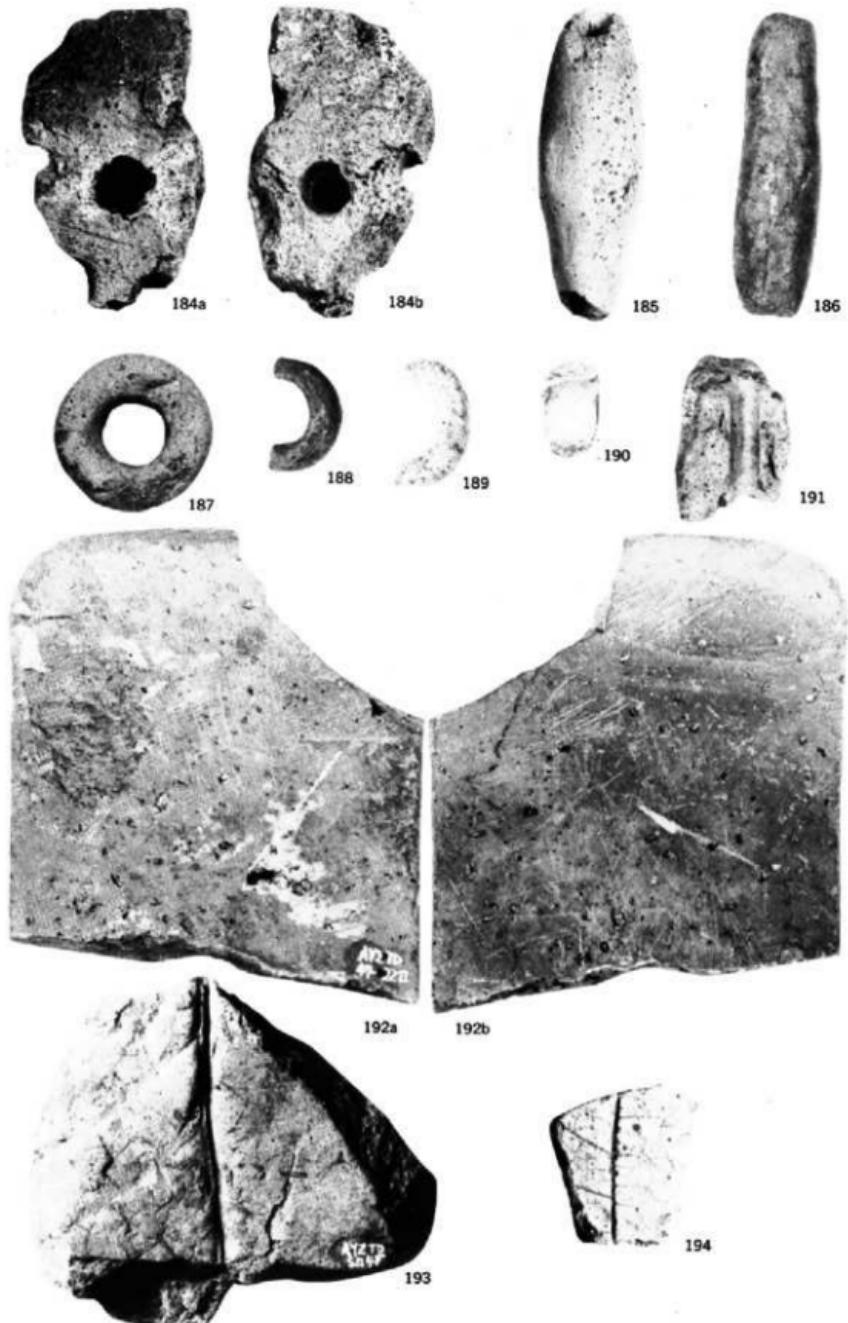


173

図版26

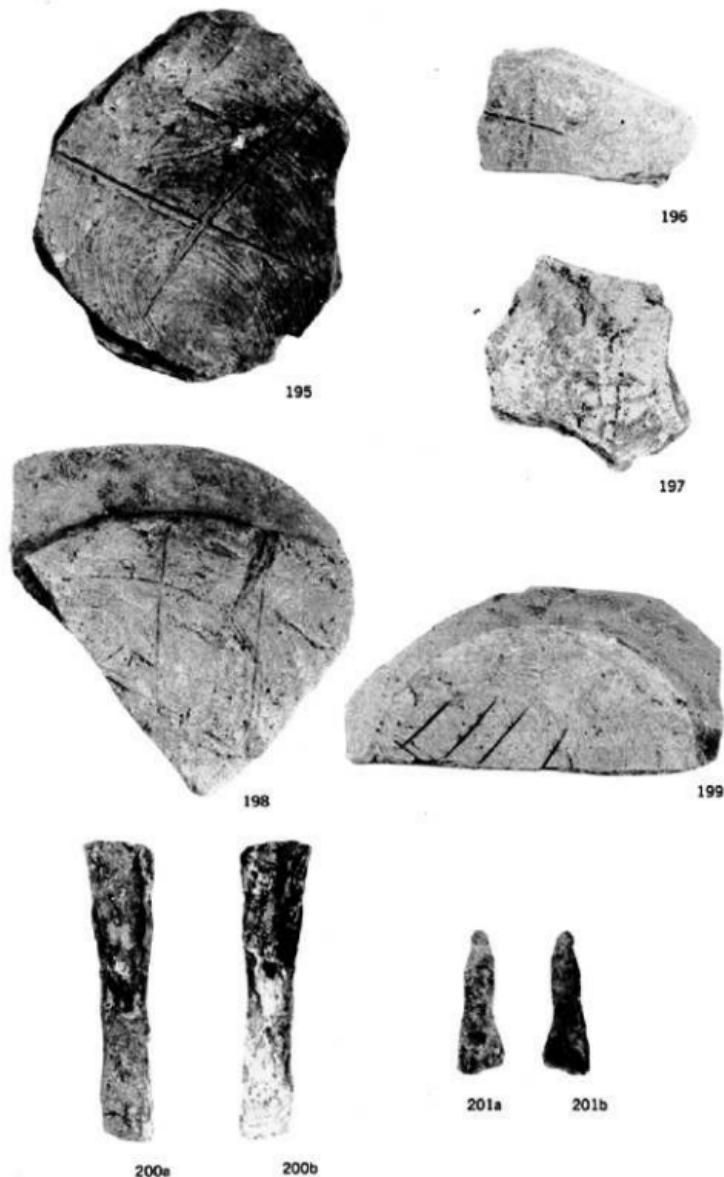


SK7出土土師器坏・あかやき坏・甕 (1/2)



土製品・石製品・土師器底部木葉痕（実大）

図版28



あかやき杯底部ヘラ指 (実大)・鉄製品 (1/2)

山形県埋蔵文化財調査報告書第72集

たく だ
宅 田 遺 跡

発掘調査報告書

昭和58年3月28日 印刷

昭和58年3月31日 発行

発 行 山 形 県
山形県教育委員会

印 刷 梶 大 風 印 刷